
ガリア

克太タツミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガリア

【Nコード】

N7577E

【作者名】

克太タツミ

【あらすじ】

謎の石「トウンボ」の発見により、18世紀から分岐した20世紀のヨーロッパ。その石の力によって動く鋼鉄人形「ガリア」は、偶然から、ある魂が宿る事で甦り、意志を持つ。そして自分の中の魂に従い、ある男を殺す運命を担う。その相手とは、遠い昔自身自身を創った産みの親、そして魂の肉体を奪った男、科学者のゾッドだった。

序章

「お前、よそ者かい？」

藍色の空が茜に変わる頃、通りを歩いてきた男に老婆が声をかけた。町はまだ暗闇に包まれひっそりとしていたので、男は自分以外の人間がいるとは考えてもみなかった。だがそれでも男は驚きを微塵も見せず、ただその存在に敬意を表して立ち止まり、老婆の質問に黙って頷いた。

「ん？そんなことより私が何をしているのか聞きたいって具合かね？」

男がうなずくそぶりに老婆は気づかなかった。それは暗闇だけのせいではない。

「私はね、死がやって来るのを待っているんだよ。毎晩ね。でもどうやら今晚も来ないらしい……」

「死にたいのか？」

男は言った。老婆には男の声が妙にくぐもって聞こえたが、気にはしなかった。

「ああ、そうさな。だがお前は死神じゃあないね」
「殺して欲しければ」

老婆はすぐにその言葉を断ち切った。

「お前が？私を殺す？嘘を言い。お前にはできまいよ。フン！確かにお前には殺気がある。だけどその相手は私じゃあない。分かるよ私にはね」

老婆は懷から、こぶし大ほどの水晶球を取り出して見せた。というより、それは懷から勝手に飛び出し、得体の知れない力で宙にフワフワと浮いた。

「水晶がね、妙に騒いだんだ。お前が通りかかった途端にさ。未だに力を失わないでいる貴重品でね。お前の心の中を少しばかりは感じ取ることができるんだよ」

「それは…」

「トウワンの水晶だよ。フツッ…それにしてもこの時代に人殺しとはね」

老婆はクツクツと笑った。

「俺が人殺しを？」

「そうさね。水晶はそう告げているね」

老婆は見えることのない瞳を男に向ける。だが男は首を左右に振った。

「それは間違いだな。殺したいと思っているのは俺じゃない。俺の中に宿る者だ」

それを聞いた老婆は突然、大声で笑いだした。その言葉の一体どこに可笑しさを感じたのか…

「ハー笑わせてくれる…。同じことさね。だけどね、人などいくら殺した所で変わらないよ。放って置いても人の世は間もなく終わるんだ。私はそう思うね。だから私も死を待つんだよ」

「人の世がどうなるうと俺には関係ない」

男は老婆に背を向け、再び歩きだした。

「だがね、最後に一っだけ言わせてもらうよ。お前には懐かしい何かがある。とつくの昔に忘れかけたはずの幼女の頃の夢をね…思い出したんだ。『失われた時代』よりも昔。活気に満ちた時代の匂いがお前にはある。なんだい、行くのかい？」

「ああ…」

最後に老婆は行った。

「さようなら」

「サヨウナラ…」

男はつられるように言うと、止めていた足を再び陽の昇る方へと向けた。

山にかかる雲間から最初に飛び出した幾筋もの陽光が、煉瓦造りの町並みを 四角い白い壁を照らした。やがて光は壁をつたい降りて、男の顔を正面から照らす。その顔は無表情で…瞳だけが悲しみと、それでも冷めることのない情熱を宿していた。

目の暗い老婆は、最後まで気づくことはなかった。男が鋼鉄の仮面を被っていたことを。そしてそれが実は仮面などではなく、素顔であり

人間でもないことを…

ルカ

強烈な夏の日差しを受けて町並みは白く輝き、ひと気のない目抜き通りに、セミはせめてもの奉仕とばかりにがなり立てる。そのどこか寂れた光景は、この町の規模からすればなんとも不釣り合いだった。それは暑さのせいだけではない。なぜならこの町がコバルトの海と白い砂浜という、最高のロケーションを持ちながらも人を呼ばないからだ。だがそれはこの町に限ったことではない。活気という言葉が前世代の産物となってから久しく経つ。今はそんな時代だ。歴史の分岐点となった日から、百五十年の歳月が流れていた。

大きな荷物を背負った茶褐色の肌を持つ少女が、町の中央で立ち止まった。その荷物にも拘わらず、背筋はピンと伸びている。

「さてと、この辺りでいいかな」

町全体に漂う空気というものがある。それに反するものは、町の人間ならいずれ出て行くし、外部の人間ならばすぐにそれと知れる。そういうものだ。少女がよそ者であることはすぐに知れた。町の人々は近寄るでもなく、ただ黙って、個々に観察を続けていた。それが自分たちにとって害とならないかを、見極めるために……

少女の肌の色は別に珍しくもなかったが、ほっそりとした俊敏そうな四肢を恥じらいもなくニョキりと出し、首、二の腕、手首、足首を、色とりどりの硝子ビーズで巻いて飾り立てたその姿は、この町の人間にしてみればかなり異質だった。それに毛先の揃っていない大雑把なショートボブの黒髪は、お世辞にも女性らしいとは言え

ない。

かつては教皇領と呼ばれ、今も保守的な思想の抜けないこの町の空気とはあまりにも違いすぎる。とはいえまだ少女のすること。害はないと判断した町の住人の一人が、声をかけた。

「ずいぶんと若い行商人だな。一体この町に何を売りに来たんだ？」

少女は、赤い敷物の上に次々に商品を陳列していく。敷物の四隅には、綺麗な深い青の刺繍が施されていた。

「あー、目玉商品並べてから聞いて欲しかったなあ。売り物は見ての通りよ」

少女は全く手は止めずに言った。かなり手慣れている。

「ン…装飾品だな。女モノか。だが言つとくがこの町じゃそういうのはあまり　ああ、他にもあんのか」

男が見てるうちに、少女は生活雑貨品を並べ始めた。フォークやナイフといった小物が多く、派手ではないが綺麗な彫金が施されている。それは確かに目を引いたが、男にとって特に興味を引くものではなかった。

しかし、男はあるものに目を止める。

「こりゃあ、何に使うもんだ？見たことないぜ」

男は、六個の金属球がそれぞれ紐で吊された謎のものを、手に取って言った。

「ああ、これはね　」

少女は男の手からそれを奪い返し、地面に置くと、ブラブラと揺れる金属球を手で制して止めた。

「見てて」

少女は横一列に並んだ金属球の、一番端の一個を真横に持ち上げ、手を離れた。引力に従いブランコのように弧を描いたそれは、横一列に並ぶ他の金属球に当たった。力は次々に金属球を伝達して、逆側の金属球一つだけが弾かれる。そして弾かれた金属球が元に戻って、横一列に並ぶ金属球に再び当たり　　というように、両端の金属球が交互に弾け飛ぶ度に、カチツ、カチツ、と心地よい音のリズムを刻んだ。

「へえ！こりゃあ面白いな」

「面白いでしょ」

少女が感嘆する男に顔を向けて、ニンマリと笑った。

「で？」

男の質問。少女はその意図が理解できずに表情を固めた。

「ああ、だから。で？これは何に使うもんだい？」

「え？って　それだけけど」

「エッ、これだけって　カチカチ音立てて、時計とかじゃねえのかい？」

「違うけど、不満？」

「いや、不満ってーか。その…」

仕事に戻る少女。何やら小さな声でブツブツと言う。男が耳をそばだてると…

「面白いって言ったくせに　大体遊びゴコロってモンがないのよ。最近の大人は…」

眉間はコイル巻きになって、完全にヘソを曲げている。

「あ…えーっと、参ったな。　おっ！それは何だ？なんか凄そうじゃないか。うん、面白そうだ。ハハッ」

わざとらしく声を高める男に対し、少女は何やら、鞆の中から次々と金属のパーツを取り出し、手慣れた手つきで組み立てて行く。少女は男の質問に少し間を置いて、不機嫌そうに答えた。

「面白いのはさっきの商品！言っとくけどこれは違うの。スゴイってのは当たってるけどね。びっくりするわよ」

「そりゃあ、楽しみだな！」

少女は一瞬だけ視線を合わせ、やがて嬉しそうに笑った。男はホツとすると同時に、自分が何で機嫌を伺いながら話し掛けているのか、分からなくなってきた。

「これだけ小さくてパワーを得るのには苦労したわ。見てて」

その謎の機械は火を使うようだ。炉のようなものが下にあり、煙突もある。男は最初、持ち運びのできる携帯型のストーブだろうかと考えたが、なぜこの夏のさなかに？と考えると首をひねった。そんな疑問をよそに、次第に機械の中でキコキコと何かが動き出す。更にシュッシュ、シュッシュと不穏な音を立て、白い蒸気を吐き出

し始めた。

「お客さんには特別にカバーを外して見せてあげましょうね。本当に特別ですよ、トクベツ！」

少女はニツコリと営業口調。そして冷房の吹き出し口を思わせる鉄のカバーを外した。すると…

「おお！送風扇か。まだあつたんだな。こりや確かに凄い！」
「でしょう！」

送風扇 それは古の人々が暑い夏に涼を求めるのに使った機械で、つまり扇風機のことだ。

「まだ生きた水晶があつたなんてなあ…高いんだろ？」
「トウワン水晶！？違うわよ。だいたいあたしが持つてるように見える？そんな貴重なもの 大体持つても勿体なくて送風扇の動力源にはしないわ。これは蒸気送風扇。百五十年前に滅びた文明が持つていた『蒸気機関』っていう動力で動いてるの。一説にはその文明はトウワン王国よりも優れた技術があつたとされているわ。焚書とか言ったかしら？文献がほとんど残っていないからハッキリとしたことは言えないんだけど。その力を復活させたの！」

少女は少し興奮気味に語り、その余波を受けて男も興奮した。

「あつ！聞いたことはあるぜ。王国に占領される前は、俺の祖先は世界の中心を為す民族だったんだ。婆ちゃんだったかな？優れた技術があつたって聞かされたっけ…。で、お前が復活させたっていうのか？そのナントカ機関ってヤツを」

「お父さんだけだね…それは。でもこれを作ったのはあたしよ。

もつと近づいてみて。けっこう強い風が来るから」

言われるままにプロペラの近くに顔を寄せ、男はいにしえの涼を存分に味わおうとした。がしかし、欠点もあった。

「か、風が…熱い…」

男は少女に汗だくの顔を向けた。暑そうだ。粒状の汗が吹き出している。内燃機関で涼を求めるのは、少し無理があったかも知れない。

「いや、でもそんな問題じゃなくて、ロマンっていうか　その…冬なら暖房として使えるし…。買いませんか？ウチの目玉商品」

ニツコリと営業スマイル。だが男は顔面を両手で覆い、ゆっくりと汗を拭い取る。もはや少女を見もしない。そして大きく一つ深呼吸　というよりため息。顔をゆっくりと左右に振って拒絶し、無言で去って行ってしまった。

「あ、ちよつとオ！」

少女は茫然と立ち尽くす。

「あちちちつ。　もう！」

その背中に容赦なく熱風が突き刺す。慌ててバルブを緩め、圧力を落とした。

「あーん、もう！どうしよう。今夜の食事代も稼げなかったらあ！」

どうやら少女は一文無しらしい。そしてイジけるように小さな声でブツブツとつぶやいた。

「なんでかなあ？トウワンボの力がなくなったなら、それに代わる新しい力を生み出せばいいのに…。蒸気機関！カッコイイと思うんだけどなあ」

少女はベッタリと地面に座り、ただジツと空を仰ぎ見ていた。気が萎えてしまったのだろう。露店の前に立つ男の存在には、全く気づかない。少女よりもわずかに遅くこの町に入った『彼』の存在には…

その男は送風扇を長い間見つめ、やがて少女に話し掛けた。

「おい、お前。エンドラへ行くにはこの道でいいのか？」

その男の声はどこか異質に、少女の脳に届いた。少女は慌てて振り返って男の存在を知ると、その声の、不思議な音色のわけを悟った。

男はこの暑さの中、首の回りに布を幾重にも巻き、顔の下半分を隠していた。しかも体も薄茶のマントで、膝の辺りまでスッポリと覆い隠している。

「暑くないの？」

男の質問を完璧に無視し、少女は思わず訊ねる。この夏のさなか、誰もが思う疑問だ。だがその風貌から、誰もが臆して聞けない疑問でもあった。

不意の質問に男は素直に答える。

「暑いから着てるんだ」

「そう…なの？」

少女は首をひねったが、とりあえず納得することにした。売り込みのチャンスだと気づいたからだ。

「あ、エンドラね。うん、この道で正解。ね、それより何か買っていきませんか？安くしますから…。それにウチには目玉商品というのがありましてですね」

懲りない。

少女は再びバルブを締め、炉に石炭をくべようとすると、男は少女に金貨を差し出した。その手には革の指ぬき手袋。だが驚くのはその下。本来露出するはずの指先と手首が、白い布でグルグル巻きにされている。皮膚という皮膚が完全に隠されているのだ。そしてもう一度、男の顔をよく見なおす。

首に巻かれた布と、赤茶けた髪のせいで見づらいが、間違いない。顔もやはりそう。素顔ではなくて鉄の仮面。それは耳まで覆い、男は一切の露出を拒んでいた。

「このお金…何？買ってくれるんですか？」

少女は抑揚なく言った。瞳は男の顔を捉えて離さない。心も。

「さっき食事代がないって言ってたな。だからこれをやる」

少女は首を振る。

「理由もなくもらえませんか。あたしは物ごいじゃないから…。だったら何か買って下さい。その分の代金なら受け取ります」

男は陳列してある品物に、一瞬だけ顔を向けた。

「欲しいものはない。でもその蒸気機関はさつき見た。俺が今まで知らなかった感情が沸き上がった。その代償だ。できれば受け取ってほしい」

少女の顔色が変わる。

「蒸気機関を知ってるの？」

「まあな」

「良かったの？」

「ヨカッタ？」

「そう。これを見て、デキっていうか、その…ロマンを感じたとか未来を感じたとかさういう…」

「ああ…。良かったよ」

男は金貨をピン！と跳ね、少女の手元に落とした。男は背を向け、歩き出す。

「待って！」

少女は素早く立ち上がり、男の肩をガツシリとつかんだ。やけに固く感じたが気にしない。

「ねえ、あたしもエンドラに行くところなの。一緒に行こう！」

少女の突然の行動に、男の動きは止まった。が

「一緒に行く理由はない」

無愛想に拒絶。

少女は商品を掻き込むように集め、鞆の中に一気に詰め込んだ。送風扇は再びバルブを緩め、そのまま取っ手を握る。男の言葉はまるで無視だ。

「あたしの名前はルカ。ルカ・パンターニ。あなたは？」
「パンターニ？」

かまわず行こうとした男の足が、ピタリと止まった。

「そう。あなたは？」

男は振り返り、しばらく少女の方を見たまま動かなかった。日差し
の陰影が強くて顔は…いや、仮面は見えない。

「ガリア…」

男は答えた。

「下は？」

「下？」

「そう、下の名前」

「……」

男は口籠もった。

「どうしたの？」

「シャ…ゾット…。シャゾットだ」

「ガリア・シャゾットね。分かった。よろしくね、ガリア！」

少女は男の間近まで寄り、顔を見上げてニツコリ笑った。もちろん観察も兼ねていたのは言うまでもない。

男は避けるように、背を向ける。

「分かった。エンドラまでだ」

こうして二人は町を出た。それは変化を嫌う町の人間たちを、そこぶる安心させたに違いない。よそ者に偏見を抱く町の人々。だが去っていく二人の姿を見れば、それを責めることもできないだろう。

町の空気に合わない二人　いや、何よりも全く季節感の噛み合わない二人は、この時代で唯一とっていい大都市、エンドラへ向かった。

蒸気列車砲

「来たぞ！蒸気列車砲だ！フィリップ陛下万歳！」

窓の外、そんな興奮した声を聞いて、ゾッド・シャゾットはイラ立ちを隠さなかった。普段ならどんな喧騒も、持ち前の集中力で打ち消してしまう粘着力のある彼だが、今は違う。心は窓の外に奪われている。思うに仕事が進まない時によくある逃避　というだけの理由ではない。もちろん、それもあるにはあったのだが…

「蒸気列車砲だと？ハン！野次馬どもが。フィリップ王も堕ちたもんだ。一体ヴィクトリアにいくらぶっかけられたんだ？」

それはもうかなり　だが、それでもすぎるしかなかった自国の立場も彼にはよく分かっている。この憎まれ口は単に嫉妬。彼の立場で、最新の技術を見たいと思わないはずがないし、また、それが嫉妬の理由でもあった。なぜなら彼は優秀な発明家　いや、完成品というものが存在しない彼には、『自称』を付けるのが正しい形容だろう。

いつも目指すハードルが高すぎるのが、理由の全てだ。懲りないとも言う。そして、どこから出てくるのか分からない全く根拠のない自信を、白髪が混じり始めたこの歳になっても、未だ維持している恐さもあった。その本人しか預かり知らぬプライドが、蒸気列車砲という、まだ見ぬ最新の好奇心の元を押さえ付けていた。しかし

「待て待て…。と言うことは来るのか、アレが！」

次の瞬間、彼は外へ駆け出していた。プライドを捨てたのかと言えば、そうではない。列車砲のことなど、もう彼の頭にはない。もっと見たいものが来る。

「空中都市！」

ゾッドは、皺くちやの外套を着込みながら叫んだ。それはトウワ
ン人が生んだ信じがたい奇跡。

蒸気列車砲の構造ならば、彼にも大体は想像がつく。個人で作れる規模のものでないだけだ。しかし空中都市など　もちろんこれも個人で作れるわけではないだろうが、何よりトウワン人が生み出したその驚異の技術は、構造が全く想像できないし、信じがたい。自分の目で見ない手はないのだ。

「よくぞ我が町に来てくれたってトコだ。都市が浮かぶなどな。奴ら一体どんなマジックを使ったんだ」

彼は恐れない。例えそれが敵のものであつたとしても。そう。ここは間もなく、敵の戦火に曝されようとしているのだ。

「蒸気機関ではあるまい。その次に来るべき発明だ。クソッ！私が見つけたかも知れんものを。ヤツらは手にいれたんだ。なんとしても秘密を暴いてやるぞ！」

そう言つて、ゾッドは部屋を飛び出した。と、思うと突然立ち止まり、振り返つて自分の未完成の発明品を見た。彼は下唇を噛む。そこにはいくつもの等身大の人形のパーツが、手が、足が、無造作に転がっていた。無機質なはずの顔が、恨めしそうにこちらを見る。そんな気がゾッドにはした。

一瞬の静寂。そして彼は大きく一つため息をつく。それは珍しく見せる、彼の弱気だった。

「やはり無理なのか。スチーム・ドール（蒸気機関人形）を歩ませるなど…」

広場は興奮で沸き立っていた。まるで一昔前にあった革命を思わせる。兵士はおろか、一部の民衆までもが長身銃を手にしているが、彼らは戦うことなど考えてもいない。なぜなら皆が見つめるそれが！彼らにとって最強の兵器の存在が！敵を粉碎することを信じて疑わないからだ。

ブシューッ！

勢い良く蒸気を吹き出すその音には確かに、何びとをも魅了する何かがあった。音だけではない。重厚な鉄の塊が、蒸気と共にゆっくりとレールの上を力強く進む姿。それは市民たちを勇気づけるには充分だったし、この際それが、他国から買い取ったものだという事実はどうでもよかった。人々は口々に叫び、繰り返す。

「フィリップ陛下万歳！」

しかし、発明家のゾッドは見抜いていた。その勇ましく、威厳さえ感じさせるゆっくりとした動きが、列車砲の最高速度なのだといいこと。あまりに長大な砲身と、それに見合うだけの火薬を必要とするこの列車砲では、それほど耐久性は期待できないということなど。つまりそれは、とても完成された兵器とは言えない代物だった。

だがしよせん、それがこの時代の蒸気機関であり、製錬技術なの

だ。『トウワンの奇跡』には遠く及ばない。

「来たぞ！空中都市だ！」

群衆が一斉に見つめる遙か先　霞を押し退けるようにして空中都市は現れた。バベルの塔を思わせるそれは、無数の石を積み上げて作られたと思われる巨大建築物だった。そしてどういう理屈なのか、確かに宙を浮いていた。

ゾッドはその予想以上の大きさに驚愕した。だが同時に、ある疑問を感じて首をひねってもいた。

それはトウワンの奇跡に対してではない。もちろん空中都市から蒸気を噴き出していないだろうことは予期していたし、まだ見ぬ技術が謎に満ちているのは当たり前のことだ。彼が気にしたのは、敵の行動に対してだった。

「なぜ空船が飛び出さん？」

空船　それは小さなふたり乗りの船で、空中都市を浮かせているのと同じ（と思われる）謎の動力によって、文字通り自在に空を飛ぶことができるトウワン王国の攻撃の要　いわば戦闘機だった。熱気球がやっとのこの時代に圧倒的な力で空を征し、数々の戦いに勝利してきたという。

「教皇軍を三日で壊滅させたという自信かよ？だがもしそうならばチャンスはある。空船が見られないのは残念だが…」

普段なら確かに見たものの全てがひれ伏すに足る、十分なカリスマが空中都市にはあった。単に威圧だけで無血占領も可能だったかも知れない。だが、今回に関しては蒸気列車砲という味方側のカリスマが、それを打ち消していた。とはいえ、もしもいつものように空

船の編隊が先陣を切ってきたなら、列車砲は空中都市を射程に捕らえる前に沈黙していただろう。巨大で鈍重な列車砲では、機敏に飛ぶ小型の空船は狙えないからだ。チャンス　ゾッドがそう感じたのは正しい。

空中都市は、地上の都市を押し潰すかのごとく低空で飛行し、その巨体を嫌というほど見せつけている。明らかに威圧だ。実際、群衆のさつきまでの意気はどこへ行ったのか、大きく消沈しかけている。列車砲の存在がなかったら、とうに逃げ出していただろう。だが、逆にゾッドの期待は高まった。

蒸気列車砲はその砲身をゆっくりと上げ、狙いを定める。そして、ブシューッ！という蒸気の吐き出す音と共に止まった。

額から流れ出る汗が目元をつたうのも気にせず、ゾッドはその先にあるものを見た。その瞬間！

ドゴオオオオオオオン！

大気が大きく割れ、固体と化したかのような衝撃波が襲った。

列車砲の轟音と地鳴りは誰の予想をも上回り、人の内に眠る本能が、死さえも覚悟した。列車砲の近くに陣取っていた民衆の一人は、心臓が動かなくなつて果てた。果てることなく生き残った他の人間も、神経が麻痺するに十分なショックだった。

弾の巨大さにも拘わらず、弾道を追える者は誰一人としていなかったが、結果は音で判断できた。爆烈弾の破碎音が響いたのだ。だ　が誰も沸き立たない。静まり返ったままだ。音のショックから立ち直れないでいる。装弾には長い時を要した。ショックから立ち直った者達も、ただその静寂を、列車砲の力をジッと見守っていた。

二発目、そして三発目までそれは続き、止まった。止めたのではなく、実際には大砲の尾栓部の不具合により、弾を打ち出せなかったのだが、ゾッドでさえそれには気づかなかった。三発で充分だったからだ。弾は全て命中し、空中都市からは次々と破片がこぼれ

落ちるのが見える。

「見ろお！暗黒大陸が落ちるぞおっ！」

暗黒大陸　空中都市のことを、多くの者はそう呼ぶ。

誰かが叫んだその言葉通り、空中都市は斜めに大きくバランスを崩した。だがそれでも沈むには至らず、態勢を立て直して高度を上げる。しかし、それが精一杯だった。

「引き返して行くぞ！我々の勝利だ！」

その声に続く。

「勝利だ！勝利だ！勝利だ！」

連鎖的に町中の人間が叫ぶ。空船が反撃してくる様子もない。空
中市からは今もなお、破片がボロボロと落ちている。

ゾッドも思わず叫んだ。

「フィリップ万歳！蒸気機関万歳！」

町全体が叫んだ。泣いた。笑った。抱き合った。そして皆がこの
時、一つになった。

ゾッドにしてみれば、自分の中にこれ程の愛国心が潜んでいよう
とは思ひもしない驚きだったが、実際それは、勝利への快楽という
方が近かったかも知れない。人は誰も勝利の中に身を置きたいもの
だし、何より彼は、町の誰よりも蒸気機関の側の人間だった。今の
ところは…

ともかくこの日、蒸気機関がトゥワンの奇跡に勝った記念すべき
最初の日となり、また　最後の日となるのだった。

城塞都市エンドラ

「一つだけ聞きたい…」

突然、焚火に薪をくべていたガリアがぶっきらぼうに言った。それは二人が行動を共にしてから半日、初めてガリアから発した言葉だった。

「なに？」

少し離れたところで、膝を抱えて夜の海を一人見つめていたルカが、顔だけをガリアの方へ向けた。夜の砂浜は二人の会話を邪魔することなく静かで、時折、さざ波を寄せる程度だった。

「エンドラへは何をしに行くんだ？」

それを聞いたルカは、立ち上がって焚火のすぐ近くに座り直した。悪戯めいた笑みを浮かべている。

「それに答えてほしいならあたしの質問にも答えるべきじゃない？ あたし、この半日つまんなかったな。ガリアってば、なーんにも喋ってくれないんだもん」

「答えないことを聞かなかったからだ」

「別にフツーのことしか聞いてないよ。生まれとかトシとか…」

ルカは何かを思いついて、瞳をクルンと上に向けた。そしてニマァと笑う。

「じゃあ交換条件といこうよ。ガリアの質問に答えてあげる代わりに、あたしの質問にも答えるの。どう？」

「答えたいことならな」

ガリアはコクリと頷いた。

「じゃあ歳は？声の感じだとあたしと同じくらいかしらね」

沈黙　　答えは返って来ない。

「もお！それぐらい良くなーい？それとも何、オジサンとか？あつ！まさかお爺ちゃん？」

「　　お前は何歳だ？」

「あたし？あたしは15歳」

「それじゃあ俺も同じだ」

「それじゃあつて…ホントに？ウソっぽいよ、今の言い方」
「同じだ」

文字通り鉄面皮のガリア。ルカも表情は読み取れない。

「じゃあさ、ガリアはエンドラへ何しに行くの？」

「俺はお前の質問に答えた。お前も俺の質問に答える」

しかしルカはほくそ笑む。悪だくみをする子供の顔だ。

「あつれー？キミ、あたしに何歳だって聞いたでしょ？あたしそれに答えたから、さっきのはそれでチャラ。あたしはもう一つだけ聞く権利あると思うよ？」

一瞬の沈黙の後、ガリアは頷いた。

「分かった……」

「ヨシヨシ。で、何しに行くの？」

ルカは嬉しそうだ。

「エンドラへは目的を果たしに行く」

「目的って？」

「それ以上は言いたくない」

「エッ、もう少し！」

食い下がるルカ。そして鉄面皮ガリア。

「だってさあ、ガリアの答えってあたしにも当てはまっちゃうもの。納得できない！」

四つんばいになってにじり寄るルカ。それでもガリアは気圧されることなく、微動だにしない。そしてこう言った。

「悪いが目的は教えられない。でもそれをしないと俺の心に宿る者が一生苦しみ続ける。俺はそれを解放したい。だからエンドラへ行く」

ルカは眉間に力を入れて考える。

「全然答えになってない気もするけど……まあ、いいわ。ガリアの質問に答えてあげる」

ルカは身を引き、ガリアから離れた。

「あたしは父親に会いに行くの。父は蒸気機関を普及させるために、エンドラで会社を経営しててね……」

「パンターニ自動機械会社？」

「そう！よく知ってるね」

「噂だけだ」

「ふーん……」

少し怪訝そうな顔を浮かべるが、ルカは続けた。

「最初の頃はね、蒸気機関の可能性に誰も見向きもしないって、よく手紙でグチってたの。でも最近エンドラは変わったって 変えたのはパンターニ自動機械会社だって、噂で聞くようになって決心したの。あたしもお父さんの元で働こうってね。でも最近は忙しいみたい。手紙も来なくて……だからその不安を取るのも兼ねてね。行くの。それがあたしの理由」

元気に話し始めたはずのルカの表情が、今はわずかばかりの不安を宿していた。

「ねえ、一つだけ……いい？」

ガリアの相づちを待つことなく、ルカは続けた。

「ガリアはエンドラへ行ったこと、ある？」

「ない」

「なんだ。ないのか……」

ルカがため息をつくとき、ガリアは何かを悟ったように話し始めた。

「確かに…エンドラのいい噂はあまり聞かないな。いや、エンドラじゃない。パンター二自動機械の…」
「でも！」

ルカは即座に反応した。しかしその語調は徐々に弱まっていった。

「…みんな勘違いしてるんだと思う。トウワンボの力が突然なくなつてから、人間は新しいことを考えるのをやめてしまった。生きる気力をなくしてしまったって…それがお父さんの口癖だった。みんな変化が恐いだけなんだよ。だから蒸気機関を認めようとしなない…でもあたしはお父さんを…」

そこでルカの言葉は途絶えた。飲み込んだ言葉　それを口に出すには、ルカはあまりにも父親との距離が離れすぎていた。父は思いの存在でしかないのだ。静寂と、さざ波が二人の間を支配する。焚火の炎は弱まりつつあり、ガリアもそれ以上薪をくべようとはしなかった。

「明日になれば分かる」
「うん。そうだね！」

ルカは、今できる精一杯の笑顔でガリアに答えた。そして寝る準備をしに、自分の荷物があるところへと戻った。その時、ふと気づいたことがある。

「ねえ、ガリア」

ガリアは無言で顔を向ける。

「夕食いつ食べたの？あたしはさっき一人で食べたけど…ガリアが

食べるところ、あたし見てない」

一瞬の沈黙。だが、ガリアはやがて答えた。

「今日は胃の調子が悪いんだ」

それを夢と言っているものかどうかは分からない。なぜならそこに理不尽さはなく、現実の思い出の再生でしかなかったからだ。しかし寝ていることは確かだったし、やはり夢には違いなかった。

それは、まだルカが家族三人で暮らしていた頃。父親と母親が笑い合っていた時の、幸せな夢。それが最初の映像だった。

しかしやがて、父親は利己的な夢の実現のために家を去り、幸せは崩壊した。

精神が病み、時に暴力をふるう母親。物を作ることに逃避した日々。

母が父を許そうと決めた日。そうルカに告げた日。戻ってきた幸せ。母親と二人だけでも笑い合えた日々。

そして突然の母親の、死…

夢は様々な記憶の断片の果てに、ルカが見た最後の母親の姿。デスマスクが映し出された。

思ったことはたった一つ。今も当時も、それは変わらない。

「見たくない！」

その瞬間、弾け飛ぶように映像は流れ、脳は夢と現実の狭間に揺らいだ。そしてようやく我に返ると、ルカは体を起こし、現実の月を正面に捉えていた。

太鼓のように、胸を内側からドンドンと叩く心臓の音。脈動と呼吸。その激しさ。しかし波は…とても静かだった。そして虫の声。

現実感のある、世界。

大きく一つ深呼吸。

月明かりがル力には救いだっただ。もし星の光だけだったら、このさざ波さえ恐怖となっただかも知れない。

そして一つ、思い出したことがある。昨日までと違うこと。今はすぐそばにガリアがいる。会った時からなぜか安心できる存在。ガリアがいる。それを思い出した。

再びル力は浜辺に横たわり、二人で旅をすることの喜びを感じていた。喜びとはつまり、安心。

いつしか瞳に映る下弦の月は、彼女の長いまつ毛を通してボンヤリとその輪郭をにじませ、やがてゆっくりと消えた。

今度は深い深い眠りの中へ…

「えっ！？あれが…エンドラ？」

ル力は歩きを止め、口をポカンと開けたまま立ち尽くす。それは白い砂浜の向こうに茫然と姿を現した。

「何を驚いてるんだ？名前の通りじゃないか」

二人は砂浜の向こう　高台となった緑の台地からさらにそびえる、高い高い都市を見上げる。

「名前って？」

「噂は聞いているんじゃないのか？」

「聞いているけど…でもエンドラの名前の由来とか意味なんて知らないよ」

「そうじゃない。最近エンドラは、こうも呼ばれてるんだ。　城塞都市」

「じょうさい…都市…」

ルカは再びエンドラを見上げる。それは正にそびえ立つという表現がぴったりだった。もちろん、この都市が高台にあるからというだけの理由ではもちろんない。都市の全周を城壁がぐるりと囲み、まるで一かたまりの巨大な建築物と化して、訪れる者を見下す。そんな圧倒的な威圧感がエンドラにはあった。それは都市というよりむしろ城のようだったが、規模は城のレベルを越えている。まさに城塞都市なのだ。

「スゴイ…。あの壁　一体どうやって積んだのかしら…」

近づくほどにそれは驚異的だった。壁の石組みは、まるでパズルピースのように複雑な形を描きながら、それぞれが見事にピッタリと、紙一枚入らないほどに隙間なく組み合っている。しかし何よりも驚くのは、その一つ一つのピースの巨大さだ。一边は人の背をゆうに越え、重さでいえば百トン以上はあるだろうか？ギザのピラミッドどころの騒ぎではない。

「空中都市もこんな感じだったろうか…」

誰に問うでもなく、ガリアがボソリと言った。その言葉の抑揚がルカには新鮮で、思わず彼を見た。そしてそこに、ガリアにはあるはずのない表情を、見いだしたような気がしたのだった。それは昔を懐かしむような、深い思い出と共にあるような…そんな表情。

「思い出す？」

自然と出た言葉だった。

「いや。その時はまだ　心はなかった」

ガリアも自然に答えた。

「　って、そりゃそうよね！そんな昔にガリアが生きてるワケないもん。あたしなに言ってるのかしら」

ルカは笑いながら、ガシャガシャと自分の髪の毛を手で掻いて、そして続けた。

「空中都市って、初期トウワン王朝が戦争に使ったとか云われてるヤツよね？でもそうかも。トウワンボがあつた時代なら、これだけ大きな石組みも楽だったろうし。でも今はそんな力　ないのになあ…。どうやって積んだのかしら？」

元の疑問に戻った。でもそれは漠然とした疑問であって、ルカにとってはそれほど深刻な問題ではなかった。ガリアの、次の言葉を聞くまでは…

「エンドラを変えたのはパンターニ自動機械会社。噂ではそうなってる」

「えっ？」

ルカが振り向くと、ガリアは彼女をジッと見つめていた。

「やっぱり　何か知ってるんだね。噂ってだけじゃなく…」

ガリアは何も答えない。ただ、ルカの想像の向くままに任せた。

「まさか…この城壁をお父さんが？蒸気機関で作ったって？そう言

「いたいの？」

ガリアはゆっくりと首を横に振る。

「違う。別の力だ」

「べ、別の力って…」

ルカは動揺した。ガリアは確実に何かを知っている。少なくとも自分より、父親のことを知っているに違いない。そう感じた。そしてもう一度ガリアをよく見ると、その瞳は何かを語っているように思えた。

「失われた時代　次々にトゥワンボの力が消えていった頃、トゥワンボによって生み出されたトゥワン水晶の力も、同じように失われた。同調していたからだ。しかしトゥワンボは全て失われたはずなのに、今も力のある水晶はわずかに残っている。いや、それどころか最近では再び増えつつあるとさえ聞く。なぜだと思う？」

すぐにピンときた。が、ルカは答えない。どうしても納得できないことがある。ガリアは続けた。

「力の失われていないトゥワンボが、今も残ってるってことだ。確実に一つは…」

ガリアの言いたいことは分かっている。それでもルカの持つ父親のイメージ　それは今、目の前にある城壁とは繋がらない。そこが納得いかないのだ。ガリアは言葉の続きを　ルカの予測した結論へと導いた。

「エンドラを城塞都市に変えた力。それはトゥワンボだ。そして今、

それを持っているのはお前の」

その先の言葉をガリアは言わなかった。

「信じられない…」

とだけルカは言った。

トゥワンボ

彼らがその石を発見し、神秘の力に気づいた時から、やがてそれが世界を席卷する力になることは明白だった。それだけの力、可能性を持った石を、彼らはトゥワン族の石　トゥワンボと名付けた。発見したのは全くの偶然だったし、それにより力を得た彼らトゥワン族も、回りの諸部族を制圧する以上の野心を持つてはいなかった。というより、それより外の世界の存在すらまだ認識していないという、文明の初期段階にあった。

外の世界を教えてくれたのは、五千年以上に渡って文明を継承してきた国々　先進国という名の、侵略者達だった。

そして今、その立場は逆転しようとしている。

陽も沈む前から、街路の全てがブドウ酒に浸されていた。それは人間の体を介し、芳醇とはいいがたい香りを漂わせていたが、気にする者はいない。女はもちろん、中には子供にまで飲ませる大人や、哺乳ビンに酒を加えようとする者までいて、やがて死者が出るのも確実な勢いだった。

ゾッドも当然このお祭り騒ぎに便乗し、酒をあおっていた。これは彼にしてみれば珍しいことだったが、町の他の人間とは大分理由が異なっていた。しかし、それでも泥酔することはなく、持ち前の慎重さから早めに帰宅するに至ったのは、ある一つの疑問からだっ

た。

時を経て冷静になるほどに、その疑問は高まる。一体どれだけの人間がその事に気づいているのか？それを考えると、彼の足取りは自然と重たくなった。なぜなら、敵はまだ切り札を出していない。

つまり、空船の存在だ。トウワン王国が得意とする空中からの立体機動戦術。それに対抗する力を持たない限り、次の勝利はないのだ。蒸気機関では勝てない。

「認めたくないが…クソッ！せめて理屈が分ければ　なぜだ？なぜ物質が浮くんだよっ！」

裏口の木戸を開け、家の敷地に足を踏み入れたと同時に、思わずイラ立ちが叫び声となって出た。その声に反応したのだろうか？庭の隅で草葉が不自然に擦れ合う音がした。ゾッドは視線を向ける。山の稜線に沈み行く太陽の強烈な西日が彼の瞳に突き刺し、さらには、熾烈な生存競争のあげく、裏庭に伸び放題になった雑草たちが視界を遮った。ゾッドは目を細める。そして手をかざすとそこに何かが

「なんだ？」

茂みは更に大きく揺れた。そしてシルエットとなって眼前に浮かび上がったのだ。

体内のアルコールは、沸騰した血流によって一気に吹き飛ぶ。

「そ、空船！？」

間違いない。それは音もなく、やや見上げる程度の高さにまで浮かび上がると、止まった。全長5メートル程の小さな船だったが、前後共に舳先が垂直に高く伸び上がっていて、威圧感は充分にある。ただ、船そのものはかなり破損していた。

乗っているのは一人。法衣にも似た、トウワン人特有の真っ赤な布を褐色の肌にとっている。船体の一部から突き出した突起に掌を当て　それは操縦桿だろうか？　しかし体はだらしなく船か

らハミ出している。やつとの思いで乗り込んだのは明らかだ。

程なく空船は安定感なくフラフラと揺れると、やがて重力に逆らえずに落ちた。そのショックに船の一部がさらに壊れ、トゥワン人は前方に投げ出されてゴロゴロと転がる。そのただならぬ騒ぎに、庭の虫たちはピタリと鳴くことをやめ、辺りは静寂に包まれた。

ゾッドが実際にトゥワン人を見るのは、これが初めてだった。

「け、怪我をしているんだな？さあ……」

そう言つて近寄ろうとしたが、これは好意ではない。どちらかと言えば空船への好奇心からであつて、少しでも近くで見たいという欲望だ。トゥワン人はそれを見抜いたのか、単に敵だからなのか、接近を拒んだ。彼はやつとの思いで体を起こすと、今度は胸の前で仏教徒のように合掌。その手には何かが握られているようにも見える。

夕暮れの中、再び騒ぎ出した虫たちの大合唱を押し退けてまで聞こえる音。喘息患者のような、氣道が何かに阻害されるトゥワン人の、ただ事ではない息づかい。がしかし、病人と対峙する時のような生易しい状況ではないことを、ゾッドは次の瞬間に思い知らされるのだ。

「
なんだ？」

四散する船体の破片がいきなりガタガタと音を立てたかと思うと、釘のような30センチ程もある鋭利な金属の棒が、周りの残骸を押し退けるようにして突然、トゥワン人の前に浮かび上がったのだ。今度は空船の時とは違う。空中にガツチリと浮いている。それは物体の軽さ故か？

ゾッドの背に冷たいものが走った。追い詰められた者が、逃げるのをあきらめた時の行動など限られている。ゾッドは、トゥワン人

が何のためにそれを浮かせたのかを確信した。

案の定、次の瞬間。その鋭く尖った金属棒が、ゾッドの額めがけて一直線に飛ぶ。ゾッドは反射的に目を閉じた。が、そのあまりのスピードに、実際には彼が目を閉じるよりも早く、金属の棒は彼の元まで到達していた。左耳の鼓膜が引き抜かれたと感じるほどの距離感。微妙な照準のズレ。そのほんの僅かの差で、彼は命拾いをした。

飲み込んだ息を、命の証に吐き出そうとしたその時。

おかしい…？

目を硬くつぶったまま、ゾッドは思った。背後には家の壁があったはずだ。にも拘わらず、ぶつかった音がしない。しかも背すじに異様な感じがある。何かの気配を感じている。

彼にしては素早い反応で背後を振り返り見た時、そこに待っていたのは、恐怖だった。

金属棒が壁の手前寸前で、ピタリと空間に静止している。しかもそれはゆっくりと旋回を始め、その鋭利な切っ先を再び、振り返ったゾッドの額に向けつつあった。

「ハッ…はあああっ！」

限界を越えた肺が一拳に空気を絞り出し、震える恐怖と共に声となって出た。と同時に、瞳は冷静にその金属が青銅であることを、加工技術の稚拙さをも見抜いていた。

切っ先が額を捕らえた瞬間の映像。それは彼の中で静止し、脳の深い部分に恐怖としてすり込まれた。ゾッドは自分と金属棒との距離が、次の瞬間にゼロになることを覚悟した。

「し、し、死…ぬ…」

動き出す金属の棒。だがそれはゾッドに対してではない。下だ。地面に落ちた。カラン！という金属音が、張りつめていた緊張の糸を切る。

彼の中で消えていた虫たちの声が、一斉に脳内に入り込んできた。たつぷり30秒間は茫然と立ち尽くしただろうか？それでもまだ治まらない激しい胸の鼓動と共に、トゥワン人の方を振り返る。

が、何も見えなかった。あっという間に訪れた闇のとばりが、視界を妨げている。

ゾッドは恐る恐る近づくと、トゥワン人はまだそこにいた。軽く足で小突いてみるが、そこからは既に生命感を感じられない。

ホッと安堵の息を洩らすゾッド。

しかしそこからの彼の行動は素早かった。無慈悲に死体を跨ぎ、沸き上がる喜びを押さえきれずに空船へと向かう。

やがて彼は気づくことだろう。空船の中に科学などというものが存在しないことを。そしてトゥワン人の手の中に握られている、真っ赤な石の存在。未開の小さな一部族にしか過ぎなかったトゥワン族が、やがて世界を征服することになる力の源を……

それはこの時代、ようやく目覚めようとしていた科学文明を、蹂躪する力でもあるのだ。

夜半を過ぎて風が強くなってきたのか、あまり立て付けが良いとは言えない北面の窓枠が、ガタガタと音を立てていた。ゾッドがその才能のほんの一部を注ぐだけで、簡単に直せるはずのものだったが、ここ数年、この窓枠はずっとこんな調子で苦情を言い続けている。だが窓枠の思惑とは別に、時折聞こえる酔っ払いの喧騒をかき消してくれるその音は、むしろベッドに横たわるゾッドには心地よかった。

シートに包まりながら、ゾッドは幼い頃、宝物を手にした日のこ

とを思い出していた。

優秀なオートマタ（自動機械）職人だった、彼の父親が作ってくれたプレゼント。それは、ヘビ使いが笛を吹くと壺からヘビが出てくるといふ精巧なからくり人形で、10歳の時に送られた。片時も手放したくない宝物だった。

「あの時はそのまま寝て、一晩で壊してしまったんだっただな」

ゾッドはベッドの中でクツクツと笑う。あの時壊れた宝物は今、彼の手の中で小さな赤い石へと変わった。

「これがトウワンの奇跡とは…まるで魔法だ。科学など馬鹿らしくなってくるわい」

彼はその赤い石が、物質を浮かす理由の全てであり、そこに理屈は見いだせないことを既に悟っていた。赤い石 トウワンボを手に持ち、念を送るだけで物を浮かせ、自在に操ることができるのだ。どう考えてもただの赤くて綺麗な石以上のものには見えないのだが、手に入れたのはこれ一つ。割って調べることもできない。

「しかし分からんことだらけだ。全く…」

謎はトウワンボだけではない。空船にもあった。

トウワン人が空船を操縦する時に、掌を当てていた突起。そこにはただ、透明な石が埋め込まれているだけだった。可動部もなく、とても操縦桿には見えない。更にゾッドは空船の解体作業中、舳先部分の構造的疑問を目ざとく見つけ、そこも解体してみた。そして発見したのだ。内部にはやはり透明な石が入っているということを…

「一体あれにどういう秘密があるのか。或いは単に宗教的なものか

何も分からん」

ゾッドは同じような独り言を、既に何度も何度も繰り返していた。ベッドの中に入ってから数時間。ずっと、トウワンボを見つめ続けている。見たからといって謎が解けるわけではないのだが、見ないでもいらなかった。

ゾッドはこのまま、朝を迎える覚悟すらしていた。だが、同じような疑問の繰り返しはやがて睡魔を呼び、窓枠の苦情は子守歌へと変わった。彼の呼吸が、ゆっくりと深い寝息へと変わっていく。新しく手に入れた宝物を握り締めたまま…

窓枠の負けだ。そしてこの先も勝つことはないだろう。ゾッドは才能を、自分の発明以外のものに割くことをしない。それは彼の執着心の証明でもあるのだ。

やがて夜半に降り出した雨も夜明けと共に止み、今、太陽の光は雫や水溜まりに反射して、キラキラとあちらこちらで輝いていた。とても穏やかな。しかし北側の窓枠は今でも時折、昨夜の余韻を残している。だが風も間もなく止むだろう。残るのは町全体を覆う二日酔いぐらいか…

明け方に寝入ったゾッドも、今はまだ眠っていた。

だが何が起こったのか？ベッドの傍らには人がいる。一人ではない。二人？三人？いや、取り囲むほどのたくさんの人たちがそこにいた。夢であり、現実であるような不思議な感覚。ゾッドは半覚醒状態の中で、確かに部屋に人がいると感じていた。

そう感じさせていたのは、ゾッドの周りを忙しく行き交う、多くの何者かの声だった。

空中都市を治すにはだいぶかかります。戦士たちもだいぶやられました。かなりの被害です

フン、そのような半端な報告はいらん！余は正確な状況を知りたいのだ。修理にかかる時間と、移民への影響を即刻知らせよ

国王へ、お知らせします。空中都市の破壊箇所から、火薬と鉄を採取しました。やはり大砲です。それも未知の巨大な大砲を撃たれたものと思われます

敵の神の力も侮れぬということだな。ウム、分かった。大砲のことならばこの教皇国に詳しい者たちがいるはずだ。集めて協力させよ。従わぬ者は殺せ

国王、緊急です。トゥワンボが一つ、紛失した可能性があります

何！間違いではないのか？

ただ今調べています

急がせよ

はっ！

国王へ、お知らせします。空中都市を治すのに必要な期間は9ヶ月。移民計画を先延ばしにし、全ての空船を修理に参加させた場合でも6カ月はかかるということです

分かった

国王、やはりトゥワンボが一つ足りません。いなくなった者の中に、トゥワンボを持つ上級戦士がいました。恐らく一緒に落ちたものと…

情報は全て、一人を中心として行き交っているようだった。そして国王と呼ばれる人間の声が言った。

トゥワンボを持つ上級戦士たちよ、余の声を聞け。そして王国の全ての戦士たちに伝えよ。侵攻作戦は延期とする。我らは休むことなく進み続けて来たため、今は後ろ盾が何もない状況にある。ここは一旦歩みを止め、後方地を安定させることが良いと余は考えた。今はその好機である。空中都市の修理に全力を挙げつつも移民

計画は継続し、後方地を活性化させる。そして空中都市完成の曉に再び侵攻を再開することとする。以上だ

国王、先住民への配慮は？

彼らの権利は尊重せよ。不満が貯まらぬ程度にな。今は刺激すべき時ではない

トウワンボの搜索はいいのですか？

敵地でもある。今は不可能だ

しかしもしも敵に拾われ、秘めたる力に気づかれてもしたら

：

懸念するでない。せいぜい物を浮かす程度だろう。ヤツらは気づけまいよ。トウワンボの本当の力になどな…

ゾッドは驚くとか、疑問とか、そういった感情を持たなかった。

彼が寝ていることに変わりはなく、夢の理不尽さになかなか疑問を抱けないのと同じように、単に情報だけを受け止めていた。

ゾッドが聞いていたのは、トウワン人たちの間を行き交う交信だった。といっても、ゾッドがトウワン語を話せるわけではない。それは言語に変換される前の、トウワン人たちの心の交信だったのだ。その中でトウワン人たちが一番神経を尖らせていたのは空中都市でも、蒸気列車砲のことでもない。たった一つのトウワンボが紛失したという、ただそれだけのことだった。

目覚めている時のゾッドであれば、すぐさまこう思ったことだろう。

「トウワン人がやってきた時、数千もの空船が空を覆ったと聞く。話半分としてもかなりの数だ。それほど大量にあるトウワンボの内の一つがなくなったからと言って、なぜこつも神経質になる必要がある？」

しかし、疑問を抱く間もなく次々と入り込んでくる心の声　す
なわち思念は、全ての謎を彼の睡眠中に解いてくれたのだった。
幸運はもちろん、ゾッドがトゥワンボを握ったまま寝入ってしまったことにある。そして知るのだ。

トゥワンボが心の交信を可能にする石であり、物を自在に浮かす石であり、そして何より、トゥワンボたった一つの力が、数百、数千を自在に動かす力ともなり得るということ。

「宝物はやはり、寝起きを共にすべきだな」

昼すぎにようやく目覚め、高らかに笑うゾッドは、まだそのことに気づいていない。

夢がスチームではなく、トゥワンボによって叶うということ。そして彼の夢は、人形を自在に歩ませることだった。

潜入

「この都市はパンター二様の許可なくして入ることは許されんのだ。残念だったなあ！お嬢ちゃん」

岩山のような巨漢の衛兵が門前で立ちふさがり、言った。衛兵はまさにル力を見下ろし、ニタニタと馬鹿にしたように笑う。

それを見たル力は左右に首を振り、あきらめて帰ろうとした。だがそれは見せかけだ。ル力は俊敏な身のこなしでクルリと振り返ると、体を横に沈み込ませ、褐色人種の血を引く者ならではの強靱なダッシュ力で、一気に衛兵の脇を擦り抜けた。しかし、相手の方が一枚上手だった。衛兵はその動きを見事に捉えると、ル力の襟首をつかんで高々と宙吊りにする。その大柄に似合わぬ動き。相手はただの巨漢ではないようだ。

「だからあたしは、そのパンター二の娘だっって言うてんでしようが！離しなさいよね。このバカ！」

ル力はヘソ丸出しのまま、体全体でバタバタと暴れて抵抗した。しかし巨漢は全く揺るがない。

「残念だがパンター二様からの返事はこうだ。『私に娘はいない』ってな！」

「だからそれはウソだ！」

「お前こそウソもたいがいに……しろっ！」

巨漢は軽々とル力を放り投げた。2メートルほど飛ばされてお尻

から落下。あとは後ろ向きにゴロゴロと地面を転がり、更に2メートルほど行った所でようやく止まった。

「いててて… いったいなあ！ あたしお尻薄いのにいつ！」

入り口の門は、ボタン！と、無情にも閉ざされた。ルカは尾てい骨を擦りながら体を起こすと、怒りの矛先をガリアに向ける。

「もう！ 手伝ってくれると思ったのにさ。ゲンメツした！ ガリアだってエンドラに用があつて来たんでしょ。いいの？ 入れなくて！」

「目立つことはしたくない」

「…あのねえ、ガリアくん。真夏にそのマントは十分目立ってると思わない？」

その言葉に、ガリアが一瞬笑ったような気が　ルカにはした。声が聞こえたわけではない。ただ、そんな気がしたのだ。

「思ったより元気なんだな」

「なんであたしが元気ないと思うの？ ガリアが話してくれたことがシヨックだったから？ それとも父親に無視されたから？」

「両方だ」

「だって本当のことはまだ何も見てないもん。言っておくけどあたしは科学の子なの。人に言われたことなんて全然… いや、ちよつとは気にするけどさ。でも基本的にはね。自分の目しか信じない。それが大切だ！ って　これ、お父さんの受け売りだったっけ…」

一瞬だけ、ルカの目が遠くを見た。

「なるほどな…」

ガリアは一人うなずく。

「なによ、それ？」

「いや…。ならその本当のことは俺が見せてやる。お前はそれを自分の目で確かめればいい」

「どういうこと？」

「夜まで待とう。それからだ」

ガリアはそれだけ言うと、背を向けてスタスタと去って行った。

そして昨夜とほぼ変わらない下弦の月が、東の空から昇る頃、ガリアとルカの二人は門の前にいた。衛兵はいない。だが門には門が掛けられ、人の出入りを拒絶していた。

「ねえ…門、閉まってるよ？まさか壁を登る、なんて言わないよね。ゼツタイにムリよ」

ガリアは小さくうなずいて、言った。

「手はある」

「…って。これを一体どうやって…」

見上げる壁の先は暗やみに消えている。いつしか月には厚い雲がかかり、辺り一帯の光を奪っていた。

「好都合だ」

と、ガリアは小さな声で言った後、ルカに対しては神妙な面持ちで言った。それは声色から判断できた。

「一つだけ言っておくことがある」

「な、何？改まって」

そう言っただけ、ガリアの言葉はそこで途切れた。珍しく何かに迷っているようだった。

「言葉で言うより」

小さな声でそう言って、ガリアは言葉を続ける。

「お前は空船を知ってるか？」

「うん。失われた時代以前の代表的な乗り物よね。今でもどこに残ってるって聞いたけど……」

「そうだ。その力と同じものが俺の中にも宿っている。悪いが抱かせてもらっぞ」

突然だった。

「キャア！」

ガリアはルカの背中と足に腕を回し、軽々と持ち上げた。その素早い動作にルカは抵抗する間もなく、ガリアの腕に抱きかかえられる。

「い、いきなり何？びっくりするじゃな……」

しかしルカは今、別の驚きを感じている。ガリアを感じているルカの、体のあらゆる部分が訴えているのだ。それは体の硬さ。それもそう。だがそれ以外にも、生きたものに触れた時に感じる生命臭

さ 匂いであったり、吐息であったり、体温、血管の脈動 そ
ういったものがガリアからは一切、感じられない。単に仮面を被っ
ているだけとはとても思えないのだ。

心臓は早鐘を打つ。

この人は一体、誰…いや、そうじゃない。敢えて言うなら

（この人は一体、何？）

それは言葉となって出た。

「あなたは一体…なんなの？」

「ガリア」

そうだ、この人はガリアなのだ。それは知っている。しかし
ガリアとは一体、何なのだろう？

「しっかりつかまってる。これから、飛ぶ」

「えっ？」

直後、ガリアはル力を腕に抱きかかえたまま、垂直に上昇した。
地上に立ったままの姿勢でグングン昇る。

「う、うわわわっ！」

面白い！

即座に思った。しかしそう思うのは不謹慎だと、ル力は一生懸命
自分を言い聞かせた。今の状況は普通じゃない。だって空飛んでる。
ガリアに対して恐怖を、疑問を抱くべきなんだ！

しかしちょうどその時、月が雲間から顔を出した。闇の中からふ

いに城壁が浮かび上がると、壁面は流れる景色となつてあつという間に過ぎ去る。そのスピード感。そしてついに、頂上を越えた。そして今、壁の向こう側に隠された輝き エンドラの灯りが眼前に広がっているのだ。そこは幾千もの宝石がちりばめられた巨大なジュエリーケースのようで、ルカにとっては本当に夢のような美しさだった。

「スゴイ！スゴイ！スゴイ！」

涙が溢れんばかりに感激した。この状況で、どうしてガリアに恐怖を抱けよう。ガリアが何者かなど追求できよう。それは無理だ。初めて見る光の輝き。その美しさ。今、この現実感激する以外ない。

「もう下調べは済んでいる。あの中央の塔にパンターニがいるはずだ。屋上に降りる」

「下調べなんていつの間に？」

「昨晚。お前が寝てる間だ」

「ふーん…まあいいや。それよりすごくキレイ。あたし、こんなに綺麗な町を見るの初めてだよ。これをお父さんが？信じられない。不安なんて吹き飛ぶ。まぶしくて。でもなんであんなに明るいんだろ…？」

「……」

ガリアは答えなかった。

都市の明るさは電気 百五十年前、トゥワン王国の台頭によって失われた力の一つだ。侵略した国の文化を否定すること。それは歴史上珍しいことではない。それにトゥワン王国にはトゥワンボがあった。まだ歩き始めて間もない電気の力など、トゥワン人にはさほど魅力的にも思えなかったのだろう。しかし、失われたはずのそ

の電気が、エンドラでは復活を遂げていた。ランプの灯りしか知らないルカには、とてもまぶしく思えたのは確かだった。

灯りは放射状に広がっていて、その中央にエンドラで最高層を誇る塔がある。それは確かに塔らしく末広がりの様を見せていたが、表面はコンクリで塗り固められてドッシリとしている。塔と言うよりも、鉄筋のビルのようなものだ。そこに宗教を思わせるような華美な装飾はなく、実用的なものとして存在するのは明らかだった。

塔の屋上にはヘリポートのような巨大な杯状の台があり、実際、数十艘の船がその上に整然と並んでいる。そのため、塔自体は先細りになっているにも拘わらず、屋上はむしろ土台部分よりも広がった。

ガリアは慎重に屋上に近づき、人の気配がないことを確認すると、後は素早い移動で屋上に着地した。ルカを優しく降ろすと、その途端、彼女はバネのように勢い良く飛び出した。

「すごい数！ねえ、これ空船？」

興奮して叫ぶ。

「そうだ」

「へえ…これが。ねえ、あたしでも飛ばせるのかな？」

「念じ方さえ覚えればな。それより静かにしてくれ。衛兵に見つかるヤバイ」

「あ…ゴメン。声抑えるよ」

そのままガリアは、ルカをジッと見つめ続けた。

「お前、俺が恐くないのか？」

「え？あ、そか。うーん…よく分かんない。あたし、興奮してるみたいね。聞きたいことはいっぱいあるんだけど、ありすぎて」

ニツコリ笑う。

「あ！見て見て、ガリア！」

声は全然静まらない。ガリアも言われるままに、ルカの指し示す先を見た。

「この塔、城壁よりも高いんだね。海が見える。月の光に反射してるから暗くても水平線が分かるの」

「そうだな…」

「うわっ！下見て、下。スツゴク高いよ。あれ！？あの、グルグル回ってんの。何だろうね？水車かな？あ、よく見るといっぱいある」

「あれはトウワンボ機関。半永久機関だ。あの回転がこの都市の光を生む」

ガリアはいつの間にか、素直にルカの質問に答えている。

「回転が？じゃあ蒸気機関でもあの光は作れるってことよね？でも半永久かあ…。やっぱり凄いなあ…」

ルカは少し悔しそうに、頭をボリボリと掻いた。

「誰だ！」

突然、背後から威圧的な声がかかった。同時に、スポットライトのような光がルカを照らす。振り返り、まぶしさに手をかざすルカ。

「あ、スミマセン。ど、どうしょ。あ、あたし…お父さんに会いにつて 言ってもムダだよなあ…」

声の相手はライトの向こうにあり、まぶしくて姿は見えない。ルカは逃げ道を探そうと、抜け目なく辺りをうかがう。

「父親に会いにだと？名前は？」

彼女は素直に答えた。

「ルカ・パンターニ」

「なるほど。お前は昼間も来たな？」

ルカはその声を思い出した。今となつては懐かしい声……

「その声……もしかしてお父さん？あの……あたし、ルカです！会いに来たの！」

「……」

男はしばらくの間、何も喋らなかった。そして長い沈黙の後、ようやく光の中へと歩み出る。

それは、ルカの思い出の中にある顔と同じ。ボサボサの長髪と銀色の眼鏡。背はルカが思っていたほどには大きくなかったが、それでも高く、がっしりとしていた。昔より白髪が目立つのは、ライトの明かりのせいだけではないようだ。

「いつかは来ると思っていた。だが私は無視するつもりでいたのだ。しかしこうもたやすく侵入を許すとはな。どうやって入った？お前は空船を操るのか？」

「あ、え？えつと……」

ルカはガリアを探した。しかし見回すがどこにもいない。いや、

何よりも動揺したことは、目の前の父親が、父親に見えないのだ。
顔は一緒だが 何かが違う。

「…まあいい。だが私を知ろうとすればするほど、お前は私にとつて邪魔な存在となる。たかが小さな石ころ 　しかし今度ばかりは完璧を期さねばならん。今度こそ、今度こそは…失敗するわけにはいかんだ」

男は胸の前で掌を合わせた。

「お父…さん…？」

すると突然、男の顔の前に短剣が宙に浮かび、その切っ先がクルリとルカに向けられた。

「悪いが死んでもらう」

口元の端を微妙に歪めて笑う、いやらしい笑い。そんな表情の作り方をする父の顔など、ルカは知らない。

「お父さん聞いて！お母さん死んじゃったんだよ！だからあたし…訪ねて来たのに。まさかあたしのこと忘れちゃったの？」

「覚えているとも。いや、正しくは記憶の中にある。そう言うべきかな。しかし…そうか。母親は死んだのか。だが安心するがいい。お前もいざなってる」

「お父さん！」

男の『気』がトウワンボに集約していく。そして一気に解き放たれたその瞬間。目の前にあった短剣が、ルカの額へ向けて一直線に飛び出した。しかし彼女は尚も父親に叫び続ける。

それが最後だった。

ルカの叫びを止めたもの。それは全く濁りのない綺麗な、それでいて鋭く、凶悪な金属音だった。辺りを征するほどの音。その絶対的な存在感。それが一本の緊張となって空間は静寂した。

ルカはようやくにして気がついた。目の前にドーナツ状の何か（それは板のように薄い金属板だった）が浮いている。父親によって操られ、襲ってきた短剣とは違う。

「だ、誰だ！？」

男を後ろから羽がい締めになっていたのは、ガリアだった。

ルカの目の前にあったドーナツ板は、全くの無音で彼女から離れ、ゆっくりとガリアに向かって飛ぶ。そして突き出した彼の指にかかり、クルツと回転した。ガリアはそれを慣れた手つきで驚づかみにすると、輪の外周部分の刃が、ライトに反射してギラリと妖しく光った。

「そ、そのチャクラムは！」

男は叫ぶ。

そしてガリアが言った。

「ある男の魂に従い、お前を殺しに来た。悪いが死んでもらうぞ。ソッド」

ガリアは右手につかんだチャクラムを、男の喉元に突き付けた。

ガリア

未開の一種族に過ぎなかったトゥワン族が発見した、十数個の赤い石。それは最初から何か霊的な不気味さを宿していたが、彼らはそれを不吉とは捉えなかった。むしろ太陽（神）の子、という意味合いの名を付け、霊的な祭毎に使われるようになった。

変革はすぐに来た。

赤い石の秘められた力に気づいた時から、彼らの歴史は大きく動き出した。石もトゥワン族の石　トゥワンボと名を変え、それが自分たちのものであることを明確に主張したのだ。

だが、この時に彼らが気づいていた力は、まだトゥワンボの力の全てではなかった。物質を自在に浮かす力（重量に限界はあったが）と、トゥワンボを持つ者同志の、思念による遠隔地との交信。その二つだ。しかしそれでさえ、力は圧倒的だった。近隣の部族をまとめあげ、族長は王となり、局所的な神となった。しかしその先へ進むには、石の数が少なすぎたのもまた事実だった。

第二の変革は、トゥワンボによるもう一つの力の発見により来た。ある時、戦士のうちの一人がトゥワンボを使い、身に付けていた水晶の飾りを浮かせていた。手元にある玩具をもてあそぶ子供と同じように、目的意識も何もなかったに違いない。ただヒマだったのだろう。やがてそれにも飽きたのか、或いは他に用ができたのか、その遊びを終えた時にそれは起こった。

念じることをやめたにも拘わらず、水晶は空中に浮いたまま落ちてこないのだ。最初は戦士も、同じようにトゥワンボを持つ誰かの悪戯と思ったことだろうが、しかしそれは悪戯などではなかった。

歴史上の多くの発見がそうであったように、偶然が新たな歴史の転換点となる　ここでもそれが起こったのだ。

もはや後は自在だ。その水晶石はトゥワンボを使うことなく、空中を自在に操ることができるようになった。自らが浮かぶためのプログラムが水晶石に複写された。そう考えればいいのかも知れない。但しトゥワンボとは違い、水晶石は念により別の物質を浮かすことはできず、トゥワンボが特別なものであることには変わりなかったのだが…

水晶石だけがなぜ特別なのかは分らない。分かっていることは石が大きければ大きいほど、不純物が少ない透明な水晶石であればあるほど、強い浮揚力が得られるということだった。これにより紫水晶や黄水晶などの、より高価であつた石の靈的価値は大きく失われた。

トゥワンボと水晶の新しい力は、やがて大量の空船を、火薬に頼らない弾丸などを生むことになる。それが第三の変革だ。

だがトゥワンボによる戦争への応用は、彼らだけで為し得たわけではない。外からの力が必要だった。

戦いに明け暮れてきたが故に先進国となつた蛮族が、外の世界にはいた。強欲で野心に満ち溢れ、侵略思想の強かつた先進国が、やがてトゥワン族とぶつかることは避けられなかつただろう。もちろん、より侵略思想の強かつた先進国が先に仕掛けることも…

彼らが全てをトゥワン族に教えた。外の世界を、野心を、そして侵略に正義を組することを…

トゥワン族は単に、侵略に対して侵略で答えたに過ぎない。

ゾッドは今の時代に感謝した。一昔前ならただの鑄鉄や鍛鉄で満足しただろうが、今は鋼鉄がある。それは人形をより強くしてくれるはずだ。

「鋼鉄の歩く人形。魅力的な響きだ！いや、それだけじゃない。完成すればそれは空船を打ち落とすぞ。次々とな！」

彼はまだ仕上がってもいないその姿を想像して、うち震えた。だがそれも致し方ない。想像力を刺激する理由が、彼の眼前を不器用に歩いているのだから…

「止まれ」

壁の直前で、ゾッドはその人形の歩みを止めた。それは頭、胴体、両手、両足という、最低限のパーツで構成された粗雑な木製人形だ。しかしその粗雑な人形が、どう見ても魔法としか思えない力で立っている。

なぜなら人形のパーツの一つ一つが、他のどのパーツとも接していない。つまり浮いているのだ。

「一八〇度旋回して私の元へ戻れ」

ゾッドの言葉（念）に反応した人形は、足踏みをしながらクルリと回り、歩き出した。いや、歩いているという形容は正しくない。実際には宙を浮いている。歩く速度と足の運びも合っていない。つまり、歩くマネをしているに過ぎない。

やがて人形はゾッドの前まで来て止まった。その直立動作は微動だにせず、相変わらず見えない力によって宙を浮いていた。

ゾッドは人形に微笑む。瞳からも興奮の様が見て取れた。

「ひとまず成功だ。だがこんなもんじゃないぞ！人間の指先の一つ一つに至るまで細かいパーツを作る。しかも全て鋼鉄でだ！更にその全てに水晶を入れ、トゥワンボの意を混入する。そして人間の動きを完璧に再現するんだ。神がしたように　歩くこと！走ること！飛ぶこと！そして…戦うこともな！」

ゾッドは誰に対するでもなく叫んだ。彼は興奮の余り、自分を神と同格にさえ感じていた。例えそれが身勝手な勘違いだったとはいえ、少なくとも彼は、トウワン人さえ思いつかなかったトウワンボと水晶石の利用法を、現に実践していたのだ。

トウワン人は命令により水晶を浮かすこと、動かすことしかしなかった。ゾッドはそれを更に進めた。

その理屈はこうだ。

トウワン人が生み出した空船のように、リアルタイムで水晶石に命令を与え続けるのではなく、一つの命令を与えることで、水晶に固有の動きを永久に反復させるというもの。それを彼は人間の動きの再現に応用した。例えば「歩け」というたった一つの命令によって、人形の体のパーツ一つ一つに埋め込まれた水晶が固有の動きをし、あたかも本当に歩いているように見せる。それが木製の試作人形が見せた動きだ。

だがそれはあくまで第一歩に過ぎなかった。

それからの後の半年間、彼は何かを取り付いたかのような確かに神の仕業とも思える仕事を成し遂げた。トウワンボ機関とでもいうべき新しい動力源が、ようやく彼の夢を現実のものとし、彼に生きるための場所を与えた。一つの発明も成さなかった彼に、幾つもの発明が舞い降りて来たのだ。もちろん、その全てがトウワンボあつてこそというものではあつたのだが…

発明の全ては、まるでコンピュータのプログラム技術に近いものがあつた。最終的に彼は、様々な動きを制御するための人工知能までもを、水晶石の中に封じ込めた。もちろん水晶石が意志を持つわけではなく、あくまでただの制御機能でしかなかったのだが、それでも当時の科学水準からすれば偉大な発明には違いなかっただろう。実際、もしこの時代にコンピューターがあつたなら、ゾッドの考えかたは充分プログラム技術に応用できたはずだ。

こうして完成した「トウワンボ・ドール」は、命令によって歩き、走り、飛び、攻撃する殺人マシンへと昇華した。それに比べれば、

トゥワン人の発明した空船など幼稚な玩具でしかなく、引き継いできた文明の重みと、何よりも個人の才能の差が出た。その意味において先進国は　　というよりゾッドは、トゥワン王国に勝ったのだ。だがゾッドは、もはやそれだけでは満足していない。更に大きな勝利　　トゥワン王国との戦いで勝利、発明家としての勝利。そして独裁者としての勝利までも夢に見、託そうとしていた。

やがてその時は来た。

空中都市は復活し、トゥワン人たちは長い眠りから醒めたのだった。

もちろんこの間、守る側も何もしなかったわけではない。本来他国からの輸入品であった蒸気列車砲の仕組みを解析し、オリジナルの兵器として自国生産にまでこぎつけ、空中都市の再来に備えた。国境沿いや沿岸部では砲身をそのまま流用し、列車砲より安価な巨大固定砲台として大量に設置した。とはいえ技術革命の遅れというこの国が以前から抱えていた問題もあり、コピー兵器の性能がオリジナルを越えることはなかったのだが。それでも、耐久性だけは改良され、向上した。

防衛態勢は整った。いつトゥワン王国が攻め入るうとも、彼らにしてみれば返り討ちにできるだけの自信があった。いささか旧式ではあったが、世界最強の地上軍を保有しているこの国が負けるはずがないという大国の自負。唯一の恐怖であった敵の空中部隊も、もはや恐くはない。無数の大砲が撃退してくれる。そう信じて疑わなかったのだ。問題はいつ来るかだ。

その侵攻時期を唯一、知っている男がいた。　　ゾッドだ。

思念通信を受信できるトゥワンボの力により、侵攻の日時、場所、その全てを把握することができたからだ。

だが彼は焦っていた。未だにガリアが完成しない。というより、ガリアの制御機能に問題が生じ、その原因が全くつかめないでいた。

ガリアの華々しいデビューの 때가、刻一刻と近づいているというのに…

空中都市が姿を現した。

以前と全く同じ方位から、まるでかつての失態を打ち消すかのごとく、ゆっくりとそれはやってきた。霞のない、遠方まで見渡せるよく晴れた日の朝だった。

国境近くの高台にある全ての固定砲台が一斉に門を開く。蒸気列車砲もじき砲撃ポイントに到着するだろう。地上部隊はやや前方で陣形を整え、来たるべき戦いに備えた。万全だ。あとは敵が射程に入るのをただ待てばいい。以前との違いは町の間にも表れていた。興奮はあったものの表に出すことはなく、終始冷静に、事の成り行きを見守っている。皆がよく分かっていた。この戦いの勝利が、再びこの国の栄光を取り戻してくれるということ…

空中都市は依然、前回と全く同じように空船を発進させずに、単体で進んできた。敵のその行動は兵士たちにとって予想外だったものの、期待はますます高まった。空中都市を再び撃退できる　と。しかし、今回は空中都市を沈めることだけが目的ではない。沈めた上で、なおかつトゥワン王国　旧教皇領に進撃するのだ。

しかしその時、空中都市の動きに変化が起こった。思えば、最初からそうだったのかも知れない。空中都市の高度が今回は少しだけ高い。地を這うような前回とは異なり、威圧の意味はないように思われた。

いや、それどころか空中都市は見る見る内に高度を上げていく…町の外には幾つもの観測ポイントが設置されていた。手旗信号により空中都市の接近を段階的に知らせることができるというもので、それは距離を示す意味もあった。これにより必中の砲撃を可能にするのだ。

だが、実際にはその距離をアテにするには、空中都市の高度はあ

まりにも高すぎた。まったくもって単純なミス。がしかし、地上戦しか経験がなく、前回の地を這うような空中都市の飛行を見ていた彼らには、それも致し方ない。

一斉に丘の上から煙が上がる。

目視はできなかったが、打ち出された爆裂弾の弾道は大きな弧を描き、空中都市の遙か手前で失速した。この時代最大の射程を誇る大砲であるにも拘わらず、届かない。

ここに至り、兵士たちは初めて前回と同じようにはいかないことを悟った。爆音は空中都市からではなく、地上への着弾という形で響いたからだ。

「なんだとっ！」

爆音を聞き、ゾッドは慌てて窓の外を見た。その時になりようやく、戦いが既に始まっていることを知ったのだ。持ち前の集中力が邪魔をしたようだ。

「クソッ、まだ原因がハッキリせんというのに！」

東側の窓の外には広大な田園風景が広がり、その遠景に次々と大砲の弾が着弾して、土煙を上げているのが見える。

「フン！ おおかた空船相手に自慢の大砲がまるで役に立たんもんで慌てとるんだろう。馬鹿が！ 分かったことだ」

ゾッドは吐き捨てるように言うと、窓に背を向けて、すぐさま作業台へ戻った。

「完全ではないが…仕方ない」

大きく一つため息をついた後、すぐ気を取り直してまっすぐに一点を見つめる。その見つめる先。作業台の上に横たわっていたガリアに対し、ゾッドは一際大きく声を張り上げた。

「起動！」

その鉄の人形はまず片膝を立て、次に両手を使ってゆっくりと起き上がった。まるで人間の如く自然な動きだ。そして次の瞬間には、右手を軸にして一気に作業台から飛び降りた。それは誰が見ても地球の重力が作用して落ちたと思える、完璧な動作だった。

「よしっ、完璧だ！しかし…」

ゾッドは首を傾げてから続けた。

「…なぜか動きが止まることがある。ごく稀なのだが　まあいい。それでも空船相手に負けることはあるまいからな。恐いのは味方の弾だけだ。まあそうそう当たることもあるまいが…」

ゾッドは、まだ不完全な状態ながらもガリアの出来に喜びを隠せない。そのむき出しの鋼鉄　正確に言えば、当時最新のニッケルクロム鋼のボディに魅入り、たつぷり五分間は悦に入ったまま帰って来なかった。彼に息子ができたとしても、これ程の嬉しさは抱かなかったただろう。なぜなら制作工程のほとんどを、女に奪われるからだ。

「よしガリア、そのチャクラムを持って私に付いてこい。お前に戦うべき相手を教えてやろう」

ガリアは台の上に置いてあったチャクラム（戦輪）を手に取ると、慣れた動作でクルリと指で回し、腰のホルダーに力チリと止めた。

「うむ」

ゾッドは満足そうにうなずく。

しかし彼は気づいていない。危険は窓の外で急速に近づいているのだ。もう少し早く家を出ていれば、それを言うのは不毛だろうか？

そう。不慮の事故とは、所詮そんなものだ。

空中都市はゆっくりと高度を上げながら、着実に向かって来る。

固定砲台は仰角を上げて対するが、的は弾道が描く放物線の更にある。当たるわけがない。トウワン人は完璧に大砲の射程を見極め、空中都市をその外に置いていた。かつては隣国であり、今はトウワン王国に従属した教皇領の技師たちの、完璧なる計算。

固定砲台の幾つかは既に射撃を止め、冷静に対処していたが、一部はパニックに陥ったままひたすら撃ち続けた。砲台の仰角は空中都市の接近に伴い、更に上がる。当然射程は短くなり、着弾点は近づく。つまり町外れの田園地帯を抜け、同胞の住む居住地へ……

やがて大砲の弾は敵ではなく、自国の建築物に最初の被害を出した。

それが運命というものなのか？ともかく、それが全てだった。たった一発の砲弾がこの戦いの勝敗を分け、大きな歴史の分岐点となったなど誰が想像できるだろう。しかし実際、それは歴史を曲げた。進むべきルートを大きく変えたのだ。

「恐いのは味方の弾だけ」

そう言ったゾッドの言葉は、ある意味正しかった。トウワンボ・ドール、ガリアの鮮烈なるデビューは、自国の砲撃によりこの時、

断たれたのだから…

ゾッドとガリアは共に、土と瓦礫に埋もれた。命令を続行できなくなったガリアは活動を停止し、ゾッドはその命を急速に終えようとしている。即死ではないが絶望的だ。圧死の時まで、ゾッドの苦しみは続くのだろう。彼の並々ならぬ生への執着が、来たるべき時を少しは遅くするかも知れない。がしかし、そんなものだ。

長い眠りが待っている。

宿命

百五十年前、ガリアが瓦礫と共に埋まった時は、確かに彼に意識などなかった。外界から命令を受け、それを制御するためのプログラムが、彼の体のあらゆる部分にある水晶に封じ込められていたに過ぎない。しかし意識が芽生えるために必要な『種』があったことも否めないだろう。どんなことにも原因は必ずあるものだ。

歴史の分岐点となったあの日、ガリアの動きが時折止まるという一種のバグが、ゾッドには最後まで分からなかった。そして実を言えばそれこそが、意識を生み出すための種だった。だとすれば、それを生み出した原因はなんだったのか？

一つ言えるとするれば、ゾッドは睡眠の際にもトウワンボを手放さない。そしてトウワンボとは人の念を受け取り、放出する。

ゾッドの、人間のように動く人形を作りたいという執念が、その種を作った。とまでは言わない。しかし睡眠とは脳を休めることだけが、その目的ではない。それならば人間は夢を見る必要などないからだ。夢が行う役割とは記憶の整理。だがそれと共に、脳が持つ複雑な制御機構の点検をも兼ねているとしたら……。そして人間の脳の制御機構とは、言わば心の仕組みでもある。トウワンボを通して、ガリアがいつもその影響を受け続けていたとしたら……

いずれにせよ種は確かにまかれ、百五十年という歳月がそれを熟成させた。そしてある時、ガリアに心が宿るための決定的な出来事が起こったのだった。

そうして今、魂を持つトウワンボ・ドール　ガリアはここにいる。

ではゾッドはなぜここにいいのか？死んだはずの人間の意識がなぜルカの父親に宿っているのか？そこには彼の、異状なまでの生へ

の執着が関係していた。

そうして今、ゾッドもここにいる。百五十年の歳月を経て…

「ムウ…私の短剣を弾き飛ばしたのか！？いや、そんなことより私をゾッドと呼ぶお前は 大体私を殺すだと？馬鹿な…私は死ぬわけにはいかん。それはいかんぞ！今度こそ。今度こそは！」

ルカの父親の中に宿る男 ゾッドは、ガリアの腕の中で暴れだした。がしかし、彼の腕力と鋼鉄のボディがそれを許さない。

「俺の中の魂に言うんだな」

ガリアは喉笛を切り裂こうと、手に持ったチャクラムにグツと力を入れた。

「ガリア、だめえっ！」

ルカの叫び。ガリアの手が止まる。

「ガリア？ガリアだと！」

ゾッドも叫んだ。

「お前がガリアだと言うのか！？そうか、そのチャクラムはやはり私が昔作ったものだ。お前も蘇ったのか？いや、それになぜだ？なぜお前に心がある。それになぜ喋っている？私はそのようには作っていない。作っていないぞ。なのになぜだ！」

ゾッドの興奮とは対照的に、ガリアは冷静だった。

「心があるのは俺に魂が宿ったから。それからお前が聞いているのは声じゃない。心の念だ」

「心の念？そうか、思念か。だが魂だと？」

「そう。そして俺はその魂に従う」

「誰のだ！」

「それはお前自身さ」

「な、なに！？」

「お前が追い出したその男の魂だ」

ゾッドはハッと息を飲む。

「まっ…まさか！？パ…パンターニのか！クソッ。あの男！お前はそいつに操られているというのか？お前を作ったのはこの私なんだぞ！私に従え！」

「これは俺の意志でもある。俺にはこの魂の持つ悲しみが…憎しみが痛いんだ。俺が俺であるため 浄化するには、お前を殺すしかない。悪いな」

「クソがつ！お前などこの世から消し去ってくれる！」

ゾッドはトウワンボを持ち、合掌した。ガリアの中にあるトウワン水晶に念を込めようとしたのだ。それはゾッドだけが知っている、プログラムデリーートのキー思念。だが

「俺のトウワン水晶を消去するのか？残念だな。俺にはガードできる。心のある水晶を消すことはできないのさ」

「クッ！」

ゾッドはギリギリと奥歯を噛んだ。

その時、ルカがガリアに飛び付いて来た。

「やめて、ガリア！お父さん殺さないで！ガリアはそんな人じゃない！お願い！」

ガリアはルカをジッと見て、言った。

「この男はお前の父親じゃない。肉体はそうかもしれないが、心は違う。お前は現実を見たはずだ」

「そんなこと言われたって分かんないよ！だってお父さんだもん。ね！お父さん。お願い、答えて！」

ルカは必死で、かつて父親であった男に向かって叫ぶ。が、それはもはや父親ではない。ゾッドは全く動揺を見せずに、合掌したまま何かを念じている。

「一体何を……？」

ガリアが疑念を抱いた瞬間、彼の右腕に、背後からの衝撃が加わった。ガイーン、という金属の鈍い音が響き、ガリアは思わずチャクラムを落とした。

「ぐわっ！」

ガリアは戦闘マシンとしての性能と、心を持つ者としての機転から、ルカを抱えながら素早く脇へ飛んだ。その一瞬の判断。そして間一髪、二発目と三発目の攻撃をかわした。二発目はゾッドの顔のすぐ脇。ガリアの頭部があった位置を、三発目はルカがいた辺りを抜けていった。

ガリアはゾッドから10メートルほど離れた位置。空船の陰に逃げ込んだ所で振り返る。しかし甘かった。振り返ったと同時に、今

度はガリアの左足に衝撃が走った。それは木製の空船を突き破り、ガリアの足に直撃したのだ。

「グッ！」

「キヤアッ！！」

ようやくにして顔を見上げるとそこには、ゾッド以外にもう一人、誰かが立っていた。長身のシルエットが浮かぶ。

「やった！でかしたぞ、アレシア！」

ゾッドが叫んだ。そしてもう一人の影が、彼の脇にゆっくりと歩み寄る。波打つ黒い長髪と、後ろに長く伸びた腰布がマントのようになびいている。

アレシアと呼ばれるそれは人間ではない。衣服は着ているものの、むき出しになった腕と足、それに腹部が、ガリアと同じ金属人形であることを証明していた。しかしそのボディにメタリックの輝きはなく、色は艶のないグレー。しかも男性ではあるが中性的でスマートなフォルムを持っている。同じ人形とはいえ、ガリアの体とはだいぶ違うようだ。そして彼の背後には、ボーリングの球ほどもある金属球が三つ、正三角形を描いて浮いている。ガリアやル力を襲った、アレシアの持つ武器だ。

「馬鹿が！私がこの時代にお前と同じものを作らなかったと思うか？いや、お前以上のトゥワンボ・ドールだ。逃げようとしても無駄だぞ。このアレシアはお前よりも早い。お前を作った時には抽出方法の確立されていなかった金属。チタンが使われているんだよ。もつとも私たちの時代にはメナカナイトとも呼ばれていたがな。鋼鉄並みの硬度を持ち、遥かに軽い金属だ。これは素晴らしいことだよ」

ガリアは言われるまでもなく、逃げる術を失っていた。なぜなら…

「ガリア！どうしたの？」

ルカが叫ぶ。

ガリアはその場に倒れ、うずくまった。

「あ…足と、腕が…」

「ガリア！ガリア！」

「動か…ない…」

それを見て勝利を確信したゾッドは、薄ら笑いを浮かべ、ゆったりとした口調で言つてのける。

「フハハ…どうだ、マヒして動けんだろう？私はお前の中にある水晶が衝撃によって割れることのないようにと、でき得るかぎりのことをした。だがしかし、衝撃の全てを吸収することはできない。大きな衝撃を受けた時にのみ起こる小刻みな波動。それは水晶が本来持つ規則的な振動をも相殺し、その間トウワン水晶の機能を奪うんだ。ああそれから。飛ぶことは考えん方がいいぞ。バランスを制御できないのだからな」

ゾッドは顎に手をあて、ニヤニヤと笑った。

「さあて、どうしたものか…」

「クソッ！」

ガリアが珍しく、声を荒げた。その彼の足元で、ルカはただひたすら金属の腕と足をさすった。どうなるわけでもなかったが…

(ルカ！)

ガリアが小声で　ル力だけに聞こえる思念で呼んだ。彼女は一直線に彼の目を見据え、ガリアが告げる言葉の一語一句に聞き耳を立てる。そして最後に小さく、だがしっかりと頷いた。

「よし！決めたぞ。お前はやはり壊してしまうには惜しい。私の記念碑的な作品でもあるしな。同じようにお前の頭をマヒさせよう。そして私の研究室へ運び、制御機能を書き換える。お前は生まれ変わるのだ。そして……ルカと言ったな。お前は今すぐに楽にしてやるからな。母親に会いに行くがいい」

アレシアは直立のまま微動だにせず、ただ背後の鋼鉄球に気を集約させた。そして一気に解き放とうとしたその時！

(今だ！)

ガリアが小声で叫んだ。

ルカはまだ壊れていない空船に飛び乗り、ガリアは地面に放置されていたチャクラムに気を集め、ゾッドに向かって飛ばした。

ガリアとルカに対して飛ばそうとしていたアレシアの鋼鉄球は、急遽ターゲットを変え、チャクラムに向かった。なぜならアレシアの持つ最重要プログラムが発動したからだ。それは主人を守ること。かつてはガリアにもあり、今はないもの。それに賭けた。

ガリアはマヒしていない右足で地面を蹴り、ルカの待つ空船に飛び乗った。そして操縦板に埋め込まれた水晶に念を送る。

　　一帯を征する金属音。チャクラムと鋼鉄球がぶつかる激しい音。まるでその音がスタートの合図であるかのごとく、二人の乗る空船は飛び立った。

「しまった！」

ゾッドが叫ぶ。

アレシアは最重要プログラムを果たし終え、次の指示をただジッと待った。それまでの指示はキャンセルされてしまったのだ。

「アレシア、追え！今すぐガリアを追うんだ！」

はたと気がついたゾッドは、再びアレシアに対して命令を与える。がしかし、なぜかアレシアは動かない。微動だにしない。

「どうした、アレシア！ガリアを追え！追ってヤツらを捕らえろ！」

やはり動かない。

「クソッ、こんな時に！ガリアといい、こいつといい、一体なぜ私の思うようにならないのだ！」

ゾッドは口惜しそうに叫んだ。

それはアレシアの中にあるバグ。いや、意識が芽生えるための種ゾッドはそのことを知らない。彼の寝るときの癖は生まれ変わっても尚、変わらないのだった。

ルカは後ろを見て、アレシアが追ってこないことを確認すると、ガリアに告げた。

「もう大丈夫みたい」

するとガリアはいきなり左手を横に突き出した。びっくりしてル

力の鼓動が一瞬早まる。だがよく見ると、指の先にはチャクラムが引っ掛かって回り、ガリアはそれをすかさず掌に持ちかえた。右手がまだ動かないためいつもとは逆手だったが、それでも苦もなく、チャクラムを反対側の腰にあるホルダーに引っ掛けた。

「体は大丈夫？痛くない？」

「ああ、さっきよりはいい。すぐによくなるさ」

「よかった！」

ルカは安堵に満ちた顔で、ニッコリ笑った。もちろん彼女の中にある不安や疑問は何も解消されていない。それでも今浮かべるその表情に嘘はなかった。

「ルカ、頼みがある」

ガリアが言った。ルカはさっきよりももっと嬉しそうな顔で、ニッコリ笑った。

「ようやく名前で呼んでくれたね。今と…それからさっきも」
「そうか…そうだな」

ルカには、心の中に浮かべる彼の表情が手に取るように分かった。ガリアは笑っている。それは二人が通じ合った瞬間でもあったかも知れない。

「頼みって何？」

「空船を操縦してほしいんだ。やり方は教える。水晶の制御機能があるから危険はないはずだ」

「え、ホント！？うん、やる。教えて。あ、でもガリアは？」

「少し…休みたい」

そう言っ てガリアはルカに空船の操縦を教えると、少し右足をズリながら船尾に向かい、その縁に体をあずけた。

ルカはさんざん空船の操縦に熱中してからようやく、ふとあることに気づいた。

「そうだ！ ねえ、ガリア。行き先は？」

ルカが後ろを振り返ると、うつむきがちに座り、ピクリとも動かないガリアがいた。一瞬、不安になるルカだったが、すぐにそれは消え、笑みが漏れた。

「ま、いいか。さらっちゃお」

ルカは嬉しそうにニコニコと笑うと、再び空船を進ませる。

何のことはない。ガリアは疲れて寝ているのだった。それは彼女にも伝わった。

いつしか空に横たわる厚い雲は完全に晴れて、海に映る月の輝きが進むべき道を指し示した。そのキラキラと揺らめく光の輝きを見てルカは、今日見た輝きの中でいちばん美しいと、素直にそう思えるのだった。

蒸気生活

まどろみの中、窓の彼方にあるブルーと、それを分割する十字のシルエットを見ていた。そのよく見慣れた窓枠のコントラストを見て、ル力はそこがどこであるかを知る。どんな悪夢を見た後でも安心できる景色。それにシーツの感触。しかしふと気づいた。その中に見慣れない影がある。ベッドの脇に座る人の影。それは父親だった。きつと面白がつて、あたしの寝顔をニヤニヤ笑って見ているに違いない。そうル力は思った。でも待て…

ル力はボヤけた視界を取り戻そうと、両手でグリグリと目を擦った。この場所と父親の存在はもはや当てはまらない。ここはル力だけの聖域なのだ。

「起きたか」

ようやく焦点の合った視界に映ったのはガリアだった。マントや首に巻いていた布は取り払われ、浅黄色の長袖のシャツを着ている。首が鉄だあ…と、ル力は思う。

ル力はしばらく状況把握ができずに、目をパチパチとしばたたかせた後、キョロキョロと周りを見回した。

「気のせいかなあ…」

再び枕に顔を埋める。

「ル力はよく眠るな。見てると少し不安になる」

つぶやくような念で、ガリアは言った。

「あれー？あたし、床で寝なかったっけ？」

自分のいる場所を確かめながら、ルカが言う。

「いや、俺はベッドに寝かせた」

「え？あたしがガリアのことベッドに寝かせたんでしょ？」

噛み合わない。

「俺に家の鍵を渡したの、覚えてないのか？ルカ、そのまま船の中で寝ようとしただろ。仕方なく俺がここまで運んだんだ。寝ボケてんのか？」

「え？あ、あーそうなの？」

ルカは少し照れながら笑う。体を起こしてベッドの上にベッタリと座り、ボーツと上を見上げながら考える。寝癖でピンピンと跳ねている黒髪。

「夢だったのかなあ　考えてみたらガリア抱えながらハシゴを登ってこれるワケないもんね」

この部屋は屋根裏にあり、一階との昇降にはハシゴを使う必要があった。

「そう、夢っていえばね…」

ルカはまどろみの中で見た父親のことを思い出した。寝呆けていたとはいえ、やけにイメージがハッキリしていたと…ルカは今にし

て思う。そしてそれをきっかけに、昨夜のことがまざまざと思い出され、それはついさっき感じた喜びが、ありえない幻想であることを知らしめた。ルカの知る父親がもっていないという現実を…

「どうした？」

「あ、ううん…やっぱり何でもない…」

ルカは言葉を飲み込んだ。ガリアは少しの間ルカを見つめた後、窓の外に意識を向けた。下から盛り上がってきた入道雲を見ている。それとジージーと鳴くセミの声。昨晚の戦いが嘘のように、平和だった。

「あ、あたし水浴びて来ようかな。体ベタベタするし…」

シャツの胸元を手で持ってバフバフと風を送りながら、ルカはハシゴへそそくさと向かった。昨夜のことを思い出すほどに生まれる疑問。そして困惑。ルカは一人の時間が欲しかった。

この家は元々倉庫で、湯浴みをするような個室は存在しない。一階は床一面コンクリで、その隅に設けられた井戸とその周りが、この家の浴室であり、調理場でもあった。窓も小さいものが高い位置にあるだけで、近隣に家もない。一人で暮らしている限りは、仕切りなど必要もなかったのだ。しかし今はちよつと事情が違ふ。ルカはそれを思い出して、去りぎわにガリアに一言告げた。

「ガリア。覗いたらダメだよ」

ガリアは振り返り、聞いた。

「窓をか？」

そこにルカの姿はなかった。ガリアは仕方なく窓の外を見るのをあきらめ、室内を見回す。しかし昨夜から見飽きた景色だ。なかなか変化に富んで面白かったルカの寝顔もない。しばらくはジツとしていたが、やがて立ち上がると、何の気なしに下の階へと降りていった。

彼に罪はない。異性への認識という点で、少し欠けていただけだ。何よりも少し、ルカは説明するべきだった。

ちよつとしたひと騒動の後、しばらくして下の階から、蒸気を吹き出す断続的な音が響いてきた。ガリアはたつた今起こった「事件」の手前、下に降りるのをためらったが、やがて好奇心に負けてハシゴの昇降口から声をかけた。

「ルカ！降りていいか？」

「あ、うん。もういいよ」

下に降りると、身の丈程もある巨大なドラム状の機械の前に二台の脚立を置き、その間に差し渡された板の上に四つんばいになって、中を覗き込んでいるルカがいた。前の印象とはガラリと変わり、丈の長い茜色のローブを着ている。覗き込むドラムの中には水を溜めているようだ。

ガリアは脚立のすぐ下まで来て、見上げながらルカに言った。

「悪かったな。さっきは……」

ルカの髪はまだ濡れていて、毛先には雫がついている。ブンブんと首を振ると、それは辺りに飛び散った。

「気にしてないから」

明らかに気にしている。二人の間に一瞬だけ、妙な間があった。

「それは何だ？」

「あ、見てみる？いいよ、登ってきて」

ガリアは二人がやつと乗れる程度の板の上に乗り、腰を降ろした。ドラムの中には大量の水が溜まっていて、その中にはルカがさつきまで着ていた衣服が沈んでいる。ガリアにはそれが何なのか解りかねて、再びルカを見た。

「解らない？これはですねー」

ルカが得意げに話し始めた。いつの間にか普段のルカに戻っている。いや、戻ろうとしているのかも知れない。

「蒸気洗濯機って言うの。完成させたのは結構前なんだけど、色々あつて試験運転もまだだったのよ。いい機会だと思って　あ、ホラ、見て！」

水槽の中の水が、ゴウンゴウンという音と共に、少しずつ渦を巻き始めた。機械の下からは蒸気が吹き出しているが、燃焼された煙は煙突から外へ放出されているようで、室内はそれほど煤臭くはない。

「で、ここに洗剤を入れましてですね」

ルカの口調はいつしか営業口調になっていた。ガリアも真剣にそれに見入る。なぜならルカの作り出すもの。それはガリアの心に不思議な情感を宿らせるのだ。記憶にも、そして記録にもないはずの

郷愁とでも言うべきものがそこにある。

「ル力はこの家で生まれたのか？」

「え？違うよ。ここは昔お父さんが使ってた仕事場だったんだけど、いなくなつてからはあたしが使ってるの。もともと住んでた家は売っちゃった。お母さんも死んじゃったし、あたしには広すぎると思つて。それで今はここがあたしの仕事場兼住居ってわけ。でもどうして？」

「いや、別に理由はない。ただ知りたくなつた」

「ふうん。ね、ガリア！他には何かない？知りたいこと」

「いや、今は特にない」

「そう…」

洗濯槽の中では時折、渦の回転方向が変わる度に、洗濯物が水中で激しく踊った。それは衣類の巻き付きをできる限り防ぐためのアイデアだ。よく考えられている。その渦の流れを、二人はただジッと見つめた。ガリアはあぐらをかいて、ル力はしゃがんで頬杖をつきながら…

「ねえ、ガリア…」

長い沈黙の後、グルグルと回る洗濯物を見ながら、ル力が聞いた。

「…不公平かも知れないけどさ。あたしはガリアに聞きたいこと、いっぱいあるんだ。答えてくれる？」

ガリアはル力に逆に聞き返す。

「信じるか？」

二人とも洗濯槽を見つめたまま、しばらくはその洗濯物の舞を眺めていた。やがてルカはうなずく。

「昨夜のことは夢じゃないよね。あたし、ハッキリ覚えてるもの。あたしに向けられた言葉だけじゃない。ガリアと……お父さんの会話も。だから今は、ガリアの言葉が一番信じられると思うの」

ルカはガリアの顔を一直線に見て離さない。

「分かった……でも言葉より見たほうが早い」

ガリアはそう言うと、右手の指めき手袋を外し、更に腕から指に至るまでグルグルに巻かれた白い布を、左手で取り始めた。

「それも洗濯しようか？」

「いや、いい」

布を全て取り去り、最後に袖を左手でたくし上げ、むき出しになった右腕をルカの目の前にさらした。半ば覚悟していたことではあったが、ルカは奥歯をギュツと噛んで、驚きを抑える。

それは少しだけ赤茶けた、鉄でできた腕。関節の部分は鉄の球体がジョイントの役目をしている。いや、それは本当に繋がっているんだろうか？ルカは思う。実際、繋がってなどいない。全てが浮いているからだ。

「それは……義手？」

一応聞いた。

「違う。俺の体は全てこうだ。見せてやってもいいぞ。それであい

「こだ」

「あ、えーと…アハハ…」

ルカはさっきの「事件」を思い出して動揺した。

「やめとく。その代わりもつと知りたい。ガリアのこと、エンドラのこと、それに…お父さんのこと　って、あ、あれ？」

ルカが真面目に話しているにも拘わらず、ガリアは何かを気にして、洗濯槽をジーツと見ている。

音はさっきからあり、少しずつ大きくなっていった。ルカは耳で聞いているながら、気づくのが遅れた。考えることが多かったせいだろう。ガリアを見て、ようやく意識がそっちに向いたのだった。

洗濯槽の中は今や

「中の水が沸騰してるうっ！」

両手で頬を押さえて叫ぶルカ。洗濯槽の中はボコボコにゆだって、中にあつたルカの服は踊りまわっている。

「どうしよう！」

「やっぱりいけなかったのか？」

ガリアが言った。疑問には思っていたらしい。

「と、とりあえずお湯を抜いて…あ！その前にバルブ　あちちっ
！」

「貸せ！俺がやる。ルカは離れて指示だけ俺にくれ」

室内はムンムンとした蒸気でほとんど視界がきかなくなり、その

中をルカの叫び声ばかりが響き渡った。ガリアは冷静に動き回ったがしかし、もはやパニック。

後に残るのはいつまでも消えない異常な部屋の湿気と、少しだけくたびれて窓の外に干され、はためているルカのシャツとパンツ。しかし、彼女の中にあつた心の不安は、少し薄らいでいた。

そしてその日は夜遅くまで、ベッドの上で二人は色々な話をしたのだった。

消えない心

ある日突然、暗闇だった「それ」に光が差し込んだ。そして「それ」は一部始終を記録していた。

その場所は放棄された場所だった。

かつては港町として栄えた時代もあったが、地形的な要因からの百五十年の間、何度となく戦争の激戦区となり、ほぼその数だけ国も変わった。町は戦争の度に廃墟となり、その数だけ復興を果たして栄えたが、「失われた時代」以降は徐々に町は寂れ、いつしか放棄されてしまった。わざわざ復興するまでもなく、既存の町で十分だったからだ。

世界全体を覆う覇気のなさは人の数を減らし、徐々にではあるが文明は退行していた。

パンターニ自動機械会社の経営状況が一向に良くならないのも、そういった世相とのギャップが大きく関係していたのだろう。社長であるパンターニは少しでも安い土地に会社を移し、より開発に力を注げる環境を作ろうと一念発起した。経営に疎いはずの彼の、追い込まれ具合が分かるというものだ。

そういう意味でこのかつての港町は、とても魅力的な場所には違いなかった。

「それにしても暑い日だ…」

毎日を自社の研究室で過ごしていた彼にとって、日焼けは最も縁

遠いものの一つと言えよう。見た目は背も高く体格のいい彼だったが、それは骨格が恵まれているからに過ぎず、実際には胸のあばらが見えるほどに痩せていて、最も似合う場所はやはり研究室の中ということになるのだろうか。朝からの下見で、彼の白い肌は一部で赤く炎症を起こし始めている。

「しかしここは廃墟というより、既に遺跡じゃないか。まあしかし悪い場所ではない。ウム」

パンターニは地図を広げながら一帯を徘徊し、自身を納得させるかの如くブツブツとつぶやいていた。人気はない。しかし、彼の背後にはペットのように付き従う空船が浮いている。それはミニチュアで、以前かなりの高額を出して買った、初期トウワン王国製の骨董品だった。

深い理由などない。ただ単に子供がオモチャを買うのと同じような気持ちで買ったただけだ。彼はそれを惜し気もなく荷物運搬用として使い、汚れや傷によって、今や装飾的価値は大きく失われていた。しかしそれは彼の中にある強い好奇心を表す一例とも言えた。

「…付近には比較的大きな町もあるし、水は豊富にある。何よりも土地はタダ同然…と。ヨシッ！」

右手でパンツと地図を叩いたその時、パンターニの目の端に一瞬、瞬くような赤い光が飛び込んだ。

「なんだ？」

すぐに顔を向けたが、もうそこに光はなかった。見る位置を何度か変えてみるものの、もはや見つからない。普段ならそれ以上の詮索はせず、首をひねる程度で通り過ぎる所だが、彼はその場所に興

味を持った。

「これは…また特別古い廃墟だな。ン？あれは…」

二、三步近づいた所で、パンターニは幾つかの金属の断片を見つけ、半ば土砂に埋もれた廃墟へと、更に近づいていった。

そこにある金属の多くは、ある部分までは真っ赤にさびついているのに、途中からは線で引いたようにさびの質が違う。よく見ると廃墟の中にある木材や煉瓦にしても、同じ風雨にさらされたとは思えないほど、場所によって保存状態が違う。

「どうやらこの辺りは最近露出したようだな。地滑りか地震かにしてもいつの時代から埋もれてたんだろう。やけに金属片が目につく。見たところ元は普通の家のようだが…」

パンターニは辺りを見回す。すると

「ん？これは…。うおっ！」

突然の奇声。最初は分からなかったが、それは土と瓦礫の中から露出した人の骨。その手の部分だった。掌を上に向けて、持っているのは真っ赤な石。トゥワンボだ。

「これが！さっきの光は。いやしかし、随分ときれいな石じゃないか」

パンターニはトゥワンボを拾って汚れを拭き取ると、手のひらでコロコロと軽く転がした。もちろんそれがトゥワンボであることに、彼は気づいていない。

「今度ルカに送ってやるかな。そういうのが好きだって手紙に書いてあったっけ」

死人が握ってたことなど気にもしない。なぜなら彼は普段から「科学の男」を自称してはばからないからだ。とは言え今は科学の時代ではない。彼を変人扱いこそすれ、それを羨むものもないのが現状だ。

死人から取り上げたことはルカに黙っておこう…と、パンターニは思った。家族を捨てる以前、まだルカが幼い頃。オバケの夢を見たと言って、一晩中泣きやまないことがあったのを思い出したからだ。

「あいつも今年でもう一二歳か。早いもんだな…」

自分の夢のために家族を捨てた彼であっても、娘ルカが存在だけは消せない。というより、消すつもりも毛頭ない。さすがに彼の命でもある会社と天秤にかけるつもりはないが、それでも母親に内緒で、偽名を使って送るルカへの秘密の手紙は、以前に比べて確実に増えていた。

彼は真夏の青い空を見上げて一時、物思いにふけた。

「この暑い日差しも、ルカなら似合うのだろうな…」

自分とは違う、茶褐色の肌を持った娘はいつも自慢だった。しかし同時にこうも思う。褐色の肌を持った妻への愛は、いつしか消えてしまった…と。

「結婚する前は自慢の恋人だった。私がトゥワンの血を引く女性と付き合えるなど…。だが思えば、それだけだった…」

ふう…と、一つため息。

しかしその直後、彼は辺りをキョロキョロと見回した。

パンターニは何か皮膚が泡立つような、妙な気配を感じていた。別に寒気がしたわけではない。鳥肌も立たなかった。純粹に細胞が感じたのかも知れない。

突然、背後に浮いていた空船のミニチュアが、ガタンツ！と、その役目を放棄して落ちた。上に乗せてあった荷物が地面に投げ出され、パンターニの足元にゴロゴロと転がって踵にぶつかる。

「な、なんだあ？」

後ろを振り返り辺りをしつこく見回し　結局、首をひねった。

「なぜ落ちたんだ？まさか、壊れたのか？いや、『失われた』のか？これも…」

再び空船に向かって（浮かべ！）と、念じてみる。ダメだ。もう一度　と、念を送ったその時、逆に、空船からパンターニに流れこんでくる何者かの意志があった。

…デ…ルカ…

「な、なんだ、一体！」

その声　いや、念に対して、心を集中する。それにしてもなぜ？とパンターニは疑問に思う。その思念は空船から送られてくるようなのだ。

…シン…タマ…

聞き取れない。更に心を開く。集中する。

…シンデタマルカ…

思念はそれを繰り返している。何度も、何度も、何度もだ。

「し、死んでたまるか…だと？船が壊れそうだから　まさか！？
そんな…。空船は生きているのか！」

パンター二の背に冷たいものが走った。

最初、彼は勘違いをした。その思念は空船が発しているのではない。空船は単に仲介役に過ぎず、発信しているのはトウワンボだった。だがいずれにせよ彼はその思念に対して好奇心を抱いただろうし、トウワンボとの同調は免れなかった。それは彼の運命を決定づけたのだ。

百五十年前、瓦礫の重みに耐えながらゾッドが繰り返した心の叫び。それは死の深淵に望む最期の最期まで、諦めることなく続けられた。その執念。それがトウワンボの未知の力を引き出したのかも知れない。ゾッドはその肉体が冷たくなっても尚、叫び続けていた。彼の心は肉体を越えてトウワンボに乗り移り、百五十年もの間、繰り返し繰り返し叫び続けていたのだった。

その心は今、トウワンボと同調する空船のトウワン水晶を介し、心を開いたパンター二に語りかけてきた。

オマエハダレダ

その耳の奥。脳内部に響く何者かの声に、パンター二は動揺した。

「ほ、本当に空船が？いや、これは違うぞ！これは…ウツ、うわあ
！」

強烈な頭痛が襲った。疑問は許されない。ただ受け入れるのみ。感じるのだ。脳にある全ての情報が搾取されていく感覚。脳髓にナイフをサクサクと入れ、開いて中身を覗かれるような凍るような嫌悪感。

パンター二は今起きていることを、自分の科学知識でなんとか証明しようとした。科学の男ならばそれも当然のこと。だが何も浮かんでこない。頭が働かないわけではない。想像もつかないのだ。

…オマエデイイ…クレルカ…オマエクレルカ

その開かれた脳髓の中に注がれるものがある。それはパンター二の全く知らない記憶の断片。がしかし、それを見る間もなく、自身の心が、その圧力に押し出されようとしているのをパンター二は感じた。

「な…なんだこれは？出ていけ！そこから出ていけえっ！！」

パンター二は半狂乱になり、両腕をやみくもにブンブンと振る。次に頭を抱えて、叫ぶ。狂ったように叫ぶ。いや実際、狂っていたのかも知れない。脳から追い出されようとしている精神が、通常であり得るはずもないからだ。

彼は叫び続けながら辺りをのたうち回り、やがてうずくまった。叫びは止まり、肺に残された最後の酸素が嗚咽となって辺りに響くと、それ以上酸素が吸引されることはなく、そこで呼吸は止まった。次の瞬間に突然、生命感なく崩れ去る。その掌からトゥワンボがコロコロと地面に転がる。

そして動かなくなった。

パンター二の中に、どんなに強い夢や、希望や愛。それに対する固執や執着があったとしても、百五十年の間トゥワンボに封じ込

まれた いや、封じ込めるだけの執念と、それによって熟成された魂になど勝てるわけがない。

末期症状の病に打ち勝つほどの強い気を持つ人間が、事故で他愛もなく死んでしまうように…

そう、それは事故だった。全てが偶然の産物でしかない。この場所に来たことも、赤い光が彼の瞳を刺激したことも、そして空船という、トウワンボ機関の乗り物を持ち歩いていたこともみんな。

パンターニの心は今まさに、消えようとしていた。

心が消えゆく時に彼が思い抱いたこと。それは会社のことだった。彼はこの期に及んでもなお、自分の会社を気にした。なぜならそれが彼にとっての命だったから。だがしかし、本当は違う。彼自身気づいていない、本当に大切なものがある。

それが神の情けというもののなか 命の、その最期の深淵の時、奇跡的に繋がった彼の神経が、一瞬だけ震わせた声帯。それこそが本当の、彼本来の魂の叫びだった。

「…ル…力…」

それが最期の言葉となった。そして空白

突然、大きな肺の吸引と共に、パンターニの肉体は激しく咳き込んだ。

彼の体に生命の息吹が復活し、ゾッドがその肉体の新しい主人となった瞬間だ。そして今度は、その主人の意志を伝えるために、声帯が震えた。

「腹が減った…」

ゾッドとなったその肉体はつぶやいた。百五十年ぶりのその感触。その言いしえぬ心地よさ。

「なんと…素晴らしい…」

ゾッドは仰向けになり、肉体が感じるあらゆる感慨と共に、空を見た。

この世界を覆う真つ青な空。その青さに彼の瞳は、なぜか濡れた。ただそれだけのことで、ゾッドはむせび泣いた。涙は止めどなく溢れてゆく。

生きているということ。それは彼にとって最高の喜びだった。自らの才能をふるうために唯一必要なことは、肉体を持つことであり、生きることなのだ。彼はそのための生存競争に今、勝った。

彼はゆっくりと立ち上がり、地面に落ちていたトウワンボを拾うと、それを固く握り締めそして、笑うのだ。いつまでもいつまでも笑うのだった。

瓦礫の中で「それ」はあがいていた。動きを阻害する様々なモノが「それ」を締め付けている。久しく動かしていなかったその体を懸命に動かし、ただあがく。先に見える光に向かって…

なぜ自分はここにいるのだろうか？

「それ」は思う。最初に抱いた疑問だ。そして心の中にあるこの痛みは。それにさっきまで見ていたあの男。そしてゾッド…

「ゾッド？」

聞き覚えのある名だ。

記録を探した。そしてその中から一つ、分かったことがある。

「俺は…俺の名は…ガリア…」

彼は自覚した。

「それにこの痛み」

それも分かった。あの、パンターニという男。その魂が宿ったからだ。この痛みはあの男の痛み。心が消えても残った埋み火。ガリアに自我を与えたもの。

夕刻。瓦礫の中から這い出したガリアは、黄昏の光を浴びて立ち上がった。

「この魂は、なぜこんなに痛いんだ…」

彼にはまだそれが分からない。心の痛みを感じながら、ガリアにはそれが実感できない。なぜなら彼は今、夕日に向かって歩き始めたばかりの赤ん坊だから。彼が正面に見据える、夕焼けの美しさすら実感できない。そして黄昏の意味さえも。

だがやがて知るのだ。自分を生み出した者を殺すこと。ただそれだけが、魂の痛みを浄化してやれるということ。

父親の犯した罪を償えるのが、自分だけだということを…

心の顔

もう随分前からずっと膝を抱え、その中に顔を埋めていたルカが、不意に顔を上げてガリアを見た。その勢いにベッドが揺れる。

「それじゃあ！ガリアの中にはあたしのお父さんの心があるの？」

ガリアは首を振った。

「いや…心はない。ルカの父親が残したものは心の痛み　悲しみや、憎しみや、悔い。そういったものだけが、俺の中にある」

ルカは再び、涙に濡れた膝に顔を埋める。

「やつぱり　死んだんだ…」
「ああ…」

ルカの脇に座っていたガリアはベッドから降り、なにげに窓に寄った。窓は少し汚れていて、室内のランプがガラスに反射して、外はよく見えない。だがいずれにせよ夜。暗やみだ。見えるのは窓に映る、顔を伏せたままのルカ。でもさっきまでよりはいい。さっきまではガリアの話に何度も体をビクつかせていた。

「これは？」

ガリアは窓の棧にこつ然と置かれた、金色のリングを拾い上げて

言った。文字が彫られている。

「…愛する…リリタ…」

ルカは顔を上げた。

「あ、それはお母さんの形見。エンゲージリング。お父さんと別れてからもずっと持ってた…」

「身に付けないのか？」

ルカは微かに笑った。

「だってそれサイズがね。あたしには大きすぎるの。ペンダントにするつもりで置いておいたんだけど、忙しかったから ちよつと貸して」

ルカはベッド脇の、小物入れの引き出しを開けて、中から細い金属のチェーンを取り出すと、そこにリングを通した。チェーンを首の後ろで止めて、リングは寝巻の胸元に入れる。服の上から胸をポンポンと手のひらで叩いた。

「へへ、これでもう忘れない。ゴメンね…」

ルカの自然な笑い。そしてガリアが突然、言った。

「それがいい」

「え？」

意味が分からずにルカは聞き返す。

「俺は…ルカのその顔がいいと思う」

「その顔って？」

笑顔のことを言っているらしい。

「あ、えと…これ？」

ルカはニッコリ笑ってみる。でもそれは作り笑い。

「違うけどそうだな。そんなのが好きだ」

「そうだね。あたしも笑ってる方が好き。泣くのはやだな…」

ルカはうつすらと苦笑いをした。

「ルカの顔を見てると面白いんだ。たくさんの顔があつて。それは俺にないものだから…」

あきらめたように、ガリアは言う。

「そんなことないよ。ガリアにだって表情はある」

「俺の顔はただの鉄だ。ルカとは違う。ただの人形だからな」

それを聞いて、ブンブンと首を振るルカ。

「そんなことない。あたし、ガリアが色んな表情をするの、分かる。うつん、見える。言葉の調子とかそんなんじゃないやなくて、笑ったり、驚いたり…」

ガリアは無言でルカを見る。いや、睨んでいる。

「本当だよ！あたしにはガリアの表情が」

「なあ、ルカ。俺は慰められるのはあまり好きじゃないんだ」

「見えるもん！最初の内は分からなかったけど。今思い返してみるとガリアの顔、無表情のはずなんだけど、あたしの中ではちゃんと表情があるの。エンドラを出た時は笑ってくれたし、洗濯機を見える時は真剣だった。本当だよ」

「じゃあ、今はどんな顔だ？」

「えっ！？えーつと…」

ルカはガリアの顔をジーツと見る。

「む、無表情」

ガリアは頭を抱えた。

「今は本当に無表情だったの！」

ルカにとってそれは決して慰めではなく、本音だった。しかし見えるのではない。感じるというのが正しい。それがイメージとしてルカの中に残っていて、後からガリアの表情となって記憶の中で再生されていたのだ。単に見ようとしたところで、無表情なのも道理だ。

二人はそれからしばらくの間、沈黙した。

ルカはガリアを怒らせてしまったと思ったし、ガリアはルカに対するイラ立ちは既に消え、考えていた。相手のこと。自分のこと。ただ、それを言葉にするきっかけが見つけれないでいた。

いずれにしろルカと出会ってから、ガリアは変わりつつあった。

「ねえ、本当にそのままでもいいの？マツトぐらい敷くよ」

やがて深夜へとさしかかる頃。ガリアが床の上にじかに寝ようとしているのを見て、ルカが言った。

「このままでいい」

ガリアは床に寝転んだまま、言葉を返す。背を向けていて顔は見えない。

「ねえ… やっぱり怒ってる？」

「怒ってない」

「でもなんか怖い…」

ガリアは何も言わない。

「ねえ、ガリアってば！」

その言葉にようやく、ガリアは反応した。

「さつき、機嫌が悪かったのは事実だし、俺にだって意地もあるからな」

「意地って？」

「急に優しくできるほど、俺は素直じゃないんだ」

一瞬の静寂の後、ルカはクスツと笑った。

「素直じゃん」

ガリアは体を起こし、片ひざを立てた。ルカはその横顔をジッと見ていた。

「…少し、ルカの表情に嫉妬したのかも知れない。悪かった」

ガリアは振り返った。その顔に笑みが浮かんでいるのを、ルカは感じた。

安堵するようにルカも笑う。

「それからマットな、俺の体は床より硬いからいいんだ。ルカ達より眠る時間も少ないしな」

「え、そうなの？」

身を乗り出すルカ。

「ああ、体は疲れないから。俺は頭を休めるために眠る。…さあ、灯り消すぞ」

下手をしたらまた長話になりかねないルカの好奇心を、ガリアはそこでうまく断ち切った。

「あ、待つて…」

ルカは急いでシーツの中に身をくるめる。

「いいよ！」

部屋の全ての景色が残像となる前に、ルカは固く目をつぶった。そして…

「ねえ、最後にひとつ…いいかな？」
「なんだ？」

それは既に暗やみの中の会話だった。そして少しの間、沈黙があった。

「やっぱりゾッドのこと…殺すの？」

不意打ちだった。今は考えたくないことだったが 仕方ない。
答えは決まっている。

「ああ…」

ガリアはうなずいた。

夢のない、深い眠りだった。

しかしどこからか、呼ぶものがある。それが誰の声なのか、ル力には分からない。

おーい！

と呼ぶ、父親の声だったかも知れない。

ねえ！

と叫ぶ、母親だったかも知れない。

いずれにしろそれはル力の心を引っ張り、その心地よい、精神の奥底から引き上げようとするのだ。ル力にはそれが苦痛だった。

あたしはまだここにいたい！

そう思った。でもそれは有無を言わず、邪魔をする。引っ張る。

それがつらい…

そしてルカを呼ぶ者は、不意に大きな叫び声となる。

（ルカツ！）

ガリアだ。それはガリアが繰り返し繰り返し叫ぶ、心の声だった。

ルカは目を覚ます。辺りは暗やみで、目をいくら開いても何も、見えない。

「ガ…ガリアあ…」

心細くなつてルカは呼んだ。

（ルカ、起きたか！）

安心した。ガリアの声だ。でもいつもと何か違う。声が遠いのだ。

「ガリア、どこにいるの？」

ルカは手探りで辺りを探す。

（そんなことより聞け！いいか、ルカ。その家を急いで出るんだ。とにかく早く！）

ガリアの声は切迫していた。

「早くっていったって…何も見えなくて…」

ルカは台の上に置いたはずの着替えを手で探った。

（いいからそのまま出ろ！死にたくなかったら早くしろ！）

そう言われてルカは、首をかしげながらも急いでハシゴを降り、何度か体を機械にぶつけた後、なんとか外に出た。寝巻姿に裸足のまま。

（そのまま走れ！できるだけ早く家から離れろ！）

わけが分からない。それでもルカはガリアの言葉に従った。曇り空で月明かりもないものの、それでも道はなんとかうつすらと青白く見える。

これは夢？

そうも思う。こんな暗い道を全速力で、しかも寝巻で走らされるなんて……

そう思った矢先、暗やみだったはずの辺りの景色が一瞬、フラッシュを焚かれたように白く輝き、網膜に焼きついた。心臓が張り付く。

そして爆音。何よりも爆風は衝撃波となってルカに迫った。安全圏にはまだ距離が足りない。

だがどこからやってきたのか？何者かがルカの背後にスタン！と降り立つと、彼女を抱え上げ、爆風に逆らうことなく飛んだ。吹き付ける熱風から守る壁ともなった。

「ガ、ガリア！」

それがガリアだということはすぐに分かった。見るまでもなく、

体が覚えている。

安全な位置まで離れた所で、ガリアは空中に浮いたまま旋回し、爆発のあった方を向き直る。ルカもガリアに抱かれながら、首を曲げてそれを見た。

「ウソツ！あ、あたしの家が…」

燃えてる。

ルカは腕の中で暴れだし、無理やりその中から出ていこうとした。

「バカ、暴れるな。落ちるぞ！」

「いいから離して！こんな高さなんでもない。早く行かないとあたしの作ったものが燃えちゃう！」

ガリアは再び空中で旋回し、背後で燃えている炎の光からルカを隠した。抱き抱えたままルカの顔ににじり寄り、一言一言、言い含めるように言うのだ。

「もう間に合わない。あれは爆烈弾だ。爆発と同時に家は吹き飛んだ。中の物も全部だ。中の物はまた作ればいいが、今飛び出して行けば、お前は即、殺される。家の上空を見てみる」

ルカはガリアの肩ごしからソツと顔を出し、言われるままに上空を見る。赤い炎に照らされる船。

「あ、あれは…空船？」

「ゾツドの部下だろうな。追ってきたんだ」

空船は一艘。破壊された家の上空を何度となく近づき、何かを探し回っているようだった。

「で、でも何であたしたちのいる場所が分かったの？」

ガリアは小さくうなずいた。

「もつと早く気づくべきだった。ゾッドにはルカの父親の記憶があるんだ。少し前、東の方でも火の手が上がったんだが、それを見て急いで戻って来た。そこはたぶん……」

「まさか、あたしが昔住んでた家？」

「やっぱりそうか。東の方なのか？」

「うん。でも今は他の人が住んでるはずなのに……」

「わずかでも可能性があれば……ってことだろうな」

「そんな……ひどい」

ルカは顔を覆う。

「送られてきた空船は一艘か。もし俺がいると確信してたら、アレシアとかいうヤツを送ってきただろうな。ゾッドには何より、俺が邪魔なはずだから　ってことはマズいな……」

「何が？」

「ゾッドにしてみればここは他国なんだ。なのに無謀すぎる。だがそれは逆に自信の表れかも知れない。もしかしたらエンドラの都市そのものが、一国の力をも越えている可能性だってあるってことさ」

ガリアはそのまま空中を移動し、現場から去ろうとしていた。

「待つて、ガリア。エンドラからあたしたちが乗ってきた空船は放つといていいの？何か調べてるみたいだよ」

「俺たちの遺体をだろ？勝手に調べればいいさ。ヤツを殺すのは簡単だけど、部下が行方不明になれば俺の仕業だと思われる。痕跡を

残すより、今は逃げた方がいい」

ルカは止むなくうなずいた。蒸気洗濯機の復讐心をなんとか押さえ付ける。いや、それだけじゃない。蒸気掃除機に蒸気芝刈り機。蒸気リンゴ皮むき機にそれから…

「そうだ！考えてみたらガリアは何で家の外にいたの？一緒に寝たはずなのにさ。散歩？」

答えない。

「あ、何か隠してる。分かるよ。ヤバイって思ったでしょ」

ルカは少し得意気な顔。ガリアは　やはり答えない。

「言いたくないこと？」

ルカの声が若干沈んだ。更に長い沈黙の後、ガリアはあきらめたようにようやく話し始めた。

「…これ以上、一緒にいられないと思った。もう二度と、ルカとは会わないつもりで、出てきたんだ」

「なんで！せっかく仲良くなれたのに」

マントの襟首をつかんでにじり寄るルカ。ガリアは抵抗することなく、話を続ける。

「だからさ。だから出ていこうとした」

「え、どうして？分かんないよそれじゃ」

と、ルカ。それでも、仲良くなったという言葉自体をガリアが否定しなかったのは、本音を言えば少し嬉しくもあった。

「言っただろ？俺には生まれた時から心の痛みがある。でもなぜ痛いのか？俺には分からなかった」

「それはやっぱ　あたしのお父さんはガリアにとって、他人だから…」

「いや、そうじゃなく、俺には人間が心を痛める理由さえ、昔は分からなかったんだ。でも生きてるうち、だんだんと分かってきた。同時に、それが自分の痛みでもあることに　ゾッドは俺にとって、父親も同じだったから…」

「ガリア…」

そのガリアの寂しげな口調に、ルカは彼を抱き締めてあげたい衝動にかられた。ガリアは続ける。

「俺は思った。ゾッドが犯した罪を償わせることができるのは、俺だけだと　それが役目だと思った。でもルカと出会ってから、ゾッドを殺すことは同時に、ルカの父親を殺すことにもなった。もちろん、最初はその現実を見せることも俺の役目だと思ったし、ゾッドはルカにとっては仇だからな。それでいいと思った」

ルカは一生懸命、自分を納得させるためにコクコクと頷いている。

「だけと違う！心はゾッドでも、肉体は今も父親だってこと　ルカはそのことを気にしてる。それが分かった以上、ルカと親しくなるわけにはいかなかったんだ。だから離れようとした」

それは確かに凶星だった。父親を殺されたくないと思っているのは事実だ。だけど…

「それは罪の意識？」

ルカは訊ねる。

「それもある。何しろゾッドは一筋縄じゃない相手だ。迷いは持ちたくない。ルカがどう思おうが、今ならまだ　殺せる」

いつしか東の空は白み始め、景色はボーツと青紫色に輝き出した。空を覆う厚い雲は変わらない。

「ねえガリア。あたしをよく見てよ」

ガリアは抱きかかえたまま、ルカを見下ろした。

「あたしには今、何もないの。家もなければ着るものだってない。これには罪の意識は感じない？」

そこには出会った時とは違う　ビーズの飾りも一切ない、ただ薄く白い寝巻をまとうだけの少女がいた。裾から出る細い足首や、骨張った踵を守るものすらない。

「悪いとは思ってる…」

「違う！」

ルカは強く首を振った。

「これはガリアが悪いんじゃないの。でもキミは今、あたしに残されてるたった一つのを…奪おうとしてるんだよ」

「分かってる。でも悪いが、ゾッドは殺す」

「そうじゃない！まあ、そりゃ目の前で父親の肉体が殺されるのは見たくないよ。だけどそうじゃないの。あたしに残されたたった一つのものはね…」

「？」

「ガリア。キミだよ」

ガリアの移動は突然に止まり、その場で硬直した。

「…なぜ？」

「分かんないよ。でもあたし、ガリアに捨てられたら、きっと泣く。ガリアが好きだって言ってくれた顔に、戻れなくなると思う。それはもう、ゼツタイ！」

するとガリアはゆるゆると降下し、地面に着地した。

「どうしたの？」

「い、いや…分からない。でも今は 飛べそうにない」

「あ、じゃあ降ろして。歩くから」

「大丈夫だ。歩くぐらいならできる」

「そう？じゃ、甘えちゃおうかな」

まだ人気のない朝の道を、鳥の声に囲まれながら二人は進んだ。ガリアは考える。今心の中を占める、この奇妙な感覚はなんだろう？それは分からないもの。でも、分かることもある。守らなくてはいけない存在が、目の前にいる と。

「ね、ガリア」

ルカの問いかけに、ガリアは答える。

「分かった。捨てないから安心しろ」
「そうじゃなくて！」

ル力は笑う。

「ガリア、お金ある？」

「ああ。でもなぜだ？」

「服買って欲しいなーって。あと、靴も」

「分かった。あとで渡す」

しかしル力は首を振る。

「って、まさか俺が買うのか？」

「だってあたし、こんなカツコでお店入れないもの」

ガリアはしばらく歩みを止めた後：

「分かった　買えばいいんだな」

そう言って、再び歩きだすガリア。

ガリアの顔が困ってる。ル力はそう感じた。でもあえてそれを口に出すのはやめた。今はガリアが困っていればいるほど、ル力にはそれが嬉しい。

「なに笑ってんだよ」

「ううん、なんでもなーい」

そう言ってまた、笑った。

廃坑

「いい、いくよ!」

「分かったからさっさとしてくれ」

町を一望できる丘の上、ルカはマントをグルリと巻いて全身を覆い隠し、あぐらをかいて待っていたガリアをジラした。何回か体を横に屈ませて、ニコニコニコニコ、もったいぶるルカ。その度にマントの裾が地面に擦れる。

「じゃーん!」

マントを勢いよく外し、彼女にしてみれば、ガリアからのプレゼントでもある衣服を披露した。それは膝丈の白い七分袖のワンピースで、袖口と襟首に青い刺繍が施されている。襟首の前には短いスリットが入り、刺繍もその型に合わせてV字型を描いていた。

「ねえ、似合う?」

ルカから返してもらったマントを、慣れた手つきで肩口に巻き込みながら、その質問にガリアはうなずいた。というより、うなずくのが無難だと判断した。

「ねー、かわいいよコレ。ホントはもったいもないの買ってくるかも、とか思ってたんだけど、良かった。靴のサイズもピッタリだし。指でサイズ計った甲斐あったね」

ちょうどガリアが手のひらを広げた時のサイズと、ルカの足は同じ大きさだった。

「本当はな…もつと動きやすい服を買うつもりだったんだ。でも相手が女だと分かったとたん、店主が色々聞いてきて、これはダメだとか、それは流行りじゃないとか　一体なぜなんだ？」

困惑するガリアの仕草を見て、ルカは笑った。

「その店主って、女の人でしょ？」

「よく分かるな。年配の人だった。小さな店だったな」

「ふーん。大きなお店だったら違ったかもね。でも何でこんな遠くまで飛んで来たの？途中にもつと大きな町もあったのに」

「この町は　モナンブーワは昔の馴染みなんだ」

「ガリアの…へえ。ここ、モナンブーワって言うんだ？」

「ああ、住んでたことがある。まあ、あの店は初めてだったけど。

つと、それからな」

そう言っただけでガリアは、何やらマントの下でゴソゴソと不穏な動きを見せた後、その隙間から無造作に手を出して、ルカにある物を手渡した。

「え、何？」

手のひらに乗っていたのは、ビーズの首飾りだった。色とりどりの硝子ビーズが、複雑で綺麗な、幾何学模様を描き出している。

「わ！ガリア…これ。わざわざ？買ってくれたの？」

ルカは信じられないという顔で、ガリアを見る。

「前も体中に付けてたろ。それぐらいしか見つからなかったんだ。同じにできなくて悪いな」

ガリアには、何の照れも躊躇もない。プレゼントという意識はないようだ。

「同じにつて…」

ルカは少し苦笑い。それに、体中にじゃないよ！と、心の中でつぶやく。

「どうかしたのか？」

「ううん、何でも　ね、ガリア。付けてくれる？」

ルカはめげずに言った。

「一人でできるだろ。さ、行くぞ」

それっきり彼女を見ることもせず、ガリアはスタスタと丘から続く山に向かって歩いていつてしまった。

ルカは少しふくれっ面で、それでも小走りにガリアを追いかけた。自分で首の後ろに回す両手が悲しい。それにこの動作は慣れている。ガリアに追い付いた時には、ビーズは既に、首を美しく飾り立てていた。

「ま、嬉しいけどさ」

小さな声で、ルカはつぶやいた。

細い急勾配の道を、両脇から下草やら枝、その枝から枝へと網を張るクモの巣などが行く手を阻んだ。ガリアはそんなもの気にも止めずにガンガン進んで道を開けるが、時々、ガリアに弾かれた枝や、壊されたクモの巣がルカにも襲ってきた。

（さっきみたいに抱えて飛んでくれれば楽なのに！）

息をゼエゼエ切らしながらルカは思う。瞬発力のある彼女も、持久力には秀でていないようだ。それにだいぶ疲れもある。

いったん足を止めて、ふう…と、一息ついた時だった。ルカは何かの気配を感じて、釣られるように脇を見た。

「あ！リスだよ。リス。見て見て。ねえ、ガリア」

最初、短く叫んだ後、ひそめるような声でガリアを呼ぶルカ。

「ハラが減ったのか？もう少しで着くからガマンしろ」

一瞬振り返ったものの、ガリアはそれ以上の優しさを見せずに、木の生い茂る山道を更にどんどん登っていった。

リスは木の枝の上で、両手をクルクルと回して忙しそうに顔を洗っている。すごく可愛い。

（食うかつ！）

そうして二人はようやく森を抜け、斜面の勾配も緩やかになった。ハア…と、大きく息をつくルカ。そして目の前に広がる景色を見る。それは、幾つもの切り株がかつての伐採を思わせる切り開かれた雑草の台地で、丘、崖、そして沸き出る清水といった、この山の

中腹の姿だった。しかし、何よりも目を引くものがここにはある。

「あれは…反射炉？」

ルカが言った。

「よく知ってるな。古いものだ。今は動いていない」

煉瓦造りの二本の高い煙突が、崖の下の台地にそびえている。それは鉄製銑のための旧式の炉だった。他にも崖の上には、やはり旧式の大気圧機関を利用した揚水ポンプが見える。ルカの知る蒸気機関よりかなり遅れたものだ。それとこの地を象徴する巨大な立て坑と、幾つもの横抗がある。

「鉾山ね。でも誰もいないみたい」

「昔はどこかの会社の敷地だったらしいけどな。随分前に潰れたって話だ」

「あ、ガリア。あれ見て！」

思わずルカが声を上げた。今度はリスどころの騒ぎではない。彼女が指差す先には、つる植物に覆われ、自然と同化しつつある大型の空船があったのだ。

一部露出した船体は朽ちかけ、長い年月の経過を偲ばせる。それによく見ると、台地のいたる所にそんな緑の起伏があり、恐らくはそのどれもが死んでしまった空船、もしくは何かしらの人工物であることは容易に想像がついた。

「昔は掘り出した鉾石や、製銑された金属を運んでたんだろうな。『失われた時代』が来るまで、トウワンボ機関が全ての動力の中心だった。ここも例外じゃない」

「廃坑：か。でもあれは？反射炉とか、大気圧機関のポンプとか。トウワンボとは関係ないよ」

「この鉱山の場合、炉や揚水ポンプに使っていた水晶の力が先に失われたんだ。だからあれは急遽あつらえた代用施設さ。当然、鉄の質も格段に落ちた。その後、空船も飛べなくなつて、結局この場所は放棄された。空船の代わりにトロツコを町まで通す考えもあつたらしいけど、それまで会社がもたなかった。それは鉄の需要が急激に減つたせいもある：って、確かそんなこと聞いたな」

「ふーん、詳しいんだね。なんで？」

「言つたろ。昔住んでたつて」

「でもガリア、目覚めてから三、四年でしょ？よく古い話知つてるよね。そんなに下の　えーと町：」

「モナンブーワ？」

「そう！その人たちと親しいご近所づき合いしてたの？」

首を軽く左右に振りながら、ガリアは答えた。

「それはないけど　でも、一人で住んでたわけじゃないから……」
「え？」

ガリアは背を向けて、更に歩いた。最後に見えた表情は、悪戯そうに少し笑っているようにさえ感じられた。

反射炉の象徴とも言えるガツシリとした背の高い煙突は、対照的に粗雑な造りの木造建築物から伸びている。それは老朽化も進み、自然に侵食されつつあるが、それでも人の住んでいる気配は至る所にあつた。扉へと続く道が今でも草に覆われていないのが何よりの証拠だ。ガリアはその扉の前までツカツカと足早に歩くと、躊躇することなくそこを開き、中に入つていった。

「じいさん。まだ生きてるか！」

珍しく勢いづくガリアの後を、ル力はそつと付き従つた。

雑多に物が積まれたその部屋の中は、まるで倉庫のようだった。それでも奥の方は生活感を感じさせる物品が置かれ、更に奥には確かに人がいた。白髪混じりのその長髪の人物は背を向け、姿勢よく小さな椅子に座り、何か棒のようなものを手に持っている。空いた手でランプの灯を強めたのだろう。部屋が明るくなった。

老人が持っていたのは棒じゃない。刀だ。それは白く輝く一本の光の線となって、ルカの瞳を一瞬、キラリと刺激した。

「……そろそろ帰る頃だと思っていた。だが出ていく時は一言ぐらい告げるもんだ。なあ、ガリアよ」

振り返ったその人物は、妙に落ち着きのある喋りと、東洋の着物、それに東洋風の顔立ち。更にボサボサの口ヒゲをたくわえ、見るからに職人、いや、仙人という感じさえ漂う老人だった。

ガリアは答える。

「悪いとは思ってる。ついでにまた少しの間、厄介になる。仕事も頼みたい」

「やれやれ、忙しいことだな。だが驚いた。その子はなんだ？人間に興味を持てとは言ったが、まさか女とはな。ウム。よし！」

「おい、じいさん。この子は……」

ガリアが何か言いかけた時、老人は持っていた刀の刃先を、彼の目の前に突き付けた。老人の眼光が光る。

「何のマネだ？」

鋭くなったガリアの声に対して、老人の目はニンマリと笑った。

「昔は刀を払い除けて、チャクラムをワシの喉元に突き付けたもん

だがな。なるほど。尚よし！」

二人は笑った。

「そんなこともあったな。で、じいさん。そのチャクラムなんだが……」

老人はその声を、シートと口で静めた。

「そんなことよりどうだ？この刀は」

老人は不意に刀を投げ、ガリアは苦もなく受け取ってそれを見た。

「どうって……綺麗な刀だな。こんなので役に立つのか？」

「フフン。ところがそれは刀が持つ矛盾を解決している。切れる刀を作るには硬くなくてはならず、硬い刀は折れやすい。柔らかくすれば曲がってしまう。だがその刀は折れず、曲がらず、よく切れるのだ。何より美しいしな」

「ふーん。じいさんが打ったのか？」

「いや、東洋の刀でな。譲り受けたものだ。これほどのものはまだ作れんが、まあ……近いものならば作れる。理屈は分かっているからな」

ガリアは刀を老人に返した。

「じゃあその理屈とかいうヤツで、俺のチャクラムも鍛えて直してほしい。いや、俺が言うように改造してほしいんだ」

老人はガリアをジッと見ていたが、不意に瞳がその後ろに向けられ、怪訝そうな表情を浮かべた。

「どうした？」

「いや、その子がよ、具合が悪いんじゃないかと思ってな」

「え？」

ガリアは振り返ってル力を見る。返ってきたのは虚ろな目。彼女の長いまつ毛が、その瞳を幾度となく覆う。

「あ、ゴメン。どうしたんだろう…あたし。なんか急に…寒くなってきた…」

そう言っただけは、フツと抜けるように笑った。

そのままガリアの体にもたれ掛かり、更にズルズルと落ちていく。支えようとするガリアの手をも無情に擦り抜け、そしてル力は床に倒れた。

こういう時ばかりは、刀や、チャクラムを取る時のようにはいかない。彼女に触れる度、その柔らかさにガリアはいつも戸惑うのだ。だがそれも致し方ない。彼は人間の硬さならば知っている。しかし、女性の硬さを知ったのは、ル力が初めてだったのだから…

刀鍛冶

朦朧とする意識の中で、ル力は声を聞いていた。それは老人の声だった。

痛いのか？

理屈は分かんが、鉄の熱膨張が水晶に悪影響を及ぼしているのかも知れんな

普段はなんとも？そうか…

老人は誰かと会話を交わしているようだ。誰かなど決まっている。しかし、ガリアであるはずの、相手の声が聞こえてこない。ル力は混濁する意識の中で、ただ、老人の声だけを聞いていた。

確かめようにもな…例え分解できたとしても、お前の鋼の体をここまで見事に溶接する技術がワシにはない。いや、今の時代で知る者は、恐らくゾッド一人なのだろう

ムリにワシらの技術でやろうとすれば、体中ネジやリベットだらけになるぞ。それに強度も弱まるしな。まあ、その体と付き合っ
ていくんだな。人間だって歳を取れば、体はどこかしらおかしくなるもんだ。一歩近づいたと思えばいい。そうだろう？

それからな

それ以上、鉄球を喰らうんじゃないぞ

その言葉を最後に会話は途切れ、ル力の僅かにつなぎ止めていた意識も、徐々に眠りの中に埋没していった。

老人の傍にガリアは確かにいた。にも拘わらず、ル力にはその声

が聞こえなかった。なぜなら、ガリアのそれは声ではないから。老人だけに向けられた思念だったからだ。

目が覚めたときに、うつすらとでも灯りが漏れて来るのは嬉しいものだ。隣の部屋から漏れるその灯りは、起きている人間が近くにいる、という安心感をルカに与えた。それは幼い頃、両親に抱かれている時の安心にも似ている。

時折、カッーン、カッーンという大きな音が響いてくる。ああ、あの音で目覚めたのか　と、ルカは思う。そして徐々によみがえる記憶。騒動になったことも、なんとなくは覚えていた。

ルカはベッドの上で体を起こしてみる。首飾りがない。ガリアが外してくれたのかも知れない。

でもそんなことより、いつの間にか寝巻を着ている。周りを見回すと、ワンピースは部屋に渡されたロープに干されていた。

「汗をかいたから？」

小さくつぶやく。

しばらくは頭をポリポリと掻いたり、意味もなく寝巻の布を手でいじったりして、何か考えごとをしているようだったが、突然の寒気を感じて肩をすくめた。夏とはいえここは高山地。夜はそこそこ冷えるのだ。

体を冷やさないように毛布で体をくるんだまま、ルカは試しにベッドを下りて床に立ってみた。少しフラフラするけど大丈夫。隣の部屋から聞こえてくる音の原因を、確かめに行った。

戸を開けて暗やみから、煌々と炉やランプの炎が灯る部屋へと入る。熱さと湿気で、部屋はムツとしている。そこには炉の前で鉄を打つ老人の後ろ姿があった。ガリアの姿はない。

「おお、起こしてしまったか。すまん。こんな時間でないと仕事
ができないタチでな」

振り返らずに老人は言った。

「あの…ガリアは？」

「一眠りした後、外へ出ていったようだ。ひとところにジツとして
いるのが性に合わんらしい。ところでお前さん、腹が減つとるよう
なら、そこに粥がある。この台の上で温めるといい」

「ありがとう」

老人が指し示す先には鉄の鍋があり、蓋を開けるとミルク粥独特
の香りが漂って、ルカの口と胃を強く刺激した。よほどお腹がすい
ていたのだろう。実際、ガリアが町で買物をしている時に、丘の上
でパンを食べたのが最後だったことをルカは思い出した。

「あせらずにな。ゆっくり食うんだぞ」

東洋風の漆の椀を差し出しながら、老人が優しく言った。

老人が作業する炉熱の余りを貰う形で、ルカは台の上で粥を温め
て椀によそる。ただでさえ熱い部屋に湯気が立ち上る。それからし
ばらくは何も話さず、考えず、ただ食べることに集中した。その間
も老人は山吹色に光る金属の塊に向かつて、吹き出す汗と共に鉄槌
を振り下ろし、その度にキーン、キーンと鋭い音が部屋に響いた。
胃に染みわたる喜びがようやく適度な満腹感へと変わり、ミルク
粥があまり好きではない自分を思い出した頃、ルカは老人に向かっ
て話しかけた。

「あの…おじいさん、お名前はなんて…」

「シーツ！ちよつと待て！」

強い口調で老人は返した。

老人は浸炭処理をした山吹色の金属を少しの間見つめ、やがて一気に塩水の中に浸した。ジュースという音と共に、そこから蒸気が上がる。

フーッと、大きな息をついて、老人はようやくルカに向き直った。顔は一転してニコニコしている。

「済まなかった。この焼き入れの作業が一番神経を使うものでな。ああ、そうそうワシの名は　ウム、そうだな。できればマサムネと呼んでくれんか？ただのマサムネだよ　ルカさん」

「マサムネ…ね。うん、分かった。じゃあね、マサムネ。あたしのこともただのルカって呼んでくれる？さん付けなんて慣れてなくて」

老人は口を開けて笑う。最初の印象とは違う、屈託のない表情を浮かべた。

「ハハハ、いや、町には気取った女ばかりだな。お前さんみたいなのは好きだよ。どうやらワシはこの山で、二人目の友達に巡り合えそうだ。よろしくな、ルカ」

「うん、よろしく。マサムネ」

「具合はどうかね？」

「うん、まだ少し熱っぽいけど、食べてすぐ横になるのもね。この部屋なら温かいし、もう少しここにいてもいいかしら？」

「いくらでも」

マサムネは身の回りの工具を片付け始めた。背はルカと大差ないが、下に屈む時でさえ、背筋はピンとして、姿勢はいい。

「マサムネはここに一人で住んでるの？」

「ああ、そうだよ。といつても、勝手に住んでいるんだがな。遺棄された鉄鉱石や製鉄された鉄が、ここには未だにゴロゴロしてる。ワシのような鍛冶にはたまらん場所だよ。こんな時世だし、誰も文句は言わんしな」

「今打つてたのは？ガリアに頼まれたもの？」

「この刀はワシが好きでやつとるだけだな、ガリアからの依頼はこっちだ。なんでもアレシアとかいう人形と戦って、チャクラムの刃がこぼれたらしくてな。お前さんもいたんだって？」

「あ、あの時…」

ル力はエンドラでのことを思い出した。アレシアの鋼鉄球…

「だがこれはもうチャクラムじゃないわい。ホレ、見るかね？」

渡されたそれは、刃でもなんでもない、ただのドーナツ状の錘としか見えなかった。マサムネは続ける。

「この錘をガリアのチャクラムにガツチリと固定すれば完成だ。一体何を考えているんだかな。物を切る道具ならば喜んで打つところだが まったく、ワシをナメとるわ。しかし、できる限りのことはしたぞ。いいかね。これはただの鉄塊ではない。的確に熱処理された、まったく質の違う鉄が多層構造に重なっていてだな…」

突然、マサムネは饒舌になり、やはり自慢の逸品らしいその解説を始めた。山での一人暮らしは淋しいのだろうか？ と、冷静に思うル力。

「ガリアとはどうして？」

ひとしきり鉄の講釈にうなずいて、時に真剣に感心した後、ル力

はそれを訊ねた。

突然、空気が変わるのを感じた。

マサムネは着物の袂から短い洋風パイプを取り出す。

「煙草、いいかね？」

「あ、ええ」

マサムネは脇の小物ケースから葉を取り出すと、指でギョツ、ギョツと、パイプの中に詰めていった。やがてマッチの火でプカプカとパイプをふかし始めると、手で振り消したマッチの匂いと共に、甘く芳ばしい香りが辺りに漂う。

「ガリアはな…数年前に突然やってきて共に暮らし、半年ほど前、突然出ていった。そういう仲だよ。奴に聞いたことはないが、ワシは友達だと思つとる」

「数年前？ガリアが目覚めたのが四年ぐらい前だって聞いたけど…」

「ああ、その頃だろうな。最初に会った時、奴は裸でな。仰天したもんだ。鉄の人形が人間のように動いてるんだからな。夢としか思えなかったよ」

「でしようね」

二人は笑った。どこか共通の笑い。

「最初、奴は殺気立っていた。なぜここに来たのかは聞かれても分からん。或いは鉄の匂いに惹かれたのかも知れんな」

「殺気立って って、ガリアが？」

「ああ、獣とも違う。しかし人間でもない。不思議な瞳だったよ。ワシは殺されることを覚悟したぐらいだ。なんとなくな、分かるんだ。鋭利な刃物を心の内に秘める者が出す、気というものはな」

ルカはガリアが時折使う、自分自身を苛む言葉を思い出した。

「鉄だから　人形だから？」

「ウム、それもあるだろうなあ……」

マサムネは、ぷかあ…と、煙を緩やかに吐き出すと、今度は一転して鋭い口調で続けた。

「だがガリアが持つ業はそれだけじゃあない。奴はそもそも人を殺すための兵器として作られたらしい。だがな、それにも拘らず、誰よりも殺される人間の気持ちを知って生まれてしまったのがヤツ。ガリアなんだよ」

マサムネの口元に漂っていた煙が、ため息と共に乱れる。

「お父さんの…魂…」

微かな声で、ルカはつぶやいた。

「そしてその痛みを知らながら、いや、知っているからこそ、父親であるゾッドを殺そうとしている。全く…因果なことだ」

二人は長い時間、ただ黙っていた。マサムネはいつしか消えてしまったパイプの火を再びマッチで灯し、大きく一息つく。

「ワシと暮らしていた頃のガリアは、本当に毎日が辛そうだった。心を開くことも稀だったしな。恐らくはゾッドを殺す決心を固めるために悩みぬいた日々。それがワシとの数年間だったのだろう。それから一人で生き抜いた半年間は、どんな日々を過ごしてきたのか。そして本当に偶然に、ルカ。お前さんと出会った」

マサムネはジッと、うつむくル力を見つめた。

「話は聞いたよ。まあ、因縁というヤツだ。今夜は色んなことが頭をよぎってなあ。まったく。鉄を打つ者として失格かも知れん」

マサムネは笑った。

ル力は尚もずっとうつむいていた。

その時、外の扉が開く音がした。部屋に風が流れ込む。

「ル力、起きてて大丈夫なのか？」

ガリアだ。

ル力は顔を一瞬だけ背けて、瞳から溢れ出す涙を拭き取り、笑顔を彼に向けた。

「あ、ガリアお帰りなさい。お騒がせしました。もうだいぶいいです。でもどこに行ってたの、こんな時間　って、今、何時なのかしら……」

ル力はキョロキョロと辺りを見回した。

「じき夜明けだ。それより……」

ガリアはツカツカと歩み寄り、毛布に包まりながら椅子に座っていたル力の、目の前まできて手袋を外した。

ガリアは、そのむき出しの手をル力の額に当てる。今はなぜか、手に包帯はしていない。

「わー、冷たくて気持ちいい」

が、その手はすぐに外された。

「ホラ見る。それはまだ熱がある証拠だ。来いよ」

「わっ！」

ガリアはルカの体を毛布ごと抱き抱えて、ベッドのある部屋へと入っていった。

マサムネはそれを微笑ましそうに、まるで孫を見るような瞳でウンウンとうなずくのだった。

「どうだ？」

ベッドに横になったルカに向かって、ガリアが聞いた。

「うん、まだ少し熱、あるみたい。あ、ねえガリア……」

ガリアは黙って見ていた。

「買ってもらったワンピース。あれさ、あたし……汗かいたの？」

干してあるワンピースに一瞬だけ顔を向け、ガリアは答えた。

「ああ。すごい汗かいてて、じいさんが着替えさせてやれていたから俺が……覚えてないのか？時折目は開けてたみたいだったけどな」

「うん、全然。そっか、ガリアがやってくれたんだ……」

ルカは毛布を両手でつかんで、少しだけ上に引き上げた。ガリア

も今回は察知した。

「あ、悪かった。 気にしたか？」

「うん、ちよっと…。でも平気。ありがとうね」

「ああ…」

お互いが黙って、部屋は静まった。

夜明け前、鳥が起きだす前の静寂。声を出せば、それは隣の部屋にまで響きわたるほどの静けさ。それが言葉を出すことをためらわせた。

ガリアが立ち上がって部屋を出ていこうとしたその時、ルカの手が、ガリアの上着を引っ張った。

「うん？」

ガリアが振り返る。

「ねえ、さっきの…やってくれる？」

「さっきの？」

「うん。おでこに手を当てるヤツ」

「ああ、あれか」

ガリアは再び手袋を外し、ルカの前髪をかき上げてから額に手を乗せた。

「冷たくて気持ちいい」

「鉄だからな」

ガリアは言った。自分を苛む言葉。しかし、今はその中に刃は感じられない。ガリアは変わりつつあるのだ。

「あ、でも…」

「どうした？」

ルカは少し言いづらそうに、それでも、素直に言った。

「すぐ温かくなっちゃうね」

「…鉄だからな」

一瞬見つめ合った後、二人は笑った。

人の痛み

久しぶりの晴れ間。ガリアとルカの二人は、反射炉を見下ろす崖の上　そこに朽ちていた大きな空船の甲板の上に向かい合い、のんびりと午後のひと時を過ごしていた。

何しろこの一週間の間に天候は崩れ、しまいには一帯を嵐が襲い、ジツとしているのが嫌いなはずのガリアでさえ、小屋から出ることはなかった。部屋数が少ないこともあって、マサムネに半ば強制的にルカと同室にさせられ、当然、ルカの色々な好奇心から逃れ続けることもできず、二人はよく話をした。ただそれでもゾツドやエンドラのことに關しては、まるでそれが禁句であるかのごとく口を閉ざしていた。ガリアだけではなく、ルカもだ。

しかしほかの色々なこと　そう。例えば、ガリアの体はただの鉄ではなく、今はない過去の技術で作られた錆びにくい合金であるとか、それでもやっぱり雨の日は嫌いなのだとか　おおよそし前の彼からは想像もつかないような、本音がポロポロと出てくるのだ。そんな時は決まって夜。雨や風の音が家の外でうなりを上げ、室内はランプの橙色の灯り、それにキーン、キーン、という鉄を打つ単調な音が響く時間帯。不思議とそれら全てが自分たちを守ってくれると感じられ、ガリアでさえ心躍る子供のような感覚を味わった。

そしてようやくにして空は快晴となり、二人は久しぶりの日差しを楽しんでいたのだった。だが正直に言えば、ルカはこの晴れ間を待つてはいなかった。それは、今まで触れずにいた禁を解かねばならない時だったから…

とはいえ今はまだ、この久しぶりの青空を楽しむだけの余裕があった。或いは、ガリアがそれを演出したのかも知れない。

「ルカ、また投げてくれ」

ガリアに言われるよりも素早く、ルカは手に持っていた青いオークの実を、体を反転させてあらぬ方向へ思いっきり遠くへ投げた。悪巧みの顔。ガリアは不意をつかれたもののすかさず反応し、自分の脇に浮かせていたチャクラムを飛ばす。

「わっ！」

それはルカの頭の上を風圧と共にすり抜け、オークの実が地面に落下するよりも早く追いつき、上空に弾き飛ばした。更にチャクラムは急反転し、ホーミング弾のように弾き飛ばされた実を追い、再び弾く。それが何度も何度も繰り返し返され、オークの実は重力の意に従うことも許されずに、どんどん上空へ舞っていった。

「残念だったな」

ガリアは笑った。

「怖いなー。ギリギリじゃん。もし当たったらどうするのよ！」

ルカは手で頭を覆い、首をすくめている。

「そうでもなかったぜ。それにわざと変な場所に投げたルカも悪いもつともだ。ガリアはまだチャクラムでオークの実をもてあそんでいる。」

「面白かったけどな」

ガリアが一言付け加えて、笑った。

ルカはポリポリと頬を搔く。しかし長い袖口がそれを邪魔した。彼女が今着ているのはガリアのダブダブのシャツと、裾を何重にも折り返したズボンだった。何しろ外出着の余分がないのだから仕方ない。いや、あるにはあったが、せっかく買ってくれたワンピースが雨上がりの泥で汚れてしまうのが嫌だった。そのわがままの戦利品が、今着ている服というわけだ。もちろん、せっかくのデートなのだから（と、ルカは思っている）女の子らしい格好を　　というのはあったが、しかし、ガリアの服の大きさを実感するのはやはり嬉しい。

「でも上達したね。さっきまではヘツタクソだったのにね」

本当は言うほど下手ではなかったのだが、ルカは嫌味を込めてクスクスと笑った。

ガリアは最後に実を大きく崖の向こうに弾き飛ばし、右手を天空に上げて、戻ってきたチャクラムをガツシリと掴んだ。さすがに以前のように、指先でクルクルと受け止めることはできなくなったようだ。何しろこの新しいチャクラムはズッシリと重い。

「あれは新しいチャクラムに慣れてなかったただけさ。昔からこれ位はできたんだぜ」

少し意地を張るように言うガリアの姿が、ルカには何か愛しかった。

「ン？」

ガリアが何かに気がついた。

「どうしたの？」

「じいさんが戻ってきたみたいだ。行ってみようぜ」

今日は珍しく袖なしの黒いシャツ一枚のガリア。ふだんは見せることのない二の腕も、質感はともかく形だけ見れば人間の腕とそう変わらない。決して太くはないが、間違いようのない男の腕だった。但しパーツのつなぎ目と、少しだけ見える間接部分の球体を除けばだが…

その腕がル力を苦もなく抱え上げると、ガリアはそのまま崖から飛び降り、30メートルほどを落下してフワリと着地した。と同時にル力は飛び出して、マサムネの元へ駆け寄る。慣れたものだ。

「マサムネ、お帰りなさい。早かったね。町はどうだった？」

マサムネの表情は曇っていた。だが不思議なことに、出てくる言葉は全くうらはらなのだ。

「ル力が彫ってくれた飾りが効いたらしい。あつという間に売り切れたよ。ナイフや剃刀だけじゃなく、長剣まで売れたんだからな」
「少しは役に立てたかしら…」

空気を感じて、ル力の語感はずっと自然と控えめになる。

「少しどころじゃないさ。まあ、長剣に関しては別の理由もあるんだが…」

言葉を濁した。その時になってようやく、マサムネの口調と表情が一致した。何かあったことは間違いない。

「？」

「ま、まあ、立ち話もなんだ。家に入ろう。そうそう、土産も買ってきたよ」

マサムネは、背中のリュック鞆をポンポンと手で叩き、フツツと、やはり控えめに笑った。

「エンドラが宣戦布告！」

そのガリアの声は、隣の部屋で着替えていたルカにも聞こえてきた。マサムネが町で買ってきた服だ。

「ああ、なんでも旧教皇領は即日降伏したらしい。ふもとは今それで大騒ぎさ。次は自分たちの国じゃないかってな」

「旧教皇領には幾つもの都市国家があつたはずだ。どの国だ？」

「全部さ。標的にされたのは一国だがな。それがどこかは聞いてないが、曇天と共に数十もの空船が飛来し、爆弾の雨を降らせたそうだ。ビラと共にな」

「ビラ？」

「ああ、これだ」

マサムネは、薄汚れた紙ビラをガリアに渡した。ルカもシャツを首に通しただけで、肌着が見えるのも気にせず、勢い良く部屋を飛び出してきた。裾を素早く降ろしながらビラを覗き込む。

ビラにはこう書かれていた。

『都市エンドラはこれより帝都となり、その都より我は、全世界に對して宣戦を布告する者である。まずは旧教皇領に散在する統率なき国々よ。我らの力を知るがいい。そして直ちに従属せよ。白旗を』

以て意思を示せ。だが嘆くことはない。これは我が理想と掲げる、世界帝国建立のための第一歩なのだ。

偉大なる発明家にして世界を統べる善導者 ゾッド・シャゾット』

「ずいぶん長い肩書きね…」

「強い自己顕示欲が見て取れるだろう？ゾッドって奴の特性なのだろうな」

二人に続いて、ガリアが吐き捨てるように言った。

「ゾッドの考えそうなことだ。あいつは世界を自分の所有物にしたらしい。いや、巨大な実験場か」

「実験場？」

ルカが訊ねる。

「ああ。自分の発明のためにな。そして究極的には自分の思うままの世界を作りたい。元のゾッドはそういう男だった」

「でもいくら何でも、世界を個人の物になんかできるわけ…」

「いや」

ルカの言葉に、マサムネとガリアの二人が同時に反応して、首を横に振った。ガリアが続ける。

「トウワンボの力に対抗できるものなんて、この世界にはないんだ。それにゾッドは歴史上、最もトウワンボを使いこなせる人間であることは間違いない。俺やアレシアがいい見本だ」

「それにな…」

ガリアの言葉を受けて、神妙な面持ちのマサムネが続けた。

「…ワシは今日、見てきた。ふもとの人間たちの姿をな。皆、噂を聞いただけで恐れおののき、戦うことなど微塵も考えていない。したことといえ、白旗を天に向かい振るのみだ」

「え！？　って、町の人はもう降参しちゃったの？」

「ああそんなようなもんだ。まだ敵が来もしないのにな。長い平和ボケが仇になったんだろう。ワシはそれを見て、ゾッドが抱く野望にことさら現実味を感じてしまったよ。いつもは売れることなどない長剣が売れたのだから、少なくとも戦う覚悟のある者も少しはあるのだろうが…」

「でも…どうしてだろう？　みんなおかしいよ。だって現にたくさんの人が理由もなく殺されたんでしょ？　なぜみんな怒らないの？　戦わないの？」

ルカはいきり立つ。マサムネもうなずいて同意したが、こうも言った。

「確かに皆おかしいな。ワシもそう思う。だがな、ルカ。ゾッドもそう思ったかも知れんぞ」

「ゾッドも？」

ルカは困惑した。

「そう。奴がビラに書いた肩書きを見れば、おのずとそれが伺える」

ルカはもう一度ビラを確認しながら首をひねった。

「どういつことかしら？」

「ウム。発明家というヤツはな、未来の姿を夢見るもんだ。だが今のこの世界はむしろ退行しとる。発明家にとっちゃあツライよな。」

それがこの善導者という言葉に出ているんだよ。世界を良い方向へ導きたいという言葉。その思いはたぶん本当なのだろう。だがゾツドの場合、導くべき場所に問題が うん？どうした？」

ルカが神妙な顔をしている。

「ン…なんかね。あたしも夢、見てるからさ。一緒だなんて。あたしが見てる未来は間違っていないのかなって…」

その言葉を汲み取ったマサムネは小さく笑い、ルカの肩をポンポンと叩いた。

「なるほどな。お前は確かにゾツドと共通する部分があるかも知れん。発明家だしな。蒸気洗濯機だって？ワシも見てみたかったわい」
「あ、それは…」

マサムネは笑い、ルカはガリアを恨めしそうにジーツと睨む。

「ま、ま。それはともかくな、お前とゾツドにはな、決定的に違うことがあるぞ」

「決定的に違うこと？」

「そう」

「それは何だ？」

壁に背を預けながら、黙って二人の会話を見守っていたガリアが割って入った。

「気になるか？」

ガリアは一瞬だけ、ルカの方を見る。

「まあ、そりゃ 気になるさ。敵のことだからな」
「なるほどな…まあいい。つまりな…」

ルカはコクコクとうなずく。

「…ゾッドは人間を知らないんだ」
「人間を知らない？」

ルカとガリアの二人は、キョトンとした顔でお互いを見合った。
そして再びマサムネを見る。

「もっと分かるように説明してくれ」

「そうだな。例えばルカ。お前は、自分のこと以上に想うことができる他人を知っているな」

「え、えっと…」

一瞬、浮かんだ相手はいる。しかしルカは口ごもった。

「ウーム…では大切な友達がおるだろう？」

「マサムネとガリア」

即座に答える。

「いや、この際ワシはどうでもいいのだが…」

「だってマサムネ言ったじゃない。新しい友達に出会えそうだってもうあれから一週間も経ったもの。友達だよな？」

「ハハ…そうだな。そう言ってもらえて嬉しいよ。とまあ、少なくともルカはそれに答えることができる。だがゾッドは答えられんだろうな。つまりゾッドは人の痛みを知らない。ルカは知っている。」

それが何よりも大きな、しかし決定的な違いだ」

「人の痛み…」

ルカはつぶやく。

「そう。痛みを知らない人間が力を握ってはいけないんだ。それを止めるのは痛みを知る人間。だが弱い人間ではダメだ。戦うだけの気概のない人間はすぐに白旗を振るのがオチだからな。ワシが見てきたふもとの人間たちがいい見本だ」

マサムネはガリアの方を一瞬だけ見た後、ルカに対して優しく、父親のような口調で言うのだ。

「ガリアの心の痛みを知って、お前は泣いていたな。だが本人の前では懸命に笑顔を作った。あれがそうだよ。他人を想う気持ちだ。そして強い心だ。あれを知っていれば大丈夫。ルカは自分が描く未来に自信を持っている」

ルカの頬を、職人の硬い掌が触れる。その感触を求めてルカはジツと目を閉じた。そしてまったく自然に、この一週間秘め続けていた心の内が、言葉となって出た。

「もしも目の前で、お父さんの体が引き裂かれたら　きっとあたしは傷つくと思う。でも同時にガリアも傷つくことを、あたしは知っている。それはもう、どうしても避けられないこと。あたしはガリアを癒してあげたい。そうすることであたしも癒される　そう思うの。あの時泣いたことも、それをガリアに見せなくなかったことも、それと同じ。ガリアの痛みは、あたしの痛みでもあるって気づいたから…」

ルカはガリアの方にくるりと向き直り、この一週間の禁を解いた。

「ねえ、いいかなあ？あたしもエンドラに付いて行って」

ガリアは不意をつかれて一瞬躊躇したものの、冷酷に拒絶した。

「ダメだ」

「うん、そう言うと思った。マサムネから聞いたの。ここに来た本当の目的。マサムネにあたしを預けるつもりだったんでしょ？あたしを危険な目に合わせたくなくて。ありがとう。嬉しい。でもいいないとダメなの。あたし」

マサムネの魔力が効いたのか、ルカはあくまで淡々と話を進める。

「もう決めたことだ。俺は一人でエンドラへ行き、ゾッドを殺す」

「前にあたしのこと捨てないって言ったよ？」

「捨てるわけじゃない。また戻ってくる」

「なぜ付いていったらダメなの？」

「決まってる。危険だからだ。それにジャマだ」

「大丈夫よ。だってあたし、ガリアのこと守りたいもの」

「ルカが俺を守るわけないだろ！気持ちだけでどうにかなる相手じゃないんだ！」

先に言葉を乱したのはガリアの方だった。なぜならこの一週間、彼も心の葛藤と戦っていた。ルカのためを思い、押し殺してきた感情。つまり、ルカと行動を共にしたいという本音が今にも吹き出しそうになり、心の安定を困難にしたのだ。

その時だった。

マサムネは二人の間にいきなり手を突き出し、緊迫しかけた部屋の空気を一気に沈めた。棒のような物を握っている。するとその手

をそのままルカの元に運ぶ。握られていたのは、木製の鞘に収められた短剣だった。

「これ…？」

ルカが聞いた。

「身代わりだ。持っていてくれ。東洋の技術で鍛えた、ワシの渾身の作品だ。護身のお守りぐらいにはなるじやろう？」

「ありがとう」

ルカは強くうなづく。

「おい、じいさん。勝手に決めるな。そんな剣が爆弾や銃に効くか！ルカは生身なんだ。俺とは違う」

「フンッ！お前とて爆弾の直撃には耐えられんだろう？要は程度の問題だ。お前がちょっとばかりルカより硬いからといっても、死ぬ時は死ぬってことだ。それにここにルカを預けられたところで、ワシは彼女の自由を束縛することまではできん。危険も顧みず勝手にエンドラへ向かうに違いないわい」

ルカはマサムネの脇で、ウンウンと何度もうなずいている。

「お前なあ！」

ガリアの憤慨に、ルカはマサムネの後ろに素早く隠れる。

「それにこの間お前はワシにこう言ったな。人間になりたい…と」「じいさん！」

怒鳴るガリアを全く気にすることなく、マサムネは続ける。

「以前、共に暮らしていた時には想像もつかん言葉だった。だがこの一週間で分かったよ。お前の心はもう人間になっているとないや、ルカという存在が、お前を人間にしているんだ。だから連れて行かなくてはいかん。そして守ってやれ。それが人間というものだ。ルカもな、ガリアを守ってやるんだぞ」

「もちろん！」

ルカは当然、という顔でニツコリ。

しばらくの沈黙。そして二人が見守る中、ガリアは渋々とうなずいた。

「分かったよ……」

翌日、藍色の空が茜に染まる頃、二人は出発した。その空を見てガリアはふと、昔のことを思い出していた。

「そついえば前はな……」

「ん？」

ルカは首を傾げてガリアを見る。彼女には分かっていた。感傷を呼び覚ます景色や音に出会った時、ガリアはよく本音を漏らすということを。

「……人間の世界がどうなろうと、別にどうでもいいと思ったことがあった。俺は人間じゃないからな」

ルカは優しく笑いかける。

「でも今は違うよね。あたしにとってはやっぱりガリアは人間だし、男の人だし。それに　あたしのこと、守ってくれるんでしょ？」

ガリアはうなずいた。しかしなぜか今、ガリアは自分が守られているような、そんな安心感があつた。それを与えているもの。それは…

「なあに？顔に何か付いてる？」

ルカはやはり、笑う。

「いや…なんでもない…」

「ヘンなの！」

朝一番の陽光が、斜面を降りる二人を照らし、ガリアとルカを光の中に導く。しかし二人の向かう先　ふもとの町並みは山に囲まれてまだ暗く、モヤが吹き溜まり、朝日の到来を今か今かと待つた。

世界の中心

トゥワン王国の商業的中心地　すなわち世界の中心だったエンドラは、王国の衰退期を経て、やがてその地が他の国の領地となっても尚、役割は変わらなかった。それは巨大な貿易資本を持つ大企業がエンドラに乱立し、その競争原理が、東洋や新大陸などをつなぐ空船ネットワークを完成させたことに起因する。一度完成したネットワークは簡単に崩れることはなく、「エンドラを征する国に世界はひれ伏す」とまで言われたほどだ。

そんな群雄割拠な時代。トゥワン人の血を引く者たちが再び勢力を盛り返し、神聖トゥワン王国がエンドラを征して首都と定めてからは安定期に入り、商業的なネットワークはますます強化された。そして時代は大繁栄時代へと突入したのだ。

そのまさに磐石の時に『失われた時代』がやって来た。

幾人もの強者たちがエンドラを征し、また破れ去っても消えることなく次の新しい主人を待続けた空船ネットワークが、いともあっさりと消えた時代。世界中で退行が始まったその日から、エンドラは急激にその規模を縮小していく。だがそれでも尚、世界中の都市が消える中でエンドラは唯一都市と呼ばたし、かつて世界中にあった大企業が消える中、エンドラだけは、それなりの規模を誇る会社が無だに存在していた。

パンターニ自動機械会社は、縮小したエンドラの中にあってもただの小さな会社の一つでしかなかった。しかし、ゾッドが事始めに利用するだけの十分な施設はあったし、何よりも彼にはトゥワンボがあった。

世界が衰退した最も大きな理由は流通の崩壊だった。空船が失われ、皆が再び海面を進まざるを得なくなった時、海洋船舶技術は既

に過去の時代の中に埋没しており、かといって、新たに技術開発に取り組むだけの気概もなかった。

最初、それに目をつけたゾッドは空船を量産し、貿易会社に売るのではなく、リースすることによって莫大な利益を上げることになった。更にそのツテで新大陸などから格安に、巨大で良質な水晶石を大量に手に入れたのだ。水晶石からは様々なトウワンボ機関がゾッドによって生み出され、それがまた利潤を呼ぶ。そうして得た圧倒的な資金力をバックに、あらゆる企業を吸収合併し、いつしかパンターニ自動機械会社はエンドラそのものとなったのだった。

ゾッドが復活を遂げてから、エンドラが城塞都市と呼ばれるようになるまでにわずか四年。その偉業を成し得たのは、トウワンボの力はもちろん、何よりもゾッドが、水晶のプログラムを別の幾つもの水晶石へ一括でコピーできることを知っていたからだ。大量のトウワンボ機関はそうやって生まれた。

ゾッドはようやく足場を固め、第二のステップへ進もうとしていた。

目指すものは理想郷だ。

しかしそれはあくまで、ゾッドにとっての理想郷にしか過ぎないのだが……

「パンターニ様」

ゾッドは部屋に入ってきた衛兵の言葉を完璧に無視して、作業台に置かれた機械を熱心に見入っている。

「パンターニ様」

再び衛兵は言った。するとゾッドは一瞬だけ衛兵を見て、用件を早く言えと言わんばかりに、面倒臭そうに顎で合図をした。何か不

機嫌そうだ。

「は、はい。將軍からことづてを預かりましたので、お伝えします。警告を発した近隣諸国はいずれも白旗を掲げており、作戦の効果は絶大でありました。いつでも制圧は可能ですが、いかが致しますか？」

衛兵の軍隊式の口調は別にゾッドが要求したわけではないし、正直好きではなかったのだが、文句を言うほどのことでもなかった。しかしそれ以前に、この衛兵は一つのミスを行っていた。

「ところで君。私はパンターニという名前は捨てたのだが、知らなかったわけではないよね？」

衛兵は慌てた。

「ハッ！申し訳ありませんでした。シャゾット様。以後気を付けさせて頂きます！」

ゾッドは顔をしかめた。張り上げた声が耳障りだったのだ。

「うるさいな全く。まあ、コトによっちゃ許さんでもないが……」

ブツブツと文句をたれるゾッド。

「そうだ、君！私の実験に付き合ってもらえんかね？いや、もちろん君のミスを上官に告げて、軍隊式の罰を与えることもできるのだが、私には何の得にもならんのでね」

「は、はい。喜んでお付き合いさせて頂きます」

衛兵は内心ホツとした。全く知識のない人間を実験に突き合わせるのだから、簡単な、それこそ作業的なことだと思ったのだ。

「これを見たまえ。何だと思うね？」

ゾッドは作業台の上に置かれている、幾つかの細い金属のパーツを指し示す。それは人型に置かれていたので、衛兵にもおおよその見当はついた。

「はあ…アレシア様がお付けになる、鎧が何かでしょうか」

ゾッドは自分と同様、アレシアにも様付けで呼ぶように指示していた。彼にとっては優秀な息子も同じだったからだ。しかもガリア以上に。

「なるほどな。確かに人体に装着するという意味においては正しいが、アレシアに鎧はいらんよ。なにしろチタニウム合金なのだから」

酔い痴れるように笑うゾッド。衛兵にチタニウムの意味は分からなかったが、取りあえずうなずいた。

「ハイ。一体何なのでありましょうか？」

「ハハ…まあ、そんなにかしこまらないでくれ。よく考えれば分かるはずだが　まあいい。これは人間に着けるものだ」

「やはり鎧でありますか？」

しかしそれは実際、どう見ても鎧としてはガードする面積が少ない。しかも一番重要なはずの、胸を守る部分がないのだ。そんなものは鎧ではない。

「いや、これは鎧の下。つまり服の上に直接装着してだな　着けてあげよう」

ゾッドは自分よりも背の低い、それでも並みの大きさの衛兵に対して、パーツを一つ一つ、装着していった。

「ずいぶん軽いですね。これなら楽に動き回れそうです」

衛兵は高く膝を上げてその場で足踏みをして見せた。徐々に緊張が取れてきたようだ。

「ああ、それはアルミニウム合金を使っているからね。まあ、強度は弱いのだが、鎧の下に着けるものだから　と。これでよし」

「それにしても、この肩あてだけはまた…ずいぶんと大きいですが…」

衛兵の両脇に大きく張り出した肩あては、肩幅から更に30センチほど派手に飛び出している。

「ウム、確かに君が気にするのも分かる。身を守るどころか、敵の剣を呼び込んでしまうからな。だがバランス制御のために仕方なくてね。では上のホールへ行こう。付いてきたまえ」

ゾッドの研究所は最近、旧パンターニ自動機械会社の工場から、エンドラ最高層を誇る空船離発着塔の地下に移動した。そこから階段を上り一階に行くと、塔の中央ホールに出る。床面積はそれほど広くはないが、屋上にまで続く百メートル近い吹き抜けになっていて、整然と並ぶ電灯が屋上までの壁を照らしていた。壁はかなり凹凸があるが、下から見上げてもそれが何なのかは分からない。

「では実験開始と行こう。もし成功したら、そのプロトタイプは君にあげよう。いざ戦争となった時に、空船に変わる力となってくれるはずだ」

「え！？あ、はいっ！こ、光栄であります！」

衛兵は息を飲み、それを声と共に一気に吐き出した。空船は今のところ親衛隊クラスにしか使用を許されていない。それに変わるものを貰えるなど 興奮するのも無理はないだろう。

「だからうるさいな。まあいい。行くよ」

「はい、いつでもOKであります」

衛兵は声を押さえながら、それでも興奮は押さえ切れずにいるようだった。ゾッドはニッコリ笑って、二度三度、衛兵に向かってうなずいて見せた。

「そのパーツはだね、人間が自分の筋肉に対して発する、ある特定の命令に対してのみ反応して、その力を高めさせてくれるものなんだ。小さなトウワン水晶を使っているから空船のように飛び続けることはできんが、一気に力を解放することで瞬間的に強い力を得る。今の所できるのは高くジャンプすることと、着地することだけだが、将来的には走るスピードを十倍以上に早めたり、制御方法さえつかめれば、動きに関する全ての反射速度を早めることだって可能はずだ」

いわばパスワード・スーツと言ったところだろうか？衛兵は黙って、何度も何度もうなずいている。

「ではね。思いっきりジャンプしてみてくれ。君の思念に反応して、

脚部パーツが作動するはずだ。ここなら天井にぶつかる心配もないからな。それから着地動作も忘れずに　まあ、言われんでもするだろうが」

「はい、では行きます」

衛兵は言いつと、次の瞬間、ジャンプの予備動作と共に脚部パーツが人間の動きに準じて稼働し、足は強靱なバネとなって、凄まじいスピードで一気に飛び立った。衛兵の姿が見る見るうちに小さくなる。

「おー、これはスゴイ。成功だ！」

ゾッドは小躍りし、わけの分からない舞を踊った。

一方衛兵は、スピード感と高さから来る若干の恐怖と興奮にうち震えた。上を見上げると吹き抜けの出口がみるみる迫り、塔を飛び出してしまうのではないかとさえ危惧した。だがそこまでは至らず、一瞬の無重量感が衛兵の体内をも包む。そして次は重力加速度に従って落下を始めた。加速と共に見る見る地面が近づいて、衛兵はゴクリと唾を飲み込む。

「そこだ！着地しろ！」

ゾッドが叫ぶ。もちろん彼に言われるまでもなく、衛兵は着地動作に入った。肩あてのバランス制御が働いて態勢は終始安定し、後は本能にさえ任せていれば難しいことではなかった。そして、確かに恐怖から緊張してはいたが、タイミングは完璧だった。脚部パーツも衝撃吸収のための動作に入る。

衛兵は着地した。

「なるほどな……」

ゾッドはその動きをしっかりと見届けると、しばらくの間思考に埋没し、手を顎に当てた。

「おい、衛兵！」

ゾッドは衛兵を呼んだ。

「はい、お呼びですか？ シャゾット様」

ホールの外から衛兵が入ってきて言った。

「スマンが、これを片付けておいてくれ」

「うっ！」

入ってきた衛兵がそれを見るなり、思わず手で口を押さえた。一瞬の吐き気。なぜならそこにあったのは、あらぬ方向に足と体を折り曲げた、もう一人の衛兵の姿だった。肉体は床に強烈に叩きつけられて、今も体内の血がドクドクと流れだし、その面積をゆっくりと広げている。

「サ、サミエル！」

衛兵は叫び、その屍にすがり寄った。

「なんだ、お前の知り合いか？ すまないことをした。実験に失敗してしまっただが問題解決の糸口は見つけられそうだ。丁重に葬ってやりなさい」

ゾッドは事もなげに続ける。

「おお、それからな、將軍に伝えてくれ。夜明けと共に制圧に向かうようにと。それから以前危惧したガリアの件だが、無視して構わん。再びエンドラへ侵入するような、愚かなマネはしないでろうとも伝えてくれ。何しろ私にはアレシアがいる」

そう言うと、ゾッドはブツブツと独り言をつぶやきながら、後の一切の雑音をかき消し、地下の研究室へと降りていった。

「少し飛びすぎたか。それに、やはり足だけは補助するだけではダメだ。全体を覆う…そう！ブーツのようなパーツにせねばいかな。となるとアルミでは。それにクッション制御も…」

もちろんゾッドには、背後に聞こえる衛兵の、嗚咽を洩らす音など聞こえない。聞こえたとしても僅かな心の揺れさえもなかっただろう。

衛兵はかすれるような声で、屍の名を叫ぶ。そしてその叫びと同じに、それは起こった。

地面を揺るがす激しい爆音。塔に、研究室に衝撃が走った。

「な、何事だ！」

さすがのゾッドも、現実には引き戻された。そしてそれが、外からの攻撃であることも知れた。更に言えば、近隣諸国で いや、世界中のどんな国にも、エンドラに攻撃仕掛けるような国はないということも…

「クソッ、まさかガリアの奴か！？」

ゾッドが歯ぎしりと共に唸るが、その声はすぐ上のホールに落下

する、コンクリート片の破砕音によってかき消された。

ゾッドの言葉を借りるなら、ガリアは愚かなマネをしたことになる。しかし、それは予想以上に派手な攻撃だった。

その日エンドラは、久しぶりにやってきた強者の来訪に揺れるのだ。

城塞砲

月のない夜だった。

「ねえ、ガリア。殺したの？」

ガリアの後ろから、手を取って話しかけるルカ。ガリアの足元には一人の衛兵が横たわっていた。

「氣を失ってるだけだ。ちょっと待ってる。外に置いてくる」

ガリアは衛兵を、いつもルカにするように抱きかかえ、城壁の外側を一気に50メートルほど飛び降りた。その待遇の良さにルカは指をくわえて、自分だけじゃないのね　と言わんばかりに見下ろす。

二度目のエンドラの夜。城壁の内側は、相変わらず電灯できらびやかに照らしだされ、自然とは違う独特の美しさがあった。突然、強い風が吹き上げ、ルカの髪をなびかせたが、それを女性らしい仕草で押さえつける。風は、夏の太陽に熱せられた海や大地の余熱を未だに残し、どこか生暖かい。やがて風が止みガリアが戻ってきて、ルカはその夜景をしばらくの間、ジッと見入っていた。

夜の潜入ということもあり、ルカは黒い袖なしのシャツを、紺の半ズボンの上に出している。ビーズの首飾りは目立つからと、ガリアがやめるように言ったが、意地でしてきた。ピッタリとしているので、少なくとも音を立てることはないはずだ。そして左の二の腕には黒いバンダナ。昔からのクセで、そこに何かがあると落ち着く。

ガリアもコートは避け、深緑色の七分袖シャツと長ズボン。腕や

指に巻く布も白ではなく、黒いものを使っている。

「見るよルカ。面白そうなものがあるぜ」

ガリアはその黒い指で、チヨイチヨイとルカに指し示した。言われるままに見るが、都市の明かりに馴れた瞳には、ただの暗闇にしか映らない。だがやがて、闇の中からエンドラの光を受けて橙色に、ポーッとそれは現れた。

「うわあ！大砲ね。大きいなあ…」

ぐるりとエンドラを取り囲む城壁の上には、天蓋のついた計四基の旋回式大砲と、おそらくこれから設置するためのものなのだろう。幾つもの台座がある。前回ルカは、あつという間に城壁を越えてきたので、その存在には気づかなかったのだ。

「でも誰もいない…」

「さっき俺が倒したヤツがこの見張りだったんだろう。あと近くには 向こうの砲塔の辺りにも一人いる。手薄だな。俺たちが来ることなんて考えてもいないみたいだ」

ルカの目には人どころか、砲塔すら見えない。

「よく見えるね。あたしには全然…」

「かなり遠いからな。ルカには見えない」

ふーんと、ルカ。その口振りからすると、ガリアは光だけを頼りに物を見ているわけではないようだ。

「ところでね、ガリア。さっきの面白そうって言ったのには、深

「いイミ、あるの？」

それを聞いたガリアは意味深に笑った。

「ルカ次第だ。俺は機械は分らないから」

「でもいいの？ 潜入するのに大砲はマズくない？」

「もちろん撃つたらダメだぞ。ただ扱えるようなら、後で役に立つかも知れないと思ったただけだ」

「そういうことならまかせて！ 大砲ならジャンク屋で買ったものを何度も分解してるの。こんな大きいのは初めて見るけど……」

ルカは、二の腕に巻いてあったバンダナを額に巻いて気合いを入れ、1メートル程ある台座の上までハシゴで昇る。ガリアは後からジャンプして続いた。

「ふーん。これで旋回するのか……」

ルカは衛兵が持っていたランタンの灯りを頼りに、大砲を支えている鉄の回転レールを丁寧に検分する。更にハシゴを登り、天蓋のハッチを開いて砲塔内部を照らした。ユラユラと揺れる灯りの中に、むき出しの大砲が浮かび上がった。ルカは砲塔内へと飛び降り、ガリアも後に続いてハッチを閉める。

「後装式か。このハンドルを回すと……ン？ あ、動いてる、動いてる！ 遅いけど」

思わず笑みをもらす。それは砲塔旋回用の手動ハンドルだった。そのすぐ上には仰角調整用の少し小振りのハンドルもある。ルカはそれらのパーツを一つ一つ検分しながら、その構造を把握していた。理解力、仕事共に早い。

「うーん…と、このレバーが引き金なんだろうけど、この尾栓部分の機構がよく…」

「分らないのか？」

「うん。装弾の仕方がね」

「装弾？」

「うん、弾を砲身に込めるやり方がね。今のままだと引き金引いても砲身カラだから撃てないのよ。でもどっかで…あ！そうだ。昔ジヤンク屋で見たりボルバー式の銃に似てるんだ。サイズがケタ違いだけど…。だとしたら回転するはずよね」

ル力は、その円筒状の鉄の塊を両手で抱えて力を込める。大砲の尾栓付近にあるそれは、巨大なシリンダー弾倉で、その中に口径が20センチ近くもある長形の砲弾が込められているのが見えた。しかしいくら力を入れても微動だにしないし、動力源も見当たらない。

「ちょっと見せてみる」

ガリアが何かを思い立ってル力の前に割って入り、しばらくの間、瞑想するように黙った。

「どうしたの？」

「やっぱり。中に水晶がある。動力源はトウワンボ機関だ。動かせるかどうかやってみる」

ガリアは更に瞑想する。ル力はそれをしばらくの間見守るが、何の変化も起こらなかった。

「やっぱ…ダメ？」

ルカがささやくように言った。

「ああ。起動させるために必要な何か足りない。キーになる言葉でもあるのかな？」

「そっかあ…でもまあ、ゾッド一人を倒すだけなら使わないしね」

ルカはため息をつきながら砲座席に座った。何げに旋回用のハンドルを回してもてあそぶ。旋回音は意外に静かで、会話を邪魔するようなことは全くなかった。

「あたしねえ…」

「ん？」

ルカは相変わらずハンドルを回しながら言った。レールの上を動く感覚が面白いのだろう。ガリアも止めなかった。

「…ガリアと会うまで、親しい友達っていなかったの。とにかく物を作るのが好きで、子供のくせにジャンク屋のオジサンとことかに出入りしてね。もちろんこんなことはお母さんには話せなくて娘がジャンク屋から鉄の部品を仕入れてるなんて…ねえ。でも正規のルートから買ったんじゃないや高くて、商売にならないのよ。あたしすぐに趣味に走って、売れもしない変なモノ作るしね」

ガリアは黙って聞き、心の中では大きくうなずいていた。

「相談できたのはお父さんぐらい。ジャンク屋のオジサンとは仲良くなっただけ、友達っていうのとはなんか違って、友達が欲しいなあって、何度も手紙に書いたわ」

ルカは照準窓から橙色の光が入ってきたのを感じて、何げにハン

ドルを止めた。

「でね、思ったことがあるの。ガリアを引き合わせてくれたのは、お父さんなんじゃないかな……って。だって初めてガリアのこと見た瞬間、ああ、この人とは仲良くなれるって、そう確信したの。不思議と。ガリアの中のお父さんが、あたしに訴えかけたんだよ、きつと」

「俺は……何も感じなかったな。ただ、変な女だと思っただけで」

「へ、ヘンな女あ？ヒドイなあ……。でもしょうがないか、お父さん、必死だったのかも。あたしに訴えるのでさ」

ル力は子供のごっこ遊びのように、発射レバーを握って構える。照準窓の向こうには塔が見えた。

「さあ、そろそろ行くぞ。ル力」

「うん、分かった」

ル力は照準窓から顔を離し、立ち上がろうとした。でもその時突然、本当に言うべき言葉が彼女の中に舞い降りてきて、彼女は砲座に座ったまま言った。

「ねえガリア、聞いて。今のお父さんの中にはね、絶対にゾッドしかないよ。だってお父さんの魂はガリアの中にあるんだもん。だからあたしは大丈夫。最後まで見せてね！ガリア」

名前を呼ぶと同時に、ル力は戯れに発射レバーを引いた。力んだせいもあるが、危険はないと知ってのことだ。

もちろん砲身はカラだった。空砲が鳴る危険すらなかったはずなのだ。しかしガリアの言った、起動させるために必要な何か。それを与えてしまった。

突然、大砲の尾栓がスライドして開いた。更にそのすぐ後ろのシンダーが僅かに回転した後止まり、中の弾が押し出されて、尾栓部から砲身に込められる。

「え、何、何？」

ルカは動揺した。機械が勝手に動く様はどこか怪奇じみていたし、自動装填式の大砲自体、見るのは初めてだったのだ。しかもリボルバー式など…

一般的には、トゥワンボが機械文明の発展を妨げてきたことは確かだ。しかしゾッドにとってのトゥワンボは違う。一見不可能なアイデアを実現してくれる魔法の石だった。実際、トゥワンボの存在がこの城塞砲の、少々無茶な設計を可能にしている。

「そうか！発射レバーを引いたルカの思考を水晶が感じたんだ。それがこの大砲の仕掛けだ！」

「えーっ！？ど、どうしようー！」

しかしもう止まらない。最後に大砲の尾栓がスライドして密閉し、装弾を完了した。と同時に着火装置も起動し、金属的な起動音がジャキン、ジャキン、と軽快に鳴る。

ガリアは言った。

「もうハデに行くしかない！」

その直後、エンドラに最初の爆音が響いた。

「クソッ、ガリアの奴め！城塞砲を奪いおったな」

ゾッドはたった今降りてきたばかりの階段を、落ちてくる埃や破片などはおかまいなしに、再び戻って駆け上がろうとした。一刻も早く外の状況が見たかった。しかし、それを羽交い締めにする者がいた。

「ガ、ガリアか！」

ゾッドは振り返る。そこにいたのはアレシアだった。

「なんだ、お前か。は、離さんか、コラ！」

しかし全く離す様子はなく、そのままフワリと宙に浮くと、階段を下へ下へと降りていった。

「そうか、上は今危険だと言うのだな？分かった。降りしてくれアレシア。別の城塞砲にいる衛兵と連絡を取る。まさか全部乗っ取られたわけではあるまい。確かこの近くに電話が……」

アレシアの様子は変わらない。

「……分かったから降ろさんか！私は電話をかけたんだ！」

アレシアの最重要プログラムは、ゾッドを守ることだ。今も地上から激しい轟音が響く中、もちろん降ろすようなことはしなかった。アレシアは今現在、最も安全と判断した塔の最下層を目的地に定めた。

「クソッ！せっかく建てた塔をこのままみすみすガリアなどにアレシア！降ろせ、降ろさんか！」

地下に潜るほどに小さくなるゾツドの叫び声…
さすがの彼も、携帯電話は発明してなかった。

「な、なんかスゴイことになっちゃって…」

ルカは自分のしたことに興奮していた。声と、体が震えている。
凄惨な建物の破壊シーンを見て初めて、戦うということに現実感が
伴ったのだろう。

「確かにすごいな。狙ったってああはいかないんじゃないか？」

砲弾は、屋上の離発着場を支える根元部分に見事命中した。今、
その杯状のテーブルはゆっくりと傾き、上に整然と並んでいた空船
を次々に落としていく。やがて離発着場そのものもバランスを保つ
ための限界を越え、激しい音と共に根元から折れ、崩れ落ちる。

「少なくともエンドラの空船はほとんど失われたはずだ。当然ゾツ
ドにも気づかれただろうけどな。さあ、出るぞ。いつまでも同じ場
所にいるのは危険だ。ルカ？」

ルカは動こうとしない。未だに大砲の波動が彼女の胸の中に響い
ていて、共鳴した心臓の鼓動が治まらないのだ。

その時ガリアは、遠くに聞き覚えのある音を感じた。すぐに記憶
と重ね合わせる。それは、ルカがハンドルを回してもてあそんでい
る時と同じ、城塞砲の旋回音だった。

「ルカ、急げ！ここを狙ってるヤツがいるぞ！」

たかが見張り。おそらくは下級の兵士だろう。が、上官からの命

令を待つことなく、自らの判断で自陣の砲に狙いを定めるリスクを辞さない人間が確かにいる。時に優秀な人材は、思わぬ所にいるものだ。

「ルカ！」

ガリアが叫ぶ。

「う、うん。でも手が…離れなくって…」

ルカは恐怖に硬直している。そして焦れば焦るほど、手の震えも止まらない。ガリアは彼女の固まった掌を、なんとか発射レバーから引き剥がそうとした。しかし遅い。

凄まじい音と共に、敵弾が防御用の装甲天蓋に直撃した。ガンツ！という鉄と鉄がぶつかる重い音は、砲撃時の衝撃を遥かに上回った。砲塔内にいたルカの鼓膜を完璧にマヒさせるほどの衝撃。ガリアでさえ、ボディの中にある水晶が音の波動によって揺れ、嫌悪感を感じたほどだ。がしかし、それでも天蓋の分厚い鉄板と、ドーム型の形状が跳弾を呼び、弾の貫通は免れた。

ルカは背中を丸めて顔を伏せたまま声も出ない。いや、かすれるような声でつぶやいていた。

「ガ、ガリア…あたし…死ぬの…？」

あまりの恐怖にパニックを起こしかけている。当たり前だ。密閉した空間で的になる恐怖など、彼女は経験したことがないのだから。ガリアは硬直したルカの掌に、自分の手を当てる。そしてゆっくりとした口調で言うのだ。

「その時は俺も一緒に死んでやる。でもそれは今じゃない。手を離

せ」

残念ながら、ルカにその言葉は届いていなかった。未だに鼓膜がマヒしていたためだ。しかし深層意識には語りかけていたのかも知れない。いずれにしろルカの手はレバーから離れ、体ごとガリアの胸に飛び込んだ。ガリアはそれを受けとめると、ハッチを開いて外に飛び出し、そのまま上昇した。

再びシュツという音。そして二発目の弾丸が、今度は城塞砲のすぐ下の城壁に当たった。外れたのではない。それは砲撃手の狙い通り、今度は弾の種類を変えて、砲塔の台座を崩しにかかったのだ。装甲を貫通させるための鉄甲弾とは違い、今度は激しく爆発した。衝撃波と爆風。小さな破片がガリアの背にも当たって、カン、カン、と金属的な音を立てる。

安全な高度まできて振り返ると、ルカが初めて実戦を経験することになった城塞砲は、地盤を失い、今にも崩れ去ろうとしている。が、三発目の弾丸は城壁を越え、ガリアの遥か後方の海に着水して水柱を上げた。外れだ。続いて四発目：

間断なく響く凄まじい、大気の割れるような音。それは紛れもなく戦争の音だ。

ルカはガリアに抱えられながら、両手でギュツと、ガリアの服をつかんでいる。そうするだけで、体の震えが見る見る治まっていくのだ。

都市はオレンジ色に輝く。それは電気の明かりであり、火花や炎の揺らぎでもあった。

ガリアの胸に顔を埋めたまま、ルカがようやく言った。

「ごめん。あたし、怖くなっちゃって…」

「まだ怖いかな？」

迷ったが、素直に答える。

「ン…ちょっと…」

「じゃあしばらくそうしてる。その間こうしててやる」

しかしルカは顔を上げ、瞳をまっすぐガリアに向けると、強く首を振った。

「もう大丈夫。潜入するんでしょ？行こうよ」

これ以上は甘えなくなる。ルカは奥歯をギュツと噛んで耐えた。それを見たガリアは黙ってうなずき、大量の空船とその離発着場を失った塔を、共にジツと見つめた。

「よし、行くぞ」

ルカの射撃によって機能を失った離発着塔。だが、それが決して空船のためだけの塔ではないことを、彼らはやがて知るのだ。

量産タイプA

今もまだ煙にくすぶっている切り石やコンクリートを下に見ながら、ガリアとルカの二人は、上空から塔の破断面に近づいていった。塔は表面こそコンクリに塗り固められてはいたが、破壊された箇所を見れば城壁と同じく、パズルピースのような切り石を積んで作られていたことが知れる。鉄筋ではない。ちなみに更に下　地上はエンドラの兵士でごった返していて、喧騒に包まれていた。

ルカは不思議な光景を見た。

破断面の淵に、今にも落ちそうな一つの巨大な石があった。実際、それは間もなくバランスを失い、重力に従って落ちた。いや、落ちるはずだったし、確かに落ちた。しかし、その落下速度が異様に遅いのだ。

「中に水晶が入ってるな」

ガリアが言った。

「あの石に？」

「ああ。あの石も含めて、この塔に使われている石の一部か、或いは全部。たぶん塔を安定させるためだろう」

「ふーん。でも何のためにこんな高い塔を作ったのかしら。見た感じ人が住んでるようにも見えないし、空船の発着場なんて地上でも良さそうなものに…」

「シンボルじゃないのか？単に高いだけで力の象徴になるし、そこから空船が次々に飛び立つんだからな」

「そうか…。そうよね」

そうは言ったものの、ルカには今ひとつ納得できないことがあった。本当にそれだけだろうか？ゾッドは確かに自己顕示欲が強い。しかし彼が持つもう一つの、彼女自身とも共通する特性が気になった。それは実用性を考慮するということ。ルカの場合、往々にして失敗するが…

屋上は空船離発着場として作られた。それは確かだろう。では塔の中味は？

ガリアは暗くてほとんど見えない屋上を、苦もなく地面スレスレで飛ぶ。まるで迷路のようになった大小様々な石の断片を、次々に避けるガリア。そして中央まで進むと、そこには大きな四角い縦穴があり、近づくと中から橙色の灯りがポーッと、辺りの瓦礫を照らしていた。

「これは？」

ルカはガリアの顔と縦穴を交互に見る。抱きかかえられたままなのでよく見えないが、穴はかなり深そうだ。ガリアはうなずく。

「うん。塞がれてなくてよかった。この塔は中空になってるんだ。前に来たとき気づかなかったか？」

ルカは首をひねった。彼女には整然と並んだ空船の印象しかない。或いはその影に隠れていたのかも知れない。

ガリアはようやく着地するとルカを下ろし、吹き抜けのすぐ脇に音を立てずにしゃがんで、しばらくの間瞳を伏せた。

「よし。人の気配はない。ここから侵入しよう。それからルカ」
「なに？」

「ここからは俺にとっても未知の場所だ。覚悟決めとけよ」

それはもちろん、ルカにも分かっていた。

ガリアは再びルカを抱きかかえ、吹き抜けの中へゆっくりと降下を始めた。ルカは少しだけ、飛べないことを　何もできない自分を、もどかしく思うのだった。

「ウム、ウム、そうか。しかしそれで奴がやられるはずがない。

警戒は怠るな。見つけしだい報告しろ。あん？他国への制圧？空船がなくてどうやってやるんだ。この馬鹿が！そんなものは後回しにしろ。ウム、そうだ。ここにはアレシアがいる。いらぬ心配だ。ウム。そのようにな。ああ、それから城塞砲を破壊したという兵士だな。銃殺刑に処せ！私の作ったものを壊した罪だ。そうだ。分かっとなるな！」

ガチャン！と、電話の受信機を叩きつけるゾッド。

「クソッ！ガリアの奴め。おかげで計画が全てパーだ！」

苦虫を噛み潰すように、そしてその齒の隙間からフーツ、フーツ、と激しく息を洩らすゾッド。よほど悔しいのだろう。

「おお、そうだ！私が表に出て罔になれば後はアレシアが…。いや、待て待て。そんな賭けはできん。またいつ動かなくなるか分からないのだ。或いは奴の狙いはあくまで空船で、もうエンドラにはいないということも…」

ゾッドは顎に手を当て、最下層にある自分の部屋の中を、落着きなくうろついている。そこは個人の部屋とはいえかなり広く、住まいらしい雑多さは室内の一角に集中していた。アレシアは扉のす

ぐ脇に立ち、右へ左へ行き交うゾッドの姿を見るともなく見て……いや、正しくは記録して、マネキンのような無表情さでジッと次の指示を待っていた。

「そうだ、アレがあつたぞ！」

ゾッドは突如、叫ぶ。

「全く私としたことが！ここのところ、兵士用のジャンプ・パーツにかかりつきりだったからな。危うく忘れるところだった」

ゾッドは部屋の隅に行き、床から突き出したパネルに埋め込まれた水晶に、掌を当てて念じる。すると壁一面がゆっくりとスライドして、その後ろに整然と並んだ、幾つもの鉄の隠し扉が現れた。鉄の扉には一つ一つ整理用の名札が掛けられていて、その中には『空船』とか、『シリンダー装填機』などといった名前が書かれてあった。

ゾッドはその扉の内の一つ、やはり埋め込まれている水晶に掌を当て、今度は少しだけ長い時間、念を込めた。その時間は複雑なプロテクトが掛かっていることの証明でもあり、扉の奥にしまわれた物の重要性がうかがい知れる。

名札にはこう書かれていた。

『量産タイプA』

金庫のような厚い鉄の扉が開くと、中にあつた50センチ角ほどのアルミの箱が空間を移動し、やがて地面にゆっくりと降りて、最後に箱の蓋が音もなく開いた。

「フフ、これだこれだ。こいつを起動させれば、破壊された空船を

遙かに上回る力を得る。私は運がいい。塔そのものが破壊されていたらこれも使えなくなる所だった…」

一瞬首をひねるゾッド。

「待てよ…ということは城塞砲を破壊した兵士の手柄ということか？ つい興奮して死刑などと言ってしまったが…」

ホウホウと何度かうなづくゾッド。そして…

「ま、いいか。電話をかけなおすのも面倒だしな」

部屋の中にある電話機を一瞬だけ見るが、あっという間に心は箱の中に向けられ、そのことは忘れた。中に入っているのは、嚴重に布に包まれた30センチほどのトウワン水晶だった。

「タイプAか…。所詮これなども一括でコピーできるレベルのプログラムでしかない。単体のコピーすら時間を要するアレシアとは比べるべくもないが。しかし、数は質をも凌駕する。ハードも既に完成しているしな。楽しみだ。ガリアなどゴミにすぎん。その先にあるのは全世界だ。そして更に、私のもう一つの研究が完成した暁には、世界中の人間は人形の如く、私の命令に従い動き出す。人間の力を高めるパーツ。そして同時に、私の意に従うパーツ…」

ゾッドは不敵に笑った。

「早くやりたい！研究がしたい！もつともつと、色々な物を作りたい！だが邪魔はイカン！許しがたい行為だ。ウム、よし！アレシア。お前の弟たち。量産型トウワンボ・ドールを起動させてやる。行くぞ！」

ゾッドとアレシアの二人は、再びホールへと向かった。

「ねえ、ガリア、これ…なに？」

ルカは上下左右に忙しく首を動かしている。

「俺も中に入るのは初めてだからな　分からない」

ガリアは瞳だけを左右に動かし、それでも意識は全方位に飛ばしている。

「動く様子はないけど…大丈夫かしら？それになんか、アレシアに似てる…」

吹き抜けの壁には上から下までびっしりと、数十体、もしくはそれ以上の鉄人形が、彫刻の如く貼り付いている。

鋭く無表情な目元、高い鼻、薄く横に広い唇。顔は確かにアレシアに似ているもののシャープさがなく、鋳型に流し込んだだけの安っぽい顔だった。彼独特の、波打つ黒い長髪もない。禿げ頭だ。しかし何よりの特徴は、腰から下のパンツが存在していないこと。胴体までで体が終わっているのだ。握られた拳もただのひと固まりのパンツでしかなく、指はとても開きそうにない。作りの悪さを言えばキリがないが、結果としてアレシアやガリアとは違い、人間らしく見せるための手間などは、一切排除されているのだった。

「大丈夫だ。コイツらの水晶には、まだプログラムが入っていないカラだ」

しばらく鉄人形の前で瞑想していたガリアが言った。ル力は、フウ…と、大きいため息をつく。

「でもこれで分かった。ここは、このアレシアもどきの格納庫ってわけね。狭いスペースでも大量に置けるように塔の内壁に貼り付けた…ってことかしら」

「何より隠しておくことで、いざという時の切り札にするつもりだったのかも知れないな」

「でもこのモドキ。作りは粗そうだけど、確かにこの数は…」
「ああ、十分脅威になる…」

吹き抜けを下へ下へと降下しながら、改めて二人はその数に閉口した。そしてモドキを見て思い出したこと。聞いたかったこと。ル力はそれを聞いた。

「ねえガリア」

ガリアは黙ってル力を見る。

「アレシアと戦って、勝てるの？」

ル力にはそれが不安でたまらない。ゾッドの言葉が今でも消えないのだ。それは「アレシアはお前よりも早い」という言葉。それに「チタン」という金属。

ル力は知らなかったが、マサムネはチタンの存在を、二酸化チタンという名前として知っていた。それはトウワン文明の最盛期でさえ、酸化、抽出することのできなかった金属物質なのだという。或いはそれ以前。つまりゾッドの生きた時代にはあったのかも知れない。しかし少なくともガリアはチタンではない。合金とはいえ鉄だ。

ガリアの力を信じてはいる。しかしルカには、どうしてもガリアが勝つ要素を見いだせない。

「当然そのつもりだ。不安か？」

「そりゃあ！そうよ…決まってるじゃん」

ルカは目を逸らしながら、ふてくされるようにそう言った。

ようやくホール之最下層まで降りてくると、ガリアは大きな石のすぐ脇にルカを座らせた。ちなみにここもルカの誤射による影響を受け、大小様々な石の破片で元の床が見えないほどだ。上から落ちてきたのだろっ。

「ルカは俺がチャクラムで木の実を弾くの、見たはずだよな。どう思った？」

「え、まあ、うまいなあって」

「最初から？」

ルカは首を振る。

「だろ。不規則に動く標的に正確に当てるのは俺だって難しい。人間と同じように訓練が必要なんだ。でもゾッドはそんなこと思いもしないだろうな」

「でも前に戦った時は…」

ルカはガリアが鉄球を受けた時のことを思い出した。

「あの時の俺の動きは直線的だった。アレシアにしてみれば予測しやすい動きだったんだ。まあ見てろよ。俺はアレシアとは違う。戦いの中に想像力を込めることができる。要は基本性能だけじゃないってことだ。俺は鉄だけど人形じゃない。鉄人間…かな？」

いつになく饒舌なガリアに、ル力は笑みをみせた。気持ちが伝わってきたのだ。思いやるという気持ちが…

「少しは不安取れたか？」

ガリアの言葉にコクリと一回、ル力はうなずいた。そして言葉をかけようと息を吸い込んだ時。

（喋るな！）

ガリアは突然、ル力だけにしか聞こえない小さな念を送った。

（誰かホールに入ってきた、そこを動くな。そこなら見られない）

ル力の体が固まる。溜めた息はゆっくりと、静かに吐き出した。ホールに入ってきたのはゾッド。それにアレシアだった。大げさな身振りと、辺りを気にしない大きな声がホール内に反響した。ちょうどガリアたちとは反対側の隅にいる。

「おお、見るアレシア！何度見ても壮観じゃないか。空船に代わる…いや、人の手に頼る必要すらない兵器。『タイプA』だ。ちょうど百体いる。これに適当なプロパガンダを加えてやれば　そう。神の使い、化身、或いはトウワン人の名を語るのもいいだろう。どんな国だって服従するさ。ハッハ！だがまずはガリアだ。奴を見つけて、破壊するために働いてもらう。見てろよ！」

ル力は思わず口を開き、それでも喋ることができないので、そのままパクパクとさせた。ガリアが代わりに念で伝える。

（ヤツはあのモドキを起動させるつもりらしい。いや、タイプAとか言ったな。トウワンボと、タイプAのプログラムの入ったトウワン水晶が一つあれば、この塔にある全てのタイプA内部の水晶にプログラムを複写できるはずだ。ヤバイな…）

ガリアはしばらく顎に手をあて、伏し目がちに考える。

（それから厄介なことがもう一つ。アレシアは既に俺たちの存在に気づいている）

ル力は思わず口を押さえる。

（いや、お前のせいじゃない。俺だってヤツらの存在に気づいた。俺たちはそういう風に作られてるんだ。でも心配ない。アレシアはゾッドに命令されるか、ゾッドの命を狙わない限り、攻撃はしかけないはずだ。ル力はここでゾッドに見つからないようにジツとしてる。俺はゾッドに攻撃を仕掛けてみるが、おそらくアレシアに妨害されるだろう。そうなればアレシアと戦うことになる。いいな！どんなに俺が危なくなっても　それ以上のことがあっても、絶対声をあげるな。その時はル力だけでも逃げろ。約束だ）

そう一方的に言うと、ガリアは背を向け、もはやル力を見ることはなかった。声を出したくても、服を引っばって止めたくても、できない。できうる限りの精一杯の抵抗で、首を小さく、何度も何度も振った。

ガリアにもしものことがあっても、絶対、逃げるなんて嫌だ！そう思った。

ガリアは腰のチャクラムに手をやると、今までル力が見たこともないようなスピードで飛び出し、超低空で飛ぶ。更にその勢いに乗せ、チャクラムをゾッドの額に向けて投げつけた。

「ゾーッド！」

ガリアが叫んだ。

二つの戦い

ゾッドは完璧に虚をつかれた。

ガリアが叫ぶ。人間は呼び掛けられると一瞬、動きが止まるものだ。その額に向かつて一直線にチャクラムを飛ばした。ガリアも地面スレスレを凄まじいスピードで、這うように飛ぶ。そしてチャクラムがゾッドの額を砕き割るほんのわずか手前。

ガキンッ！

金属音がホールに響く。額を捉えんとしていたチャクラムは、アレシアの鉄球に弾かれるとわずかに軌道を変え、ゾッドのすぐ脇をかすめるように通過していった。だが今度は一方的ではない。鉄球も弾け飛んだ。新しいチャクラムは重い。そしてその弾け飛んだ二つの金属の間に飛び込んで来る者　ガリア。

「うおっ！？」

眼前に迫るガリアを見て、ゾッドが叫ぶ。

がしかし、ゾッドとガリアとの間に割って入る者がいた。もちろんアレシアだ。

ゾッドの額に向けられたガリアの拳は、アレシアの掌が押さえたすかさず左の拳をアレシア越しのゾッドに向けて振り抜く。が、それも押さえられた。ガリアは両の手をガッチリと上から固定される。アレシアの波打つ長髪が一筋、顔の前に垂れた。瞳は何も語っていない。ただ、最重要プログラムに従って動くのみ。

「クッ！」

アレシアは上から押さえ付けるように、握った手を離さない。体勢的に背の低いガリアには不利だ。それでも何とかその手を振りほどこうと躍起になっていると、突然、フツ…と、ガリアの左右に何かの気配がした。いつの間にも移動したのか、今やガリアの顔の両脇には二個の鉄球が浮かんでいる。狙いは頭だ。アレシアは余裕を見せる感情すらなく、躊躇せずに念を込めた。

「クソッ！」

ガリアは両足で床を踏み切り、アレシアの胴体に思いっきり蹴りを入れる。その衝撃に思わず、アレシアも握っていた手を離れた。弾けるようにガリアは後方に飛ぶ。そして間一髪、ガリアの目前で二つの鉄球が、ガキンツ！と、凶悪な音を立てた。

ガリアは空中で後方一回転。高さを若干見誤ったものの、かろうじて四つんばいで着地した。同時に、空中で念じていたのだろう。地面に落ちていたチャクラムを呼び戻し、右手でつかむ。しかもすかさず、それをサイドから腕をしながら投げる。狙いは足。アレシアの持つ鉄球は三個共、未だ地面に転がっている。チャンスだと判断した。

直線的なスピードはともかく、瞬間的な判断はガリアが遙かに勝っていた。応用力の違いだ。チャクラムはアレシアのむき出しになった左大腿部に見事命中し、その破壊力にバランスを失って倒れる。以前聞いたゾッドの言葉を信じるなら、これでやがてアレシアの左足の制御が失われるはずだ。

「馬鹿な！」

ゾッドが叫ぶ。

尚もガリアは、その隙を逃さずに追い打ちをかけた。命中した後、弾かれて制御を失っているチャクラムを地面ギリギリでキャッチすると、倒れ込みながらもフリスビーのように投げる。狙いはゾッドかアレシアか。一瞬の迷い。ガリアは、アレシアの頭部に向かって投げた。ゾッドを殺すことへの一瞬の躊躇。しかしアレシアさえ動けなくしてしまえばせめてゆっくり、ゾッドに最期の時を与えてやることができる。そう思ったのだ。だが、それがいけなかった。

ガキンッ！

狙い通り、チャクラムはアレシアの頭。中央の眉間に命中した。しかし同時に、ガリアも鉄球を右脇腹に受けていた。いや、正しくはかすめた。アレシアは倒れながらも、鉄球を操っていたのだったし。ぶとい。

「クソッ！」

ガリアは叫ぶ。とはいえ、もう勝負は見えたはずだ。頭の制御を失えば鉄球も操れなくなる。それにそろそろ、右足に当てたチャクラムが効いて、アレシアは立てなくなるはずだった。ガリアは攻撃をいったん止め、それを待った。

しかしアレシアはゆっくりと、何の問題もなく立ち上がった。分散していた三個の鉄球も戻り、彼の背後で正確な正三角形を描く。

おかしい。ガリアは思う。まるで制御を失う様子はない。そしてそのわずかな間が、形勢を逆転する理由の全てとなった。アレシアはその隙を逃さずに念を込めると、ガリアに向かって鉄球をそれぞれバラバラに飛ばしたのだ。

「しまった！」

ガリアは上空へ逃げる。しかし鉄球は執拗にガリアを追い、あらゆる方角から分散して狙ってくる。更にアレシアも地上を離れて攻撃に加わり、ガリアの避けるコースを限定した。攻撃に転ずる余裕など与えてくれない。避けることで精一杯だ。

ル力は両手で口を押さえながら、なんとか叫ぶのを押しとどめ、ガリアの危機を見つめる。それ以外に何ができるだろう？

「ハッハーツ！チャクラムの重量を重くしたのか。考えたなガリア！」

ゾッドは笑いながら、上空のガリアにもハッキリと聞こえる声で叫んだ。

「だが無駄だあ！単に当てるだけでは駄目なんだよ。中の水晶のなあ、ちょうど重心に対して垂直に力が加わらない限り、制御不能にするような振動は起こらないんだ！人間で言えばツボだよツボ！」

「クツ！」

ガリアはどうしてもチャクラムを飛ばすきつかけがつかめない。だいたい、どこを狙えばいいのか？今もやつの思いで、鉄球を避け続けるガリア。いや、時折かすめることさえある。塔の外に退路を求めようとしても、それを絶妙なタイミングでアレシアが邪魔をするのだ。

「アレシアにはお前のツボが分かる。つまりどこにどう当てれば機能を奪えるかが分かる。なにしろお前を作ったのは私だからなあ！しかしお前に分かるか？アレシアのツボが？ハッハーツ！」

ル力は葛藤していた。飛び出したくても飛び出せない自分が情けなかった。別に怖いわけではない。でも今感情的に飛び出して、何

かしらガリアの助けになるとは到底思えないのだ。

（何をすればいい？何を…？）

ルカはただひたすら、そのことだけを頭の中で繰り返した。

「フン。避けるのはうまいじゃないか。さっきのこともあるからなあ。私は奥へ引っ込んでいるとしよう。ま、いつまでもそうやって逃げていくがいい。だがいつまで持つのかなあ？お前に人間の思考が宿っているというのなら尚更だ。もしかしたらお前は疲れというものを知っているのではないかなあ？残念だがアレシアに疲れはない。単なるプログラムだからな。アレシア！ガリアを私の元へ近づけさせるんじゃないぞ。さっさと片付けて戻って来い！そうそう、頭を取ってくることを忘れるなよな！」

ゾッドは、アレシアがなかなかガリアのツボに、鉄球を打ち込めないことに若干のイラ立ちを覚えながらも、ホールの外へと出ていった。

（今だ！）

心の中の疑問に対して、ようやく光が生まれた。ルカは迷わずゾッドを追う。一瞬、アレシアの方を見るが、こちらに来る様子はない。思った通りだ。アレシアも性能限界の攻撃を、ガリアに対して仕掛けているに違いない。余裕がないのだ。ルカはそれを確信して走る。

（あたしが…あたしがゾッドを殺せば、きっとアレシアは止まる。あたしが…）

ルカは腰に下げた短剣　マサムネに託された魂の存在を、左手で確認した。

ホールを出ると通路は左右に分かれていて、右はかなり先まで見通せる直線。もう一方はすぐに左に折れていた。ルカは迷わず左へ向かい、角を折れる。折れた先は長い直線の廊下で、ゾッドは少し行った所を歩いていた。ルカは短剣を鞘から抜いて右手で構え、足音を押し殺して距離を詰めると、後は一気に走り、その距離を縮める。

「ん？」

ゾッドがようやく気がついて振り返った。

迷うことなく剣を突き立てていれば、それでコトは終わっていただろう。しかし振り返ったゾッドの顔　父親の顔を見た途端、ルカはそれ以上動くことができなくなってしまった。

「お、お前は！？そう。ルカだ！お前も侵入していたのか！」

そしてルカの右手に目を止める。

「な、なんだお前。私を刺そうとでも言うのか。父親であるこの私を！」

ルカはただジッと、ゾッドのことを睨む。剣を持つ右手がブルブルと震えた。

「ほう…その指輪。知っているぞ。それは昔、私がリリタにあげたものだ」

ルカの胸元から飛び出した指輪のペンダントを、ゾッドが目ざと

く見つけた。走っている内に服の中から出ていたのだろう。

ルカはハッとして、自分の胸元を見る。

「そうだ。私の中にはお前の父親の記憶が残っているんだよ。一緒に遊んでやったことや、お前が書いた手紙の内容だって知つとる。友達が欲しいと書いてきたこともあつたなあ……」

ゾッドはルカの動揺を見て取り、尚も続ける。

「そうそう！こんなこともあつた。夜、お前は夢で見た幽霊を怖がって私の元へ来たな。ハハッ、私のベッドにだ！いい子だった。腕枕をしてあげたことは忘れたのかな？あの時のお前は父親に刃物を向けるような子ではなかったぞ。可愛い子だった。おお、それにこんなことも……」

「やめろ！」

ルカがたまらず叫んだ。そしてつぶやくように言う。

「その声で喋るな」

「なんだと？」

「その声は……お父さんのだ。お前のものじゃない」

ルカは込み上げる怒りを必死で押さえていた。

「ハンツ！何を馬鹿な。今は私の体なんだよ！この声も、記憶だつて私のものだ。しかし、この肉体はお前にとって父親であることに変わりはない。どうするよ？私を殺すか？その剣で！」

「くっ！」

ルカは短剣を持つ手をふるふると下ろし、沈痛な面持ちでうつむ

いた。

「そうだ。それでいい。なんなら私の　ゾッド・シャゾットの娘になるかね？お前には才能がありそうだ。何しろこの肉体の血を引いているのだからなあ。これはいい肉体だ。オリジナルのゾッド・シャゾットにも引けを取らない脳の持ち主だよ。私は本当に運がいい」

決して打ちひしがれたのではない。ルカは自分の中の葛藤と戦っていた。そして怒りが最高潮に達するまで、そのエネルギーを溜めていたのだった。

「だがしかし　」

ゾッドは下唇をゆつくりと舐める。

「　いつまで娘として見られるかは…分からんがなあ」

ゾッドは舐め回すように、ルカの肉体を薄ら笑いと共に品定めした。

「　なかなか将来性のありそうな、いい体だ…」

「　お前は…父親じゃ…ない…」

それは微かな…押し殺すような声だった。怒りを溜める、最後の我慢。

ルカはマサムネの魂の存在を確かめるように、右手の力を一度緩め、もう一度強く握る。そして…

「わあああああっ！」

絶叫。そして強靱な足腰が一気に間合いを詰めると剣を振り上げ、心臓へ向かって振り下ろした。

左胸に衝撃が走る。

ガキンツ！というまともな金属音。精神的な疲れは確実に、ガリアの集中力をニブらせていた。ガリアは鉄球の直撃を受けてバランスを大きく崩す。

「クツ！」

マヒを誘発するような打撃ではないが、一瞬の行動を奪うには十分だった。そしてその一瞬は、アレシアとの戦いにおいては致命的な時間なのだ。

とどめの鉄球がガリアの頭に狙いを定めていた。ガリアは、それを正面に見据えていながらも反応する余裕がない。ただ映像をスロ―モーションで見えるように、直撃の時を観念して待った。

しかし、その時はいつまで待ってもやって来なかった。

そして時を違わず、どこからか人の叫び声がするのをガリアは聞いた。

（なんだ？）

しかしアレシアは声だけではなく、更に別なものを捉えていた。主人ゾッドに対する強烈な殺気。それも、最重要プログラムが発動するに十分の…

とどめを刺すべくせつかくの好機をアレシアは完璧に無視し、ガリアに対して無防備に背中を向ける。

不意に訪れた勝機。

（今だ！）

ようやくにして、ガリアはチャクラムを構える。そしてその時、見つけたのだった。おそらくは、ガリアと全く変わらない位置に水晶があるだろうと思えるパーツが　背中を向けたことによって、彼の目に飛び込んで来たのだ。

迷うことなく、ガリアはその場所へチャクラムを投げつける。直後に、ガキンツ！という激しい金属音。それは寸分の狂いもなく命中した。膝の裏に露出した、間接部分の金属球に…

「どうだ！」

アレシアはそれでも、もはや全く他のことに気を取られることなく、最重要プログラムに従って一直線に、ホールの出口へ猛進する。そして出口へ差し掛かった時、アレシアに変化が起こった。

一直線に飛んでいた彼の軌道が、右方向へと弧を描き始めた。それは進むに従ってますますズレが大きくなり、出口をくぐり抜けることなく、すぐその脇の壁に頭から激突した。遅れて二つの激突音。間接の金属球の機能を奪ったことは、思わぬ効果を生んだ。全てのパーツが物理的にはつながっていないガリアやアレシアだが、間接の役割は人間と同様に、その前後のパーツの制御だった。今、それが奪われたことによつて、アレシアの右膝から下は、壊れたマネキン人形のように取れた。片足になったことで、推進力のバランスが崩れたのだった。

しかしそれでもアレシアは飛ぶ。もはや完璧にバランスを失い、まっすぐ飛ぶことができないというのに…

アレシアはホールの壁に幾度となく激突し、その度に体が、人間ではあり得ない方向へ曲がる。それでも最重要プログラムの拘束は解かれることはなく、目的地へ向かって飛び続ける。しかし、永遠

に着くことはないのだ。アレシアは所詮は鉄人形。修正が効かない。自ら学習する心を持たない。

何度も何度もアレシアは、彼が持つ自慢の最高速度で壁に激突し続け、やがて不意に動かなくなった。壊れたのか、一時的な機能マヒなのか。いずれにしろ、もはやまともに動くことはない。

ガリアはゆるゆると床へ着地する。そして一瞬瞳を伏せ、人間で例えるならため息をついた後、ようやく叫んだ。

「ルカ！」

返事がない。辺りを見回す。そしてもう一度。

「ルカ？」

ガリアはようやく、その場にルカがいないことを知った。

「馬鹿が！私に従えば殺さずに済んだものをよ」

ゾッドは吐き捨てるように言った。

「トウワンボを持つ私に、そんなただの剣が役に立つか」

ゾッドはトウワンボを両の掌に挟み込み、合掌している。

「どうするかなあ。今すぐその喉元を掻き切ってやろうか？刃向かった罪は重いぞお」

ルカは壁に背をピッタリとつけて、顔をそむけながらも瞳は気丈にゾッドを睨みつけていた。ゾッドに対して振りかざしたはずの短

剣は空中に浮いて、その切っ先は逆にルカの喉元に突き付けられている。わずかに体を動かしただけでも、チクリ…と、刃先が皮膚を刺す。

「フフフフ…。まあ、そこで見ていい。タイプA起動の瞬間をな。言っておくが少しでも動こうものなら、すぐにも気道を切り裂くぞ。声も上げられずに死ぬことになる」

ゾッドは嬉しそうに、トウワンボと共に手もみをする。そして、床に置いてあったアルミの箱を念によって開くと、中から平たい円柱形をしたトウワン水晶が出てきた。水晶の上面には丸い窪みがある。

「このトウワンボというのは不思議な石であ…」

ぬかりなくルカを見ながらゾッドは言った。短剣は相変わらず、彼女の喉にピッタリと静止している。

「…念じることによってできることは限られているのだが、水晶という記録媒体を使うことで、かなり色々なことができるようになる。その最高傑作がトウワンボ・ドール。つまりガリアであり、アレシアだ。そして水晶によって記録されたプログラムは、トウワンボが持つ思念伝達能力の応用によって、他の水晶にコピーすることができけるわけだが　まあ、それも私が考えたプログラムでな。これらの基本プログラムは全て私が生み出したトウワン水晶の中に組み込まれている。だからこのように、したいことを念じてやれば…」

ゾッドはトウワンボを、トウワン水晶の丸い窪みの上に置いた。

「…後はこうしてトウワンボを置いておくだけでいい。勝手にやっ

てくれる。何しろ百体分のコピーだからな。少々時間がかかる。だがなに。お前の喉を切り裂く頃には終わってるがね」

ゾッドは再びルカに顔を寄せると、宙に浮いていた短剣を握り、トウワンボの束縛から解放した。そして彼女の髪を驚づかみにして、短剣を喉元に突き付ける。

「おい、動くなよ！ちよつとでも動けば今すぐにも突き刺してしまうからな。フハハハッ！」

「ンクッ…うつ…」

ゾッドの手が力んで、ルカの喉元を微かに切った。ゾッドの顔が更に近づく。そしてその傷口に再び切っ先が触れ、血が一筋、ツーツと流れた。ゾッドは興奮している。自分の手元の動きにはまるで無頓着だ。

ルカは耐えられずに瞳をそむけ、かすれるような声で言った。

「…ガ…リア…」…めん…」

ゾッドは満足気に微笑む。

「本音を言うとなあ、お前は万が一の人質に使えると思ってたんだ。奴は侮れんからな。だがもう役目は終わり。コピーは無事完了したようだ。後は私が命令を与えてやればいい。タイプAが目覚めればガリアの脅威など全くないからなあ。今すぐこの剣で楽に…」

そうしてふと、手に持った短剣をニンマリと横目で見た途端、なぜかゾッドの言葉が止まった。

「？」

様子がおかしい。

ルカはそむけていた顔を、恐る恐るゾッドに向ける。

「こ、この斑紋は　な、なんと美しいのだ…」

ゾッドは短剣の刃の部分に魅入っていた。それはマサムネの渾身の作品。鉄をよく知るゾッドは、その仕事の質の高さを瞬時に見抜き、合金ではあり得ない、鍛鉄が生み出す最高の作品に酔い痴れた。それはもう、ルカの存在すら忘れるほどに…

「これは素晴らしいよ。最高の鉄の芸術だ！」

ルカはそのわずかな隙を逃さず、一気に駆け出す。

「ン？うおっ！？し、しまった！」

我に返ったゾッドがすかさず短剣を横一文字に振り抜く。それは走りだしたルカの左腕を見事な切れ味で切り裂いた。がしかし、腕に巻いたバンダナが邪魔をし、皮膚を数センチ切るにとどまった。

その去りぎわ、ルカはバネを利かせて態勢を低くし、その細い腕を目一杯伸ばすと、水晶の窪みからすくい上げるようにしてトゥワンボをつかんだ。その俊敏な身のこなし。美しい動作。が、残念ながらつかみ切れずに前方に弾くと、トゥワンボはそのまま、よく磨かれた石の床を滑っていった。

「ら、乱暴な！割れたらどうすんだよ！」

ルカはそれを更に追い、転ぶように前のめりになりながらも今度とはなんとか手の中に収め、少し不恰好に、だがすぐに態勢を整えて、

持ち前のスピードで走り去って行った。

「馬鹿者。か、返さんか！」

トウワンボは彼の命。生きていることの証明。ゾッドは手に持っていた短剣の美しさや、タイプAの存在さえ忘れて、ルカの後を追いかけた。

廊下に投げ出されたマサムネの魂は、見事大役をこなし、よく滑る床の上を誇らしげにクルクルと回るのだった。

溶鉱炉

ガリアがそこへ駆け付けた時、廊下にはアルミの箱と水晶。それに短剣が残されていた。人の気配はない。ガリアは床に落ちていた短剣の刃の部分を指先でつかむと、空中でクルツと半回転させて、柄を握り直した。手首を軽くひねり、キラリツ、と、刃に映る光の反射角を変えてみる。すると斑紋に曇りが生じた。それは切っ先から微かに流れた血の痕。

「ルカ！」

ガリアは即座に駆け出した。

ルカはとにかく走った。ゾッドへの恐怖。いやそれ以上に、死を覚悟してしまった自分自身から逃れるためにも走った。そして考える。

（逃げてたらダメだ。ゾッドを殺さないと。武器はないけど…このトウワンボで何かできれば…）

彼女は走りながら、ゾッドがしたようにトウワンボを掌に挟み、念じてみる。試しに自分の体を浮かそうとしてみた。でもダメだ。体が軽くなるようなこともない。

（ああ、分かんない！念じ方が足りないのかも知れない…）

尚もル力は走りながら、目を閉じて真剣に念じてみる。ほんの数秒。

「うわっ！」

気配を感じた彼女の目の前に曲がり角が迫る。ル力は肩を壁にぶつけながらも何とか角を曲がり、更に走った。

（どこか…隠れられる場所…）

やみくもに走っていると、目の前に一際大きな扉が見えてきた。扉は開いていて、中は暗く、広そうだ。ル力は迷うことなく入っていった。

「暑い！」

思わずル力は声を出して言った。しかし何より、暗くて何も見えない。最初は手探りで、しかし進むに従って瞳も馴れ、微かにではあったが、赤い光で照らされた室内の景色が、徐々に浮かび上がっていった。どうやら5メートルほど先で部屋は右に折れていて、赤い光はその方角から差しているようだった。ル力の右手には何かの巨大な機械があり、それが光を遮っているのだろう。床は異様に散らかっていて、ル力は慎重に、でもできるだけ早く抜き足で進み角を曲がった。そしてようやく、この部屋がなんの部屋なのかを、そして暑いわけを知った。

「溶鉱炉だ。…ずいぶん広い」

まるでそこは工場の中を思わせた。そしてちょうどその中央付近に大きな縦穴がある。ル力の目線からは見えなかったが、奥底では

溶解した金属が山吹色に光り、室内全体を赤く照らし出していた。本来ならすぐに辺りを見回し、部屋の構造を把握すべきだった。しかしル力はいそいそそれを怠り、身を隠す場所などない中央の縦穴へと、近づいていった。

ガタガタガターン！

突然、ル力の後ろから激しい音が響いた。

「クソッ！暗くて何も見えん」

ゾッドの声だ。ル力は反射的に向き直る。そして隠れる場所を探して左右を見回す。

「ん！？フフ…見つけたぞお…」

最初は声だけが、そして暗闇から、光に照らされた真つ赤な顔が浮かび上がる。不敵な笑みを見せるゾッド。

「さあ、おとなしく…そのトウワンボを渡しなさい。いい子だから。なんなら…お前を生涯の娘にしてみても…いいくらいだ。一生可愛がつてやる。性の処理になど…使わんから。さあ！」

ゾッドは片手を差し出しながら、まだ治まらない呼吸の合間に唾を飲み込み、ゆっくりと近づく。ル力は目線を逸らさずに、やはりゆっくりと後ろへ下がる。右手のトウワンボを確かめるように強く握った。

「イタッ！」

ゴンツ！と、ルカの右肘が何かにぶつかつた。後ろを見るとそこには鉄柵があり、もうそれ以上は下がりようがない。その向こう側は深い縦穴　溶鉱炉があつた。

「あつ、危ないじゃないか！もしトウワンボを炉に落としてもしたら　怖い怖いー。そんなことじゃ私の娘になど、なれないよ。さあ、トウワンボを…こつちへ…」

ゾッドが距離を詰める。ルカは瞳だけ動かして、左右を探り見る。左側はすぐに壁。右側は　10メートルほど行つた所で、鉄柵がそのまま直角に曲がり、溶鉱炉の方へと伸びている。どうやら炉を横断する橋になっているようだ。ルカは迷わず駆け出した。

「このつ、どこへ！」

ゾッドが叫ぶ。ルカは右へ折れて橋へ。

「どこへ行こうと言うんだ。え？」

だがしかし、ゾッドは慌てずに言うのだ。

カンカンカンと小気味いいルカの足音は、不意に止まつた。なぜならそこは橋ではなかつたから。ただ縦穴の中途まで突き出しているだけの、炉内観測用デッキ。

慌ててルカは踵を返し、戻ろうとした。だがもはやその出口にはゾッドがいて、両の手で左右の柵をつかんで、嬉しそうに体をユラユラと揺らしている。

「馬鹿だなあ。もう少し周りを見ないとね。炉の向こう側に行きたければ、入口のすぐ脇のハシゴを登ってねえ。ホラ、あの上の方の橋を渡るんだ。ハハッ！ハハッ！」

奇妙な笑い。そして続ける。

「そこは長時間いるにはツライだろう？さあ、早くそのトウワンボを返しなさい。いい子だから」

デッキの先端はかなり暑く、熱気がルカの顔を襲った。いつまで耐えられるか　でも、我慢できないほどではない。顔をしかめながらも、ルカは何をするべきか必死で考えていた。

「なんだお前はあ。いい加減にしないと、そこから突き落とすぞ。おい！」

ゾッドから不意に笑みが消えた。観察デッキを踏みしめる、カツン、カツン、という金属的な足音を響かせて、ゆっくりとルカへ近寄るゾッド。

「そ、それ以上近づかないで！」

トウワンボを持った右腕を、ルカは鉄柵の外に投げ出した。だが、ゾッドは止まることなく、ニヤニヤと笑う。

「なんだ？トウワンボを投げるつもりかよ」

「そうよ！それ以上近づくと炉の中に投げ捨てるからね！」

しかしゾッドは動じない。

「面白い、やってみろ」

「え？」

「言っておくが困るのは私だけじゃないぞ。まさか『失われた時代』

を知らんわけじゃあるまい？それがなくなれば、そのトゥワンボによって生み出された、全ての水晶の力が失われるんだ。もちろんガリアもだよ。ただのバラバラのパーツになる。ハハッ！できるのか？お前に。ハハッ！ハハアッ！」

「脅しは効かない。それなら…」

ルカはトゥワンボを両手に挟んで合掌する。一瞬、ゾッドがひるんだ。

さつきはダメだった。でももしも他人に対してなら…」

（飛べ、飛べ、飛べ、飛べ！）

ゾッドを弾き飛ばすイメージ。それに空船を自分で飛ばした時のこと。集中…

「飛べ、飛べ、飛べ、飛んでけえっ！」

強い願いが思わず声となつて出る。それは十分に物を吹き飛ばすほどの、強烈な念だった。だがまるで何事もない。ゾッドは再びルカに迫る。

「ふははははっ！と、飛んでけ！だと？まさか私に対して念じているのか？馬鹿が。ははっ！トゥワンボはなあ、結晶構造の物質にしか作用しないんだよ！金属とか、石とかな。それっ！」

ゾッドは一気に距離を詰めると、トゥワンボを強引に奪いにかかった。ルカはそれを嫌って抵抗する。二人はそのまましばらくもみ合った。

「こ、この！さつさとそれを…渡せっ！」

ついにルカは右腕を取られ、ゾッドは両手でトウワンボを引き剥がそうとした。精一杯の握力でそれを拒絶し、ルカはもう、とにかくやみくもに残った左腕で殴り付ける。

「このっ！このっ！このっ！」

が、ゾッドは全く動じない。自分の非力さにハラが立つ。ハラが立つて、ついにキレた。彼女が今持ちうる、接近戦最大の武器を使ったのだ。

「あーっ！？あたたたたたっ！」

ルカは半袖シャツから伸びた右の二の腕を思いっきり　それこそ肉を引きちぎらんばかりに噛み付いた。

「いてーなあっ！」

あまりの痛みに耐えかね、ゾッドは思いっきりルカを突き飛ばした。背後の鉄柵に勢いよく背中をぶつけるルカ。

ガシャーン！

「ルカあっ！」

同時に、ガリアの声が背後から響く。背中痛みをも忘れて、ルカは振り返った。

「ガリア！」

その声の先にガリアはいた。彼女からは、溶鉱炉ごしに10メートルほど離れて、分厚い窓ガラスの向こう側にその姿はあった。この部屋全体を管理する制御室だ。

「待つてろ、今行く！」

すぐに溶鉱炉へと出る扉を見つけたガリアだったが、鍵がかかっていて開かない。窓も鉄格子がはまっているので、叩き割ったところで無駄だ。戸惑うガリア。

ルカは観察デッキの先端、その鉄柵から上半身を大きく投げ出すようにして、とにかく叫んだ。

「ガリア！ガリア！」

助けが来たという思い。それもある。しかし彼女にとっては、ガリアがアレシアを倒したこと。いや、少なくとも彼が無事なことが嬉しかったのだ。

「危ないルカツ、後ろだ！」

ゾッドの接近を見てガリアが叫ぶ。

「よくも噛み付きやがって。このバカ女があっ！」

ゾッドは怒りにまかせて、ちょうど振り返ったルカの顔にまともに殴り付けた。彼女がトウワンボを持っていることすら忘れて…

「し、しまったあっ！」

直後にゾッドが叫ぶ。トウワンボがルカの右手から離れ、溶鉱炉の方へ飛んだのだ。

「ルカあつ！」

ガリアも叫ぶ。ルカはガリアを思う余り、上半身を柵から大きく投げ出していた。それがいけなかった。そこへ手加減なしのビンタを喰らい、ルカはそのまま溶鉱炉へ向かって落ちていく。ガリアは、窓ガラスの向こう側で無慈悲に展開されている映像を、ただ見ていることしかできなかった。

「トウ、トウワンボが！」

ゾッドも、溶鉱炉に落ちていくトウワンボを、やはりただ見ているしかない。

しかし、トウワンボには奇跡が起こった。

観察デッキのすぐ下には、縦穴を渡るようにして四角い鉄骨が一本。更に中央でそれと交差する鉄骨が一本。計二本の鉄骨が十字に交差していた。トウワンボはそこへ落ち、カン！と、音を立てた。続いてカン！カン！と、音は続く。鉄骨の上を跳ねる度にわずかにコースを変えながらも、トウワンボは炉内に落ちることなく転々と転がる。鉄骨の幅は50センチもないというのに。

ゾッドはそれを見ながら、「ハウッ！ハウッ！」と息を荒げた。そしてちょうど鉄骨が交差している中央の、わずかに広くなった本当にギリギリの端で、トウワンボはようやく止まった。

運と言っしかないが、それはやはり奇跡だった。

残念ながら、ルカに奇跡は起きなかった。ただ一つ、彼女にあったもの。それは天性の反射神経

ルカはトウワンボが転がったのと同じ鉄骨を、左手一本で辛うじてぶら下っていた。

ルカの右の二の腕には、さっきまではなかったはずのアザ。更に腕はすり切れ、指の皮もズルむけ、爪も割れていた。転落を防ぐために、瞬時にあらゆる努力をしたことが知れる。だが今、彼女を支えているものは、左腕一本でしかない。

「アウツ！くっ…うっ…」

あまりの痛みにも右腕が上がらない。いつぶつけたのかも覚えていない。それでもなんとか氣力を振り絞り、右手で鉄骨をつかもうとする。しかしつかみかけたところで無情にも指が弾かれた。ブラブラと体が揺れる。その揺れに耐えかね、ズリリ！と、左手の指ひと間接分、体が落ちた。鉄骨の淵は握りやすくなっていたが、火事場のクソ力にも限界がある。

一瞬、下を見るルカ。山吹色の熱の圧力が彼女を襲う。上昇する氣流も、彼女の助けにはなってくれない。それでもなんとか氣を入れ直すことはできた。

「し、死ぬもんか！」

恐怖を上回る生への執着。それが彼女にはあった。いや、一度生きることをあきらめた自分の弱さを知ったからこそ、より強くなれたのだ。

ルカはもう一度右腕を上げ、なんとか鉄骨の角に指をかけると、懸垂するようにして体を上げた。二の腕の筋肉がブルブルと震える。鉄骨の上面が視界に入った。そして一気に、鉄骨の奥の角に左手を伸ばしてつかまる。

「も…もう少し…」

だがそこへ、ゾッドが降りてきた。

「わ、私のトウ…トウワンボ…トウワンボが…うわっ！とつとつと…」

観察デツキから鉄骨へ飛び降りた途端、バランスを崩したゾツドは、それでもなんとか四つんばいになって溶鉱炉への落下を免れた。そして中央のトウワンボへ向かい、そのままの姿勢で進む。ルカやガリアなど眼中にない。

「アチツ、アチツ、トウ、トウワンボ、トウワンボ…」

息を吐き出すたびに言葉を連呼するゾツド。そして目の前では、ルカがようやく鉄骨に足をかけ、這い上がるうとしているところだった。

「なんだお前はあ！邪魔だ。ジャマあ！」

両の手でドンツ！と、容赦なくルカを突き落とす。鉄骨にかけた足は無情にも滑り落ち、左手も離れる。最後の右手が全体重を支え、一瞬だけ体はゴムのようにビーンと突っ張った。今まで耐えに耐えてきた筋肉も、そこがもう 限界だった。

「きゃああああああ！」

溶鉱炉に絶叫が響く。もはやつかまるべき場所もない。反射神経も意味を為さない。そして不意に、絶叫は止んだ。

ルカの絶叫を止めたものは、山吹色の炎ではない。扉を破壊し、飛んできたガリアだった。背後からガツチリとルカを抱きかかえると直後、抗えぬ重力に数メートル沈んだものの、なんとか持ちこたえて再び上昇を始めた。

「おい！生きてるか？」

「あ…」

ルカは呆然として、意識が飛んでいる。ただ瞳だけがゆっくりと、左右に動く。無意識ながらも身体は状況を把握しようとしている。

「ルカ。お前　こんなに…」

間近で見ると、彼女の身体は打ち身やスリ傷でボロボロだ。爪の間から血がにじみ、左腕や首からは血の流れた跡もある。

「　　ガリア！」

唐突にルカは正氣に戻る。そして気がついた。

「あたし、トウワンボ持ってない！」

「まかせろ」

ガリアはうなずくと、ルカを抱きかかえたままクロスする鉄骨の中央まで飛ぶ。

一方、ゾッドは

「ハア…ハア…よ、良かった。私のトウワンボが、ぶ、無事だ」

ゾッドはトウワンボを前にして、更に息を荒げていた。それでも鉄骨の端ギリギリ数センチで止まっているトウワンボを落とさぬよう、慎重に手を伸ばす。万が一落とせば、彼の野望の全てがそこで終わってしまうのだ。神経質にもなる。だがその寸前、ガリアが慎重さのカケラもないスピードで飛んできて、トウワンボを奪い取っ

た。

「こ、このっ！わ、私のだぞ。うわっ！ガリアか！？」

今さらにして彼の存在に気づき、驚愕するゾッド。それを尻目にガリアは安全な場所にル力を運ぶと、片膝についてソツと、優しく床に降ろした。が、跳ね返るように戻って抱きつくル力。

「ガ、ガリアあ…」

よほど辛かったのだろう。ル力は珍しくガリアの前で涙を見せた。それは嬉し涙でもある。しかし、ガリアは二、三回髪を撫でただけでル力を引き離れた。そして彼女の手を取る。

「このトウワンボはル力が持つてろ。それからこれ」

ガリアは、腰のベルトに差しておいたむき出しの短剣を抜くと、それをル力に見せた。

「血がついてた。ル力の血か？」

彼女は一瞬、自分の左腕の傷口を見て、うなずいた。バンダナは一部スッパリと切れ、ほどけかかっている。

「でも大丈夫。ゼンゼン大した傷じゃないから。血もほとんど止まつてるし」

心配させまいと、ル力は平静を装った。

「そうみたいだな」

「え？あ、うん。平気、平気」

拍子抜けした。もっと気にしてくれると思ったのだ。

ガリアは、短剣を手の上で回して刃先をつかみ、柄をルカの方に向ける。

「これは鞘に収めておけ」

「うん…」

少し寂しげな気持ちで短剣を鞘にしまっていると、ガリアはそつとルカの腕を取る。傷口にバンダナをあてがって結び直しながら、言った。

「この傷は残らないから安心しろ。もう少し深かったら、一生じいさんにウソをつき続ける所だったぜ。じいさんのじゃなく、ゾッドの剣にやられた傷だともな」

「あー！」

短剣はマサムネがくれたお守りでもある。そのお守りにやられたなど、確かに言えない。ましてや残るような傷だったりしたら、マサムネは落ち込むだろう。

気がつくとガリアは手を止めて、ジッとルカを見つめていた。

「でもよくがんばった。ルカが言ったことは本当だったんだな」
「え？」

ガリアには分かっていた。ルカが命懸けで自分を守ろうとしたことを。

「ここからは俺が守ってやる」

最後に手際よくキュツとバンダナを結ぶ。それは決心の証でもあった。迷いのない動作でガリアは立ち上がり、背を向けた。

「あ、ガリア！」

思わず呼びかける。

「見ていたければここから見てる。これで終わりにする」

ルカは黙ってうなづく。もう分かり過ぎるほど分かっていた。もう父親はいないということを……
溶鉱炉に目を向けると、ゾッドは未だ鉄骨からデッキへ上がれないでいた。

「クツ、クソツ！あ、上がれん」

ゾッドは鉄骨から恐々と立ち上がり、控えめなジャンプを繰り返す。それはそうだ。万が一にでもバランスを崩して落下すれば、いかにゾッドとて死ぬしかない。思い切ってジャンプすれば背の高い彼のこと、観察デッキの鉄柵までは届かない距離ではなかった。しかし、それができない。恐怖にすくんでいるのだ。

「クソツ。だ、誰か！」

その時、背後でカツン、という音。それに声。

「俺でいいか？」

ゾッドは振り返る。そこにいたのは、何のバランスの乱れもなく、

鉄骨を歩み寄るガリアだった。炉内の上昇気流が赤い髪を揺らす。

「ハッ、はああ！」

ゾッドの顔が脅威に歪んだ。

「大した溶鉱炉だな。お前の棺桶には立派すぎるくらいだ」
「く、くそお！くそお！どうやってアレシアを！？」

中央まで歩み、ガリアは足を止めた。

「お前に言われた通りにな ツボを刺激してやった」
「ま、まさか、そんな…馬鹿な。そ、そうだ！タ、タイプAに、め、命令を…」

「タイプA？トウワンボ無しでこの場所から命令を送るのはムリだろっ？」

「グッ！」

ゾッドはブルブルブル、体が小刻みに震えだした。怯えているわけではない。それは思い通りにならないことへのいきどおりだった。彼は現実を味わぬまま、育ちすぎた。

「 選べ」

ガリアは言った。

「なんだと？」

「自分から溶鉱炉に落ちるか、俺のチャクラムで死ぬか 選べよ」

無造作に、いつも通りチャクラムを腰から外すガリア。

「なっ!？」

ゾッドの顔が見る見る怒りの表情へと変わっていった。咆哮のような叫び声を上げ、首を大きく左右に振る。すると今度は懇願するように言った。

「い、いや、待て待て! 私は素晴らしい発明をしたんだ。こんな鉄の炉などメじゃないぞ。アレシアを見ただろう? チタニウムという素材。あれはトウワンボ技術の応用によって、抽出した素材なのだ。大発見だぞ。トウワンボを使えばまだまだ、無数の素材を作り出すことも夢じゃない。物質の合成、分離! 夢の新素材だ。その技術は私しか知らん! その私を殺すのかよ! えっ? これから世界は変わるんだぞ。私によって。より便利に! より高度に!」

ガリアはゆっくりと首を振る。

「得体の知れない　いつまた消えるとも知れない力か…。それはお前の力じゃない。トウワンボの力だ」

「だ、だが私はお前の父親だぞ。お前を作ったのは私なんだ。その顔! 瞳! 瞼! 身体! 爪先から指先に至るまで! 私が加工し、仕上げた。その私を、お、お前は殺すのかっ!」

一瞬、ガリアの瞳が遠くを見た。それはこの時代に生まれて、生きてきた数年間。そして百五十年前、記憶ではなく記録であった頃の数か月…

「本心からお前を父と思ったことはない。それでも傷は負った。いや、これからも負っていく。安心しろ。俺だけはお前を悼んでやる。俺の中の魂は　それにルカも、お前を絶対に許さないだろうから

…」

そして最後に言った。

「俺の遠い記憶、いや、記録の中で、ゾッド・シャゾットという人間が語ったことがある。夢はスチーム・ドールを歩ませることだった…と。できるなら俺は、そっち側の夢の産物でありたかった。こんな 得体の知れないものではなく。それならば俺は、お前を父と呼ばたかも知れない」

ガリアは自分の胸を押さえて、うつむいた。それは心の痛み。

現在まで解明されているトウワンボの正体。それは天然原石ではあり得ないということ。ただそれだけだ。トウワン人たちの伝承の中でも、トウワンボはある場所ですとめて発見されたという。ただ、今となつてはそこがどこなのかも分からない。結局、全てが謎なのだ。

「うおおおおっ！し、死ねえええっ！」

鉄骨上を突進し、恐怖をも忘れてゾッドは走る。未だうつむいたままにいるガリアの隙を逃さず、思いっきり突き飛ばしにきた。しかし…

ゾッドはガリアが飛べることを忘れていたのか？

だがいずれにしろ、ガリアはその能力に頼ることもなく反射的にかわし、チャクラムで背後からゾッドを殴った。しかし実際にはその必要すらなかったのかも知れない。もう、彼の足元に鉄骨はない。あとは重力に従い、落ちるのみだったから…

もちろん、ゾッドにル力のような反射神経もない。奇跡も使い果たした。

「うあああああつ！し、死にたくないーっ！死んでたまるかつ！死んでーっ……………」

そして唐突に絶叫は消えた。消したのは山吹色の炎。

ルカは鉄柵から身を乗り出し、ガリアはその場に立ち尽くした。液化した鉄が放つ光に二人は照らされる。ゾッドの肉体のほとんどは蒸発して大気に溶け、残りは溶解する鉄の不純物となった。

やがてガリアは宙を飛ぶと、ルカの元へ舞い降りる。彼女は既に炉に背を向けていて、鉄柵に体を預けていた。物憂げに床を見つめている。

「ガリア…ありがとう。お父さんの仇、討ってくれて 感謝してる」

顔を上げずにルカは言った。

「つらいか？」

素直にうなずく。

「うん…。でもあたしはお父さんの心が好きだったの。心は もうずっと昔に死んでたから。だから平気」

微かなため息。その正面に立つガリア。

その時、突然ガリアの顔がルカに近づいてきた。鉄柵に寄り掛かっていたルカは下がることもできず、彼女はただただ動揺した。

「ちょ、ちよつと…ガ、ガリア？」

両肩に手を乗せ、顔を、体を、ルカに寄せるのだ。胸の鼓動が高

鳴る。

「お、重いよ、ガリア…」

様子がおかしい。ルカにのしかかるように体を預けたガリアは、そのままズルズルと落ちていき、片膝をついた。

「だ、大丈夫!？」

「あ…悪かった。少し…腕と足が痛んで…」
「アレシアにやられたの？」

ルカも屈んで、右腕を押さえるガリアの手に触れた。

「そうじゃなくて…いや、そうだけど。最初にエンドラでヤツと戦った時の。まあ、古傷がな」

ルカは思い出した。確かにあの時もガリアは同じように倒れた。

「あ、でもなんで今頃？」

「最初に気づいたのはもっと前　ルカが熱でふせってる時に、じいさんの鍛冶場で。鉄の熱膨張が中の水晶を圧迫するんじゃないかって。ここも暑いからな。でも大丈夫だ。冷やせば治る」

「そういえばガリア、さつき痛いって…。痛み感じるの？」

「不思議だろ。鉄なのに」

「あ、別にそういうイミじゃ…」

「いや、不思議なんだ。痛みなんて前は感じなかった。俺の中にはルカの父親の魂がいるから、その魂が知ってる痛みの感覚を、水晶の圧迫感とつなげてるんじゃないかって。そう考えたんだけど…」
「違うよ」

キツパリとルカは言った。

「違う?」

「うん、違う。それはね、ガリアが人間になったってことだと思うな、あたし」

「そう…なのかな?」

「そう!だってその方がいいでしょ?」

ルカはニツコリ笑う。『人間になった』それはマサムネにも言われた言葉。でもそれ以上に、ルカから言われることが嬉しかった。

「科学の子が聞いて呆れるぜ。でも　いいな。それ」

ガリアは笑った。

「そうだ!ねえ、ガリア。お礼は何がいいかな?仇討ちの」

「お礼って　別に俺はルカのためにやっ たってわけじゃ…」

「ううん、それでもいいの。…そうね」

「なんだよ?」

「キスしてあげようか?」

一瞬の間。凍り付くガリア。

「あ、ホラ、痛みを感じた記念ってこともあるしね」

ルカは少し照れるように笑った。

「俺の顔は鉄だぞ」

「うん。でもあたし、鉄好きよ。知ってるでしょ?」

「そうだったな…」

何がそうなのか？それでもガリアはなんとなく納得した。

「分かった…」

「じゃあ、行くよ」

ルカは膝をついて、片膝を立てたままのガリアの横顔を見る。やがて吐息を感じるほどの距離感で不思議と、ガリアから体の痛みが消えた。

守るべきもの

横に寝転がるそれは、最初、腕は肘の間接から左右とも逆側に曲がり、首も不自然なほどに折れていた。その生命感のない骨格のまま、それは手をついて立ち上がるうとする。しかしバランスを崩して無様に倒れた。だがそれでも床を這いずり回りながら、徐々に間接の位置を調整していくと、ようやく立ち上がり、体を宙に浮かせた。が、思わしくない。バランスが悪い。ふと、足を一本失っていることに気づく。膝から下が無いのだ。

それは未だ静止することのない、アレシアの姿だった。

ホールの一角に膝から下のパーツと、さらに間接の鉄球を見つけたアレシアは、弧を描くようにして這い、なんとかそこまで辿り着こうとする。這ってさえ、真つすぐ進めないのだ。それでもなんとか辿り着くと、パーツの一つ一つを所定の位置に当てはめていく。異常はない。パーツは吸い付くようにアレシアの体にはまった。

今度は全く違和感なく立ち上がり、ホールを見上げる。もはやそこに、さっきまでの無様なアレシアの姿はない。

チタン製の臉をいったん伏せた後、アレシアは地面からゆっくりと離れていった。そしてその上昇に呼応するように、ホール内壁をレリーフのように飾る『タイプA』たちが動き出す。

百体にも及ぶ彼らは、手を、肩を、その他全てのパーツを一つ一つ確認するように動かしている。動作チェックだ。アレシアが塔の屋上付近に辿り着き、全てのタイプAの動作チェックが終わるまでには、かなり長い時間を要した。

やがて百体分の起動作業は完了する。

「まだ 終わらない…」

その、執念に取りつかれたような声。それは、意志のないはずのアレシアが、初めて発した念だった。

「そういえば痛かったんだよね。ゴメン。あたしヘンなこと言い出しちゃって」

ガリアとルカの二人はまだ、溶鉱炉のある部屋にいた。右腕を押さえていたガリアが、軽く首を振る。

「気にするな。それより上の方に窓があるな。あそこから直接外に出られそうだ」

ガリアは、部屋の天井付近にある窓を指差して言った。かなり高い位置だが、空を飛べる彼には関係ない。

「エンドラは、このまま？」

「ああ。別に俺たちはエンドラを破壊しに来たわけじゃない」

「タイプAとかは？確かプログラムが入ったままなんじゃ？」

「タイプAはゾッドの思念しか受け入れないようにプログラムされていた。放って置いて問題ないだろう。そう」

ガリアがふと思い立った。

「それとアレシアも」

「え！？アレシア、倒したんじゃないの？」

「動けないようにはした。ただ、壊れたかどうかまでは確かめるヒマがなかったんだ。もっともヤツもゾッドの命令がなければ動けないのは一緒だからな。問題ないさ」

「でも…」

ル力は不安そうに続ける。

「例えばさ、自分の主人が死んで怒ったりとか　ないかな？」

ガリアは首を横に振る。

「アレシアに感情はない。少なくともまだなかった。俺が言っただから説得力あるだろ？」

するとようやく、ル力は笑った。

「良かった。これ以上戦って壊れるのはね。見たくないんだ。この都市のどこかにお父さんが作った会社もあるんだろうし…」

「そうだな。俺も早くル力が物を作るのが見たい」

すると、ル力は目の色を変えて大声で迫る。

「ホント！？ホントにそう思う？」

「あ…ああ。ル力の作るものは好きだ」

その一言はル力を歓喜させた。生み出したものが他人に認められた時の喜び。ましてガリアに誉められるなど、考えてもいなかったのだ。ル力は押さえようにもこぼれるような笑顔で笑う。

「何いつまで笑ってんだよ。さっさとマサムネのところに帰　えっ？」

「え、なーに？」

つい笑顔で聞き返すルカだったが、すぐにガリアの様子がおかしいことに気づいた。

ガリアはつぶやくように言う。

「声が…」

「声？」

意味が分からない。しかしガリアは真剣だった。

「誰が…呼び掛ける？」

「呼び掛けてるって あ、あれ？」

異変はガリアだけでは済まなかった。

「なんだろう？ヘンだ…あたしも…」

それはまるでラジオのチューニングを合わせるかのよう。何者かの声が最初は遠く、時に近く、そして突然クリアになった。いや、それは声じゃない。正しくは思念。瞬時に誰のものなのか分かる思念。それが呼び掛ける。でも二人には信じられない。というより有り得ない！死んだはずだ。

（ガリアあ。聞こえるだろう？私だあ）

二人は同時にお互いの顔を見た。そしてこの異変が、自分だけに起こった幻聴などではないことを確信する。

「きさま、ゾッドか!？」

「な、なんで…？」

（ハハハハッ！私は本当に運がいい。何しろこうして入れる肉体が、まだ残っていたのだからな。いやいや、私自身が持つ気力にも畏敬の念を感じてもらいたいもんだがなあ。今私はアレシアの中にいる。そうだ、ガリア。アレシアにとどめを刺さなかったお前のミスだよ。フハハッ！）

ガリアは拳を握り締める。

それは執着だ。ゾッドの生に対する並々ならぬ執着。それ以外に理屈などない。だがただ一つ、アレシアの中に心の仕組みが出来上がっていたことは、ゾッドにとって幸運だった。魂が入ることを可能にした。

（さあて早速本題だが、私の要求は分かるな？もちろんトウワンボだ。私はホールにいる。すぐに持つてこい。そうすればお前たち二人、逃がしてやってもいい。抵抗は無駄だぞ。タイプAの起動は既に完了している。ハハッ！勝てまい？逃げられまい？タイプA百体とアレシアの力を持ったゾッド・シャゾット様だからなあ！ハッハッハーだっ！たあーのしいーなあー。生きるってのはさあっ！）

そして不意に、ゾッドの念が消えた。

「あ…」

ゴウゴウと鉄の煮えたぎる溶鉱炉の音が、突然の静けさを演出する。

正直、二人にはショックだった。特に思念の影響をよりまとともに受けたガリアは、ゾッドを殺すことなど不可能にさえ思えた。それは強靱な生命力に対する、純粹な恐怖。

「ルカ、トウワンボを貸せ」

右手を差し出すガリア。ルカは真剣な、探るような瞳でしばらくの間、ガリアを見つめる。そして言った。

「いやよ」

その声はきつぱりと、しかし冷静だった。

「なぜだ？」

「じゃあガリア、答えて。このトウワンボをどうするつもり？」
「溶鉱炉に投げるだけだ」

その言葉は予測していた。なぜなら瞳が語っていたから。ルカは奥歯を噛み締め、両手にトウワンボを握り、ガリアから背けるようにして言う。

「ぜったいに渡さない！そんなことしたらガリアだって死んじゃう」
「でも他に方法はない。ゾッドは俺たちを生かすつもりなんて、さ
らさらないぞ」

「だからってそんな方法　　ねえ！このトウワンボで何とかできないの？」

「ゾッドならタイプAのデータを消去することもできるだろうが…
俺にはムリだ。プロテクトがかかってる」

「戦ったらやつぱり…？」

「勝てない。数が多すぎる」

きつぱりと答える。

「じゃあ逃げれば！」

「思念が入ってきたのは、俺たちの動きがマークされてる証拠だ。

外すには距離を取るしかないが、俺のスピードじゃダメだ。だからそのトゥワンボを貸せ」

「いやっ！」

首を振り、ルカは大声で拒絶した。

「いいから貸せ！それで全て終わる」

「なんでそんな簡単に言うの！ガリアだって死んじやうのに なんでそんな簡単に言えるのよ！！」

「ルカが生き残るにはそれしかないんだ！！さっさと貸せよ！」

ガリアはルカの腕を強引に取った。それを嫌って、床にうずくまるルカ。

「いやだ。生きなくていい！ガリアの身代わりでなんて生きなくていい。生きたくない！」

そして顔だけをガリアに向けて、叫ぶ。

「生きるもんかつ！」

「馬鹿なこと言うな！」

ガンツ！と、押さえきれなくなった興奮を、ガリアは拳で床にぶつけた。それでもルカは負けない。

「馬鹿なことじゃないっ！あたしはガリアと一緒に生きたいんだよ。それが大事な。ねえ、生きよう！死のうとするガリアなんて見たくない。だったら先にあたしを殺してよっ！一瞬の痛みで済む。あたしのためにガリアが死んだら一生痛い。そんなのヤダッ！」

床にはポタポタポタ…涙が落ちる。そして堪えきれなくなつたのだろ。ル力は、わんわんと泣いた。だがそれでも、トウワンボを絶対に渡さないという意志は固く、拒絶する姿勢を全く崩さない。

ガリアはしばらくの間、それを見ていた。そして思う。この少女と接している時、自分はどんな人間になつていく　と。もちろんそれはいつも思っていたことだ。でも今この時ほど、強く思ったこともなかった。

他人を　ル力を守るということがどういふことなのか？　ずっと考えてきた。単に命を守ればいいと思っていた。でも違う。少なくとも彼女に見せる最期の姿は、トウワンボを壊して、バラバラになつて死ぬことではない。その時のル力の痛みを考えた時。それを自分に置き換えた時。そんな選択は生まれない。生まれるはずがない。

『ガリアの痛みは、あたしの痛みでもあるって、分かったから…』

以前ル力が言った言葉を、ガリアは思い出していた。

「そついうことが…」

戦うこと。やるだけやること。それで結局同じ結末が待っていたとしても、残すものは違う。少なくとも、死ぬ間際に見る夢は違うはずだ。それが守るということ。

「悪かった…」

ガリアは立ち上がる。そして、うずくまつたままのル力の頭にそつと手を置いた。顔を上げるル力。そしてその手を彼女の前に差し出す。一瞬警戒されるが、ガリアは笑って答えた。

「違う、違う。トゥワンボじゃなく…手。出せよ、ホラ」

ガリアは、ルカの差し出す手をしっかりと握ると、グイッと引張って立ち上がらせた。彼女はまだスン、スン、と、時折鼻をすすり、瞳からは涙がこぼれ落ちていく。ぬぐおうとするルカの手を追い越して、ガリアの指先がこぼれる涙をすくった。

「それ以上サビても知らないから…」

憎まれ口にも、ガリアは笑って答える。

「俺の手は合金だぜ。そう簡単に錆びるかよ」

ルカはガリアの胸にコツンと額を置いて、残りの涙を彼の衣服で拭き取る。そしてそのままの態勢で言った。

「どうするつもりなの？」

「まあ…戦ってみるさ」

ガリアは気楽に答える。

「あたしも 戦いたい。ガリアのこと、守りたいもの…」

ガリアは黙ってうなずいた。どうせ止めても無駄なことは分かっている。それはお互いが胸の内に秘めた、ある種の決心。

とその時、ガリアがある音に気づいた。

「なんだ!？」

それはルカにも聞こえた。

予期せぬこと 恐らく誰一人、予期していなかったに違いない。
ガリアやルカだけではなく、ゾッドでさえも。

ズズーン、という遠くから響く音。それがきっかけだった。

「うわっ！」

「キャアッ！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ...

それは音と言うよりも衝撃。二人を叫ばせたものは、爆発音の後に続く地響きだった。そして爆音は尚も続く。地響きは、更に大きくなっていくのだ。

「な、な、何事だあ!？」

ゾッドが叫ぶ。その衝撃はホールにも いや、むしろホールに直接的に響いてきた。

「じ…城塞砲か!ガ、ガリアのはずがない。では一体誰が!？」

ドーン!ドーン!と、弾は断続的に何発も何発も塔に命中し、その度に壁面がえぐられ、破砕される。

ホールの中は尚凄まじかった。塔を形成する切り石やその破片が、次々と崩れ落ちていく。一部のトウワン水晶入りの切り石も、そのほとんどが衝撃によって破壊され、塔の安定を更に奪う。今や破片は内に外に雨の如く落下し、地響きを轟かせていた。影響は塔だけではない。ようやく起動を完了したタイプAにも当然及んだ。落下する岩の直撃で破壊、又は叩き落とされ、次々に埋もれていく。最後まで外の目に触れることなく、まして神の威厳など残すこともな

く、百体ものタイプA全てが、潰えようとしている。

「うっ、うわあああああああ！」

そしてその中でアレシアの　いや、ゾッドの叫びはあっという間にかき消されるのだった。

それはもう塔とは呼べない。瓦礫の山だ。しかし砲撃は尚も続く。今や破壊された塔に変わって、残りふたつあるエンドラの他の城塞砲がターゲットとなった。狙いはほぼピンポイント。ようやく東の空から昇り始めた猫の爪のような月も、射撃手に微力ながら手を貸す。だがそれ以上に、ガリアをも恐怖させた射撃のカンの良さが、それを成し得ているのだ。砲撃は的確に塔を破壊していく

そう。それはゾッドに死刑を言い渡された衛兵の仕業だった。これは彼が起こした自国に対しての反乱なのだ。生きるための炎を消そうとした者に対しての、言わば復讐。それは、彼が守っている誰かのためであつたかも知れないし、守るべき何かへの執着であつたかも知れない。どうにせよ根に秘めたものは変わらない。

活気のないこの世界においても、異端者は確実に生まれている。やがて彼らが異端者ではなくなるような時代。おそらくは比較的近い未来に、世界は再び動き出すだろう。トゥワン人に蹂躪される前の先進国がそうであつたように。またそれに代わり、新しく生まれた初期トゥワン王朝がそうだったように。

それが文明の流れであり、波でもある。底の時代に生きる人間たちに未来を感じることができなくても、未来は必ずやって来る。世界を変える力、技術、魔法、何でもいい。それは必ず現れる。そして再び、新しい活気が生まれるのだ。ただ、それがどういう文明なのかは分らない。ならば生きるしかない。それが駄目なら、子孫に委ねるしかない。

いずれにしろ、世界はそう簡単には終わらないのだ。

死ぬ間際に見る夢

エンドラの都市を照らす明かりが突如消えた。今そこに陰影を落としているのは微かな月明かりだけで、通りゆく薄い雲が時折、その光をも奪う。さっきまでの砲煙が上空に上がり、雲となったのだ。今や新たに生まれる砲煙はない。静かなものだ。もちろん、エンドラ中がパニックであることは変わらない。しかしこの一帯、塔の周辺だけは、そういった喧騒を起こす人間の姿はなかった。ガリアとルカの二人を除いては…

二人は溶鉱炉から脱出した後、しばらくの間空中でその凄惨な、塔が崩壊して行く様を見ていた。ゾッドが中から出てくる危険はあったが、それでも逃げようとは思わなかった。逆に見とれていたのかも知れない。時に破壊は、人の目を捉えて離さないものだ。

ようやく砲撃が止んだ時、城塞砲から逃げ出していく一人の男。彼は一体誰だったのだろうか？それになぜこんなことをしたのか？ガリアたちには知る由もなかったが、思わず彼の無事を祈らずにはいられなかった。

もう砲撃がないことを知った二人は、恐らく死んだであろうゾッドや、破壊されたタイプAの存在を確認するために、地上へと降りていく。

「ここで待つてろ。塔を調べてくる」

塔　　というより瓦礫から少し離れた場所にルカを残し、ガリア

はゆつくりとそこへ近付いて行つた。正に巨大な山となつた瓦礫の前にしてガリアは立ち止まる。そして、生きているトウワン水晶の存在がないか、瞑想しようとした。

瓦礫の隙間。暗闇から風が　ガリアの脇をすり抜けた。

「キヤアア！」

背後でルカの声。

「しまった！」

瞬時に振り返つたガリアが見た先。そこにはアレシアが　いや、ゾッドがルカを片手で羽交い締めになっている。

「お…お前が二、憎い。なぜうまくイカンのか？全テうまくいつて…タ。私に八運が…いやっ…チ、違う。お、俺ノ力…ダ。なのに…ガ…お、才前が全てっ…クッ！クソッ！お前がに…憎イ。お前をこの手デ…コ、殺しタイ。殺したいヨおオオ！」

ゾッドの憎しみはそのまま、ルカを締め付ける力となつた。そのきゃしゃな骨が、ガリアにもはつきりと聞こえる、バキン！という音を立てる。

「あうっ…うあっ！」

ルカは、痛みから逃れるために体を伏せようとする。が、ゾッドの力がそれを許さない。ムリヤリ態勢を起こされて背は逆海老反りになり、体は浮きかけ、肩の間接は外れかかっていた。それでもガリアは構わず、歩み寄っていく。そうすることでは彼女を救えないと　そうガリアは判断したのだ。

「そんな荷物を抱えて俺を殺せるのか？鉄球はどうした？」

ガリアはチャクラムをホルダーから外す。

「て、て、テ、鉄球？そんなモン…あるかよバーカ。この女は盾だア。そのチャクラムを飛ばすが最期。死又ぞ。こ…この女。死又…よ。ツ、次の瞬間オ…お前も死ぬヨ。俺はお前…ヨリ早い」
「ルカ、動くなよな」

痛みにルカは答えられない。

「バカがあ！盾ハ俺がうゴ…動かスン…だよ。し…死ねよオオオオ
っ！」

ゾッドはルカを盾にして、一気に距離を詰める。そのダッシュ力はまさにアレシアのものだ。

ガリアは、腰の辺りに下げ持っていたチャクラムを軽く放り投げ、後は念によって一気に飛ばし、加速させた。

「行けえええっ！」

ガリアの叫び。

ゾッドはガリアがチャクラムを放った瞬間、その軌道を解析し、ルカの体をその線上に持つていこうとした。

しかし、ゾッドの心はまだ人間だった。人間の速度で物を捉え、人間の速度で思考していた。それは単に慣れの問題。いつかは使いこなすだろう。が、少なくとも今はまだ、アレシア本来の能力には遠く及ばなかった。ガリアは、ゾッドの言葉の不自然さから、そのシンクロの悪さを見抜いていたのだ。

ガキンッ！

チャクラムはルカを締め付けているゾッドの右腕に、見事命中した。彼には何も見えなかっただろう。ガリアのチャクラムは人間の目には速すぎる。

ゾッドの右腕が後方へ弾かれた。その瞬間、ルカの体は放り出され、すかさずガリアが受け止める。しかし、その上からそのまま覆いかぶさるうとするゾッド。せめて、ガリアを捕まえて、力任せの接近戦に持ち込もうというのか？

「このヤロウッ！」

ガリアはそのまま仰向けに倒れ込み、下から強烈な蹴りを、ゾッドの腹部に当てた。柔道の巴投げのような形となつて、ゾッドはガリアの後方へ飛んでいく。完璧なタイミングだった。

「おアあアアッ！」

ガシャーン！

ゾッドは再び塔の瓦礫の中へと突っ込み、その上を更に、大小様々な破片がガラガラと崩れ落ちる。ガリアは仰向けのままそれを確認すると、すぐに両腕に抱いているルカを見た。

「ルカ！大丈夫か？」

一瞬の間。

「い、イタタタタ…だ、大丈夫」

両肩を押さえて痛がるが、大丈夫そうだ。少なくとも命に別状はない。

今はそれ以上ルカを気遣ってる暇はない。ガリアは彼女を抱いたまま、浮かぶように立ち上がって、瓦礫に向けて瞑想する。さっきの一撃はツボに当てたわけではない。すぐにまた、襲って来るはずだから…

「……」

しばらくの間、ガリアは黙ったまま何も言わなかった。

「どうしたの？ゾッドは？」

ガリアはどこかうわの空で、ルカに顔を向けた。虚無感と言うか、ついさっきまでとはまるで、にじみ出る空気が違うのだ。

「ねえガリア！どうしたのよっ！？」

「ん…」

そしてようやく、言った。

「…ルカにも聞かせてやる。ゾッドの声…」

「え？」

それはゾッドの個人的な思念だった。本来なら聞こえないものだが、プロテクトする余裕もないのだろうか？ガリアには聞くことができた。彼はそれを、自らのトウワン水晶を介してルカにも送ってやった。

（…たまるかッ！死んデ…お、才前…ダ、誰だよおオ…なんで、な
んで俺ヲ…食べるンだよ。死んでたまる力…死んデ…ニタくない…
死にたくないヨあ…。食べるナよ。俺ガ…なくする。なんで、ナン
で…ズッと好きダったノに。な…デ僕を…捨テ…の…才母…
さん。いきた…ない。ダって…つまら…ない。みんな…ボク
…バカに…先生モ…みんな…お母サ…ん…母…さ…
…好き…なの二…なん…で…スキ…）

やがて思念は聞こえなくなった。

「い、今のは…何？」

ルカはガリアを見る。彼は正面を見据えたまま、答えた。

「ゾッドの心が食われたんだ」

ルカの顔が一瞬引きつって、逆に笑顔のようにさえた。

「食べられたって…誰に？」

「アレシアだ。ヤツの中には心が 感情が芽生え始めてる。きっ
かけはゾッドの魂だったのかも知れない。でもその成長にゾッドの
心がジヤマになったんだろう」

「そんなことが…」

「ゾッドもずいぶん抵抗していた。持ち前の執着でな。でも戦う相
手が分からなくて困惑しているようだった。ゾッドは意外なモロさ
を見せた。見えない敵に対する弱さ…。ヤツが恐怖を感じた時、一
気に均衡が崩れるのが俺にも分かった。もし相手がアレシアの中に
生まれた心だと知っていたら、勝敗も違ったかも知れない」

「お父さんと 同じに…」

小さな声で、ルカが言った。

「ああ。結局ゾッドはルカの父親にしたことを、アレシアにされたわけだ　できすぎだな」

ガリアは、地面に落ちていたチャクラムを念で呼び戻すと、右手でキャッチしてホルダーにしまった。

「さあ！今度こそ帰ろうぜ。ルカ」

ガリアは努めて明るい声で話しかける。それは、思考で埋没しうになつていたルカを、救う言葉ともなった。

「え？あ、うん…。あ、でもアレシアは？いいの？ほつといてさ。だつて例えば　」

ガリアは、ルカが喋っているのも構わずに抱き上げた。それはごく自然に　ルカも言葉を止めることなくガリアのするに任せている。

「　例えばトウワンボを狙つて、またガリアの命を狙いに来るか。もしかしたらゾッドの影響を受け継ぐ可能性だつてあるわけでしょ？心、食べちゃったしさ。だつたら！」

倒すなら今！そんな思いでルカは力説する。

「俺に生まれる前の子供を殺せつてのか？」

ガリアは笑いながら、できないよとばかりに首を振った。
ルカもあつさり笑う。

「そうね」

そして地面を離れ、二人は城壁を越えた。

いつしか東の空に浮かぶ雲はその腹に暁の光を受け、日の出が近いことを告げている。

二人がかつて体験したことのない、最も長い夜は、ようやく終焉を迎えようとしていた。

だがまだだ。まだ終わらない。もう一つ、最後にすべきことがある。長い夜。それはマサムネにとっても同じことなのだ。彼は今もたぶん二人のことを想い、鉄を打ち続けているだろうから…

二人は夜が明けたことを告げに、マサムネの元へと向かうのだった。

終章

「突然思い出しちゃった。帰ってきた時のマサムネ。意外に冷静だと思ってたらさ、握手をギュツて。ううん、そんなもんじゃないなボキッ！とか鳴ったもん。骨折れたかと思ったよ。でもまあ、嬉しいんだろぅなあって思った。あたしもさ。帰ってきて良かったって……」

夕刻。黄昏色の海岸を、ガリアとルカの二人は並んで歩いていた。時に打ち寄せる波と戯れるルカ。もちろんガリアは一緒になって海水に浸かるようなことはなく、ただ黙ってそれを見ていた。

「一度酒を飲ませてみるといい。どれだけ嬉しかったか分かるぜ」
「え、ホント？へー意外」

悪戯な笑みを浮かべるルカ。
そしてとりとめのない会話。

一晩中寝ずに待っていたマサムネのことや、ルカも泥のように眠ったこと。ガリアはいつもの倍は寝たし、起き抜けに見る夕日をルカが朝日だと勘違いしたこと。今夜は眠れるのだろぅか？ということなど。それはようやく戦いが終わったことを、それが夢ではないことを、確認する作業でもあったかも知れない。

「それで何、用事って？こんな遠くまで連れてきて。嬉しいけどさ。
海 初めて会った日以来だね」

ルカは思い出して、クスツと笑った。ガリアがすごく無口で、一

人膝を抱えて海を見ながら、一緒に来たことを少し後悔し始めていた時のこと。

「海が一番いいだろうと思ったんだ。ルカも見ておく権利あるしな」
「？」

ガリアはふところからトゥワンボを取り出し、ルカに渡した。

「これがどうかしたの？」

ルカはトゥワンボをマジマジと見た後、首をひねりながらガリアに返した。

「もういいな…」

そう言うつと、ガリアはおもむろにトゥワンボを海へ向かって投げた。

「ああっ！？」

思わずルカは叫ぶ。

トゥワンボは夕日の光を受けて一瞬、輝いたようにも見えた。が、あつという間に東の薄暗い空の中へ消え、おそらくは着水、海底へと沈んだ。

ルカはガリアを見る。言葉が出なかった。ただ口をパクパクとさせる。

「ルカが起きてくる前、じいさんと話し合ってたんだ。こうしようってな。じいさんは納得してくれた」

「で、でも…。もしも壊れたらどうするの!」

納得できずに、ル力は詰め寄る。

「そう簡単には割れないだろ。百五十年の風雪にも傷一つなく耐えたんだ。トウワンボはただの石じゃない」

「かも知れないけど　でもどんなに硬くたって必ず浸食する。波に揉まれたらいつかは砂になっちゃうよ。あたし、今から泳いで取りに行ってくる。マサムネに複合特性の鉄の箱でも作ってもらってヒマラヤの秘境かどこかに埋めよう！それだったら絶対安心だし、ガリアも死なない」

慌てて駆け出そうとするル力の肩を、ガリアは落ち着いた様子でつかんだ。

「いいんだこれで」

「でも！」

ガリアはそれでも首を振る。

「ル力だっていつか死ぬだろ？同じとき。トウワンボがいつか自然に帰る時まで、俺は生きるんだ。そういうのがいい」

事もなげに言う。

ル力は反論できなかった。しかしそれでも不満そうにしているル力の頭を、ガリアはクシャクシャツ、と撫でた。

「それに、こうしておけば最期の時が来ても自然に帰るんだって　そう思うことができる。例え『失われた時代』と同じ理由で死ぬにしてもな。得体の知れない理由で死ぬなんて、思いたくないだろ？」

もはやルカは何も言えない。たぶん同じ立場だったら自分もそうしていたらう。そう思えたからだ。ハッキリと口にはしなかったが、少なくとも彼女の表情から不満顔は消えた。そしてポツリと言った。

「…トウワンボって、なんだったのかな？」

ガリアは記憶以前、それが記録であった頃の出来事を思い出した。

「オリジナルのゾッドは昔、こんなことを言ったことがある。トウワンボは魔法。科学では太刀打ちできない…ってな」

「魔法…か。そうね。かなわないもん。あたしの作るものじゃ…」

軽いため息混じりのルカの言葉に、ガリアは黙って首を振る。

「俺にはルカの作るものだって魔法だけだな」

「え？でも　そんなスゴイ物、まだ作ってないけど…」

照れ臭そうに、ルカは髪をガシヤガシヤと掻いた。

「そんなことないさ。送風扇から熱風が出たり、洗濯の水が沸騰したり、それから撃つなって言ってるのに城塞砲ぶっぱなしたりな。もしかしたらルカそのものに魔法がかってんのかな？」

人差し指をクルクル回しながら、ガリアは笑う。

「ひつどい！ちょっと期待しちゃったじゃない。なんか誉めてくれるのかなあって」

ルカはガリアの背にのしかかるようにして責め立てた。というより、じゃれ合った。海岸に落とす長い影がひとつになる。

「誉めたんだぜ。ゾッドは予測したものしか作れない。でもルカは予測できないものを作る。ルカならトウワンボだっていつか作れると俺は思っけどな」

ガリアはルカの顔の間近で、そう言った。

やがて…

夜の闇がゆつくりと、二人を包んでいくのだ。

ふと、マサムネは窓の外がすっかり暗くなっていることに気づいた。そして満足そうにニコニコと笑うと、夕食の準備をしながら期待して待つのだった。

二人の言い訳を…

おわり

終章（後書き）

作者の克太タツミです。

「ガリア」を最後までご愛読頂き、ありがとうございました。

この作品を執筆・完成させたのは1998年のことで、もう10年も前の作品となっていました。

時間が経ったものであると共に、こういった、ややライト向けを意識した初めての作品ということもあり、ぎこちない部分も有ったとは思いますが、如何だったでしょうか。
よろしければ感想などお聞かせ頂ければ幸いです。

またこれからも、新たな作品を投稿していく予定ですので、応援よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7577e/>

ガリア

2010年10月8日11時22分発行